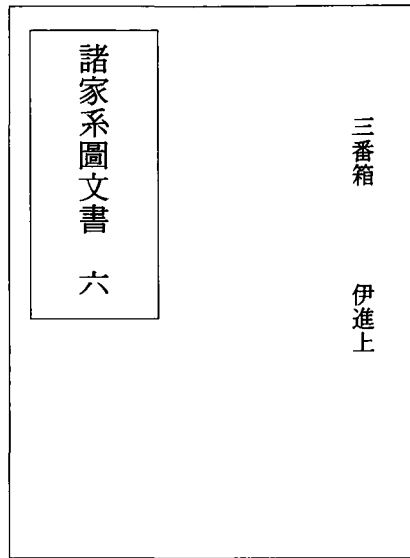


(表紙)



- 諸家系圖六
- 一 肝付氏系圖文書數十家
- 一 藥丸氏系圖
- 一 津曲氏系圖
- 一 勝部氏系圖
- 一 鹿屋氏系圖文書
- 一 鹿屋氏庶流系圖文書

(中表紙)

「肝屬氏系圖」

482

『肝付源助』

兼義

宮内丞 加賀守

古系圖二

廻之城忍落御奉公候處、嶋津殿陣取彼城御抱候時、

濱ノ口合戦ニテ打死、

家傳二

廻之城ニ忍ニ參、一夜馬ノ水舟をかつき忍居申候而、

城中之躰申入、無程肝屬殿御手入候、加賀事者溝邊

地頭仕罷居申候、

法名自光見照居士

兼 (44)

三郎九郎 九兵衛

庄内陣ニ參、於彼地戦死仕候處、家来之者片袖

切落され罷婦候故、三郎九郎女房、主を見捨かへり候段不届之由申、追出由候、  
法名學蟬金上座

女子

鈴木四兵衛妻

兼

三郎九郎 九兵衛 母鷲津不動院女

法名元剛正金信士 年七十九

兼

宗右衛門 早世、母倉元七左衛門女

女子

伊藤茂左衛門妻 母同、

兼

八右衛門

寛永十六己卯誕生、母同、

兄宗右衛門早世故為家督、

天和三年癸亥五月三日死、法名金室金剛信士

兼福

八郎 九兵衛 源介

寛文三年癸卯四月十日誕生、母倉本十兵衛女

僧

白阮 早世、

483

『肝付次右衛門』

兼 (144)

伴九郎 弥五介

義弘公奉供、朝鮮國赴戦死、

兼

傳右衛門尉

弥五介依無子成養子、實父肝付金右衛門尉兼利

之嫡男也、万治元年九月八日死、法名光徹芳清

禪定門

兼頼

弥兵衛尉 母福山曾早兵衛尉娘

傳右衛門尉依無子養子、實父大窪主稅助二男也、

寛文八年申八月七日死、法名秀關了徹居士

兼廣

弥八左衛門尉又次右衛門尉 母中村主水氏政娘

寛永十九年午六月十五日誕生、

兼近

弥七左衛門尉又三右衛門尉 母右同、

慶安二年己丑十一月廿二日誕生、

女子

母右同、

神宮司伊左衛門尉純順妻

延宝八年庚申十一月廿六日死、法名圓心妙通

大姉

兼

弥八左衛門尉 母坂元半兵衛尉公武娘

元禄五年申七月晦日誕生、

女子

母勝目長右衛門尉娘

村田長左衛門尉經義妻 元禄三年午十二月廿六

日死、法名雪窓妙庭大姉

女子

母堀吉右衛門尉與房娘

女子

母右同、

484

伊賀守兼心男

兼光

『肝付源之丞』

兼利 伴六 伴左衛門  
伴七 金右衛門  
備

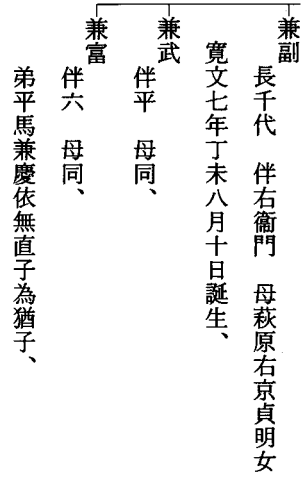
兼知 伴四郎 大右衛門  
兼成 伴四郎 無子孫、  
孫三郎 兼清 三郎次郎 無子孫、  
兼 法号善宗守慶居士  
与助

兼供 長千代 彦兵衛 母隈本久左衛門女  
實松本彦右衛門政次子也、孫三郎兼次依無世子為  
嗣子、  
慶長十八年癸丑十月十八日誕生、奉仕于 太守光  
久公 綱久公、供奉江府者數十个度、其間或十年  
或三年留滞江府、且明曆三年丁酉正月、江城大災

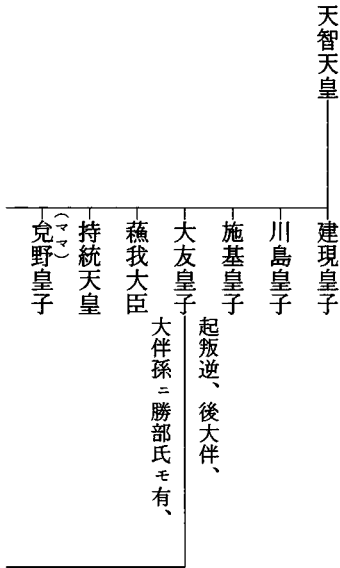
上、此時在府致忠勤也、勤於大坂藏役三年、渡琉  
球國後渡大島、貞享四年丁卯十一月廿日病死、年  
七十五、法號張岳自弓居士

女子  
町田勝左衛門忠親妻 母大山吉右衛門女  
兼逢 長千代 伴右衛門 源之丞 母同、  
寬永十八年辛巳七月九日誕生、天和元年辛酉十月  
吉貴公始江府御參勤、過於小倉路渡于長門州赤間  
関、經於中國路赴于大坂、以 高命為驛路行程巡  
見、兼日被遣於兼逢定驛亭旅館等事、後又隨高駕  
赴江府、

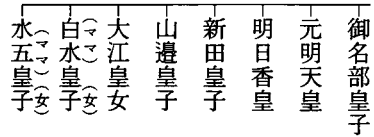
兼慶 藤左衛門 伊右衛門 平馬 母同、  
兼富 伴六  
依無直子兄源之丞兼逢三男為猶子、



伴家系圖



『肝付金右衛門』



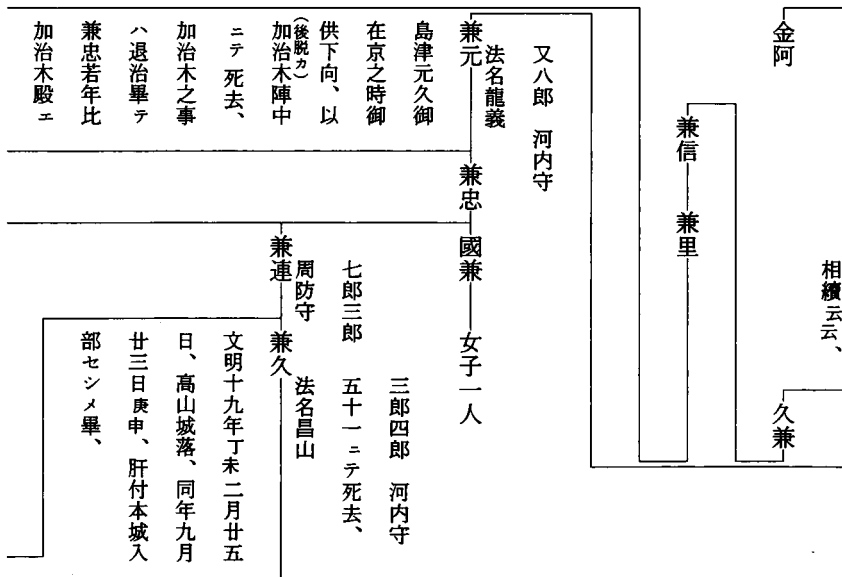
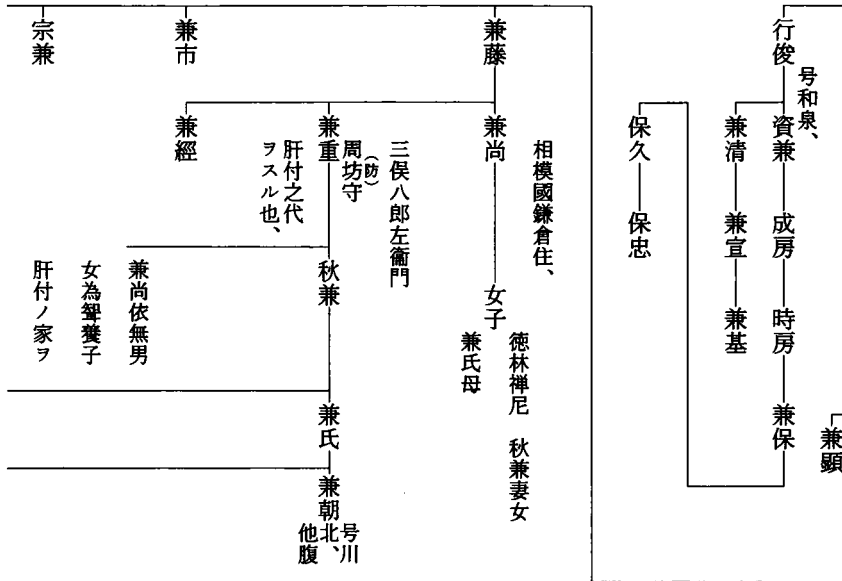
余那足 内大臣 賜伴姓、  
善名 大納言

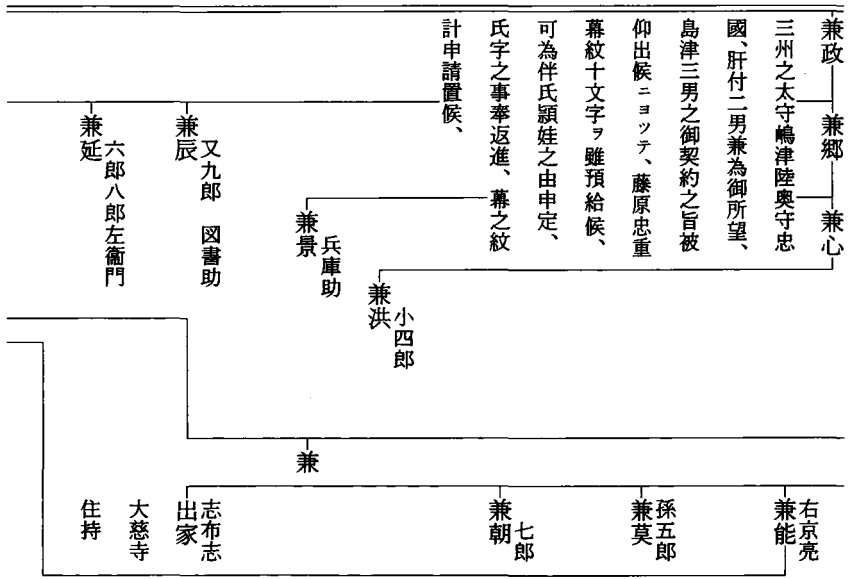
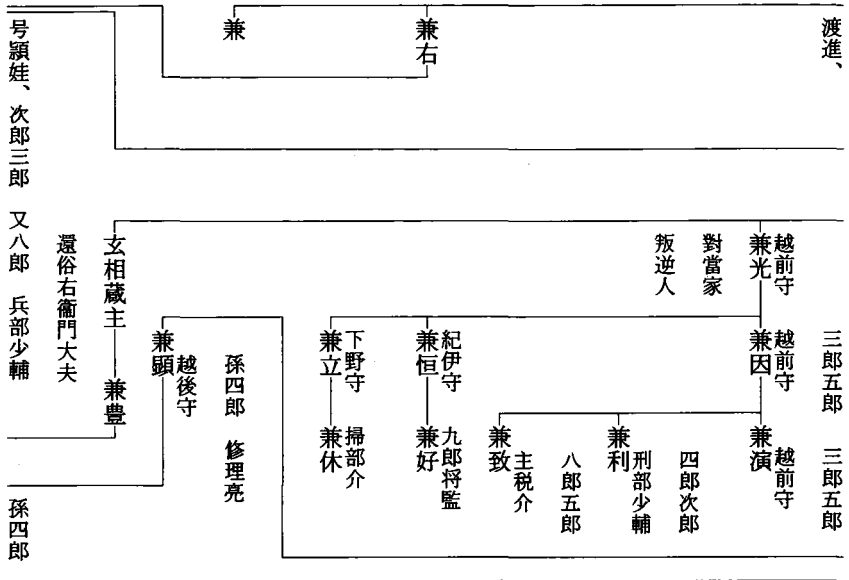
右大弁 勸解由長官 檢非違使別當 嘉祥三年大現  
參儀國通 任正三位權大納言

善男 權大納言 仲用 右兵衛督 仲兼 河内右馬頭

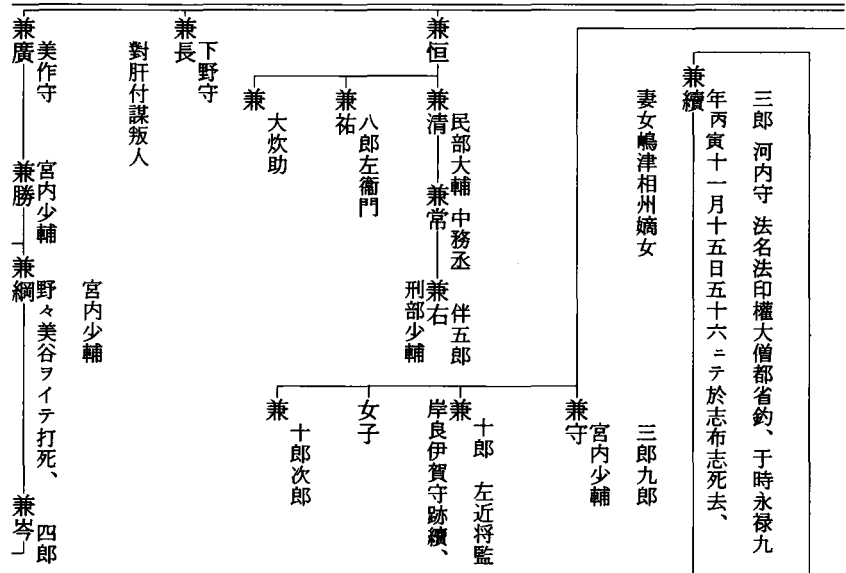
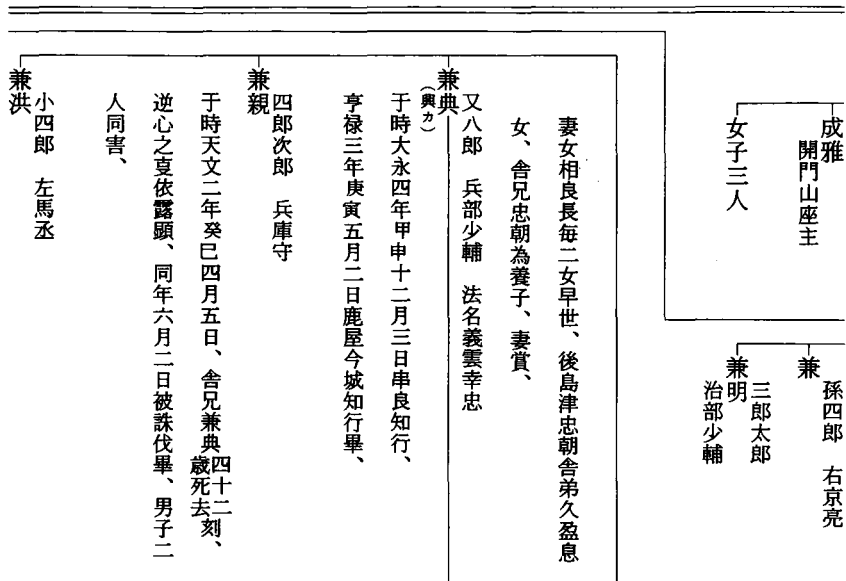
判官代兼遠 伴孫大監兼行 無官大夫行貞  
薩劬鹿兒嶋上伊敷ト云所ニ四十町御館也



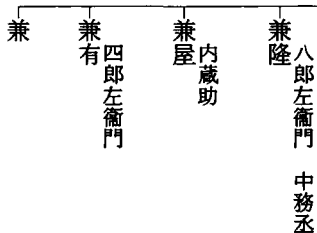








對肝付謀叛人



新左衛門

兼憲 上野守

兼豐 十郎三郎 新左衛門

孫九郎 孫九郎 又九郎

兼圀 九郎右衛門 新左衛門 刑部太輔  
兼孝 兼保

女子 兼嘉

兼 又四郎 縫殿助 廻ニテ打死、  
依無直子兼嘉ヲ養子トス、

三郎左衛門

良兼 女子 女子

兼 又八郎 十二ニテ死去、 女子

女子

女子

女子

兼 左京亮 新四郎

又八郎 伊勢守 法名天澤了融 四月十六日死去、

兼清

兼 玄番助 石見守

外記 壹岐守

兼木 法名聰鐘宗音

兼心 伴六左衛門 伊賀守  
法名蟾岳誰心 慶長十四己酉十二



肝付始良玉泉菴  
僧  
母有川吉左衛門女  
妻者伊藤清右衛門祐詮女

兼明 伴之丞 十兵衛  
母伊藤清右衛門祐詮女  
兼佳 伴七 源助  
母同、

『肝付清左衛門』

肝付庶流津曲家後号肝付伴氏系圖

肝屬四代嫡兼員四男  
兼行 津曲元祖

系圖文書等依燒失、代々之先祖不相知故此間不記  
之、

兼 津曲但馬

兼 藤左衛門

慶長八癸卯年五月廿八日、於國分屋籠討之節、  
手疵相痛死、法名龍岳宗雲上座

女子 新辛相(幸力) 藤左衛門直子、母肥後栄右衛門盛政

妹、民部卿養子藤右衛門嫁、

右民部卿 家久公奉仕、新辛相 藤右衛門死

去後 家久公奉仕、後ニ島津玄馬頭殿被召附、

兼 藤右衛門

藤左衛門依無男子掣養子ト成、實父川崎氏、

元和五己未年五月廿六日死、

法名夢覺宗圓信士

兼貞 肝付長右衛門

實父肥後栄右衛門盛政嫡子 養子

延宝九辛酉七月十一日死、

法名船源宗鉄居士

女子 藤右衛門直子

飯隈山別當朝賞妻

兼治

長次郎 清兵衛 志摩丞

母宮原宇兵衛景吉娘

寛永七庚午二月十九日誕生、

貞享三丙寅三月七日死去、

於武勳江戸御奉公ニ身ヲ捨相勤候、此比之忠節

被 思召上、依之為御褒美高百石、延宝五丁巳

年六月九日拜領之、

延宝五丁巳年九月十日、本名号肝付、肝付甚右

衛門殿兼親御證文有之並父兼貞依本名念望同号

肝付、且兼治字於清兵衛、此時号志广丞畢、

源太左衛門

純常

有馬次左衛門純真養子 母兼治同、

津曲平右衛門

兼元

兄兼治庶子ニテ家部立、母右同、

兼治雖号肝付、肝付兼親不準之旨依承之、弥

号津曲畢、

正保元年甲申四月廿八日誕生、

兼次

早世、長三郎

寛文六年丙午三月廿八日誕生、

兼義

勘左衛門

寛文十一年辛亥七月十一日誕生、

兼信

鬪死、甚助

延宝三年乙卯七月十六日誕生、

女子

早世、

女子

早世、

女子

肥後五郎右衛門盛信妻 母右同、

女子

久永勝左衛門貞明妻 母川村新右衛門秀信娘

兼品

長次郎 清左衛門 母右同、

寛文二年壬寅十二月廿三日誕生、  
 諸右衛門 母右同、  
 兼起 母右同、  
 秀 与市 母右同、  
 (マ) 川村七郎左衛門秀親養子 早世、  
 兼東 伴左衛門 母右同、

兼明 長次郎 母有川長左衛門貞堯娘  
 貞享元年甲子十一月廿五日誕生、  
 兼敦 源八 母右同、  
 女子 母右同、  
 早世、

『肝付清左衛門』

覚

津曲清兵衛儀、先頃於江戸御奉公方ニ身を捨、別而相勤  
 候之旨被 聞召上、神妙之至、此比之忠節与被 思召上

候、依之為御褒美知行高百石拜領之候、次ニ梶山見廻可  
 仕儀者、追而可被仰渡候、以上、  
 (延宝五年)

六月九日

御使

相良主税 (長清力) (印)

喜入次兵衛 (久清力) (印)

引付

高百斛、

津田清兵衛 (兼治)

右者、先年於江戸御奉公方ニ身を捨相勤候付而、為御  
 褒美被下之間、可有支配者也、

延宝五年六月十五日

(肝付久兼)

主殿印

(町田忠代)

勘解由印

(新納久了)

又左衛門印

(島津久元)

帶刀印

(島津忠廣)

市正印

(島津久竹)

出雲印

支配奉行

川上五郎右衛門殿

村田五郎左衛門殿

東郷拾左衛門殿

志岐藤左衛門殿

村田平右衛門殿

『宮之城』

肝付七右衛門』

十三代周防守兼連二男越後守兼實二男

兼賢 孫五郎 兵部 武藏介

始兼延

兼種 孫五郎 兵部 他腹

兼明 孫六 治部 母檢見崎常陸女

永祿四年七月十二日巡戰死、法名覚心淨圓居士(廻力)

孫三郎 掃部 母右同、

永祿四年七月十二日忠將奉討、同十七日ニ切腹

ス、歳廿八、于時小姓島子右衛門右衛門負殉死

仲右衛門 母右同、

永祿四年七月十二日巡戰死、法名節山永忠上座(廻力)

兼里 三郎五郎 隼人 母右同、

兼武 孫五郎 与兵衛 島津紹益五附人、

女子 有馬六右衛門妻

女子 阿多若狹妻

兼重 萬五郎 伊左衛門

兼貞 傳左衛門 松助 曾兵衛

兼 兼 岸良藤左衛門妻

兼親 三郎丸 加藤左衛門

兼信 米八郎 兵右衛門 兼郷 伯父兼親之養子ニ成、

僧 純至 兼 伊左衛門

兼弘  
七右衛門兼郷女

女子  
淵村平左衛門妻

兼郷  
七右衛門 實兵右衛門男子也、加藤左衛門無男

子故、加藤左衛門嫡女江取合、加藤左衛門跡ヲ  
續、

兼  
孫三郎

『島津内記殿内

肝付曾兵衛』

宮之城  
肝屬与兵衛兼武二男

兼貞

松助 傳左衛門 母深水氏女

延宝九年辛酉霜月四日死、法号旭山了輝居士

兼弘

松助 曾兵衛 母牧山藏兵衛女

寬永八辛未四月廿八日誕生、

女子

岸良藤左衛門妻

女子

寬文八戊申誕生、母伊地知傳右衛門女

村上喜右衛門義明妻

兼全

松助 傳左衛門尉

寬文十一辛亥六月十八日誕生、母同、

兼常

與兵衛 母同、

延宝六戊午三月廿八日誕生、



『樋脇  
肝付市郎右衛門』

十三代周防守兼連二男越後守二男

武藏介兼賢五男

三郎五郎 隼人 入道シテ道菴

兼里

天文十八年誕生、母檢見崎常陸嫡女

河内守兼久二男兼親、河内守兼續依為謀叛、

妻子同前、兼續ヨリ生害、依之嫡家タ、リ有

之故、兼續ヨリ兼親ノ為養子跡ヲ被立候由申

傳候、

寛永九年(マ)丙申正月廿三日死、享年八十四、法

名虎宗源藏居士

兼政

孫三郎 右助

母角野々主税女

法名玉隠清金居士

兼綱

利作 諸兵衛

女子

加世田松坂山蓮光院江嫁、

母坂元刑部左衛門嫡女

女子

樋脇大杉彈右衛門江嫁、

甚右衛門 三郎兵衛

兼有

母同、

法名恕月清忠居士

兼明

隼人 市郎右衛門

母達野源太左衛門女

妻米良九郎兵衛二女

女子

大村土時吉仲右衛門嫁、

虎千代丸 次兵衛

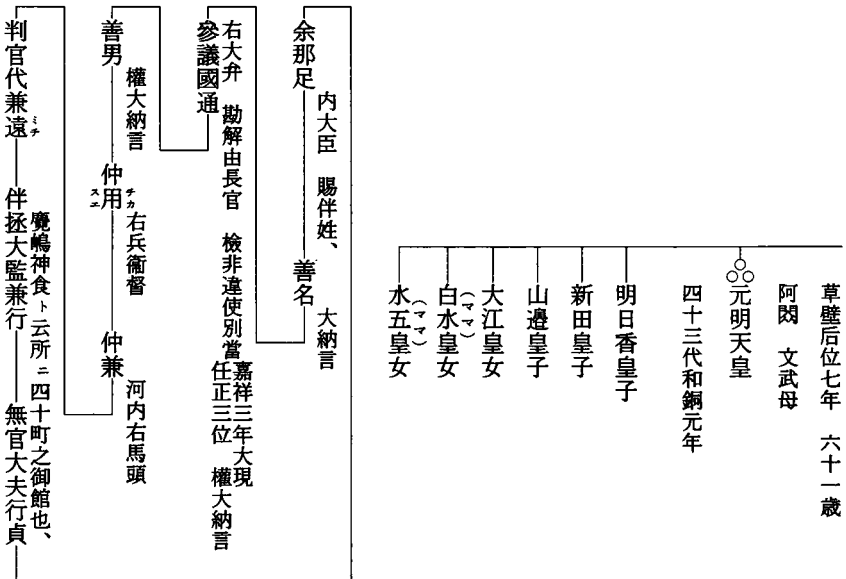
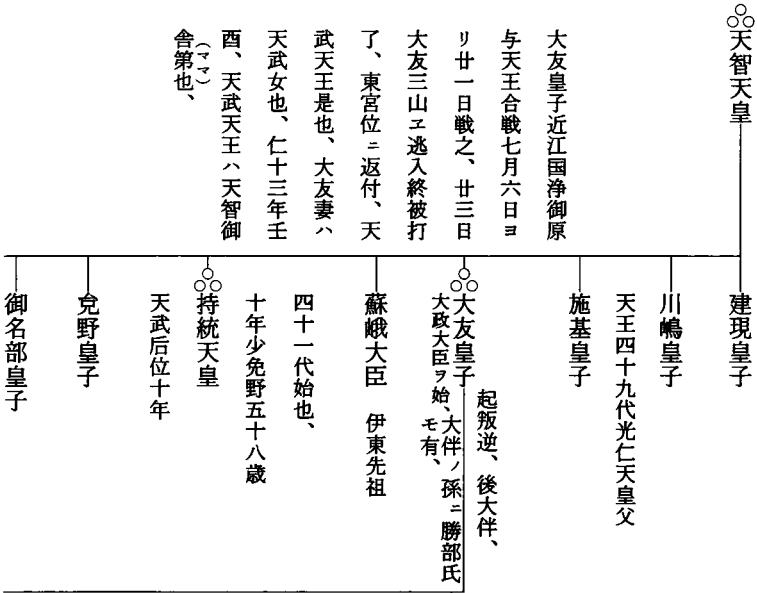
兼

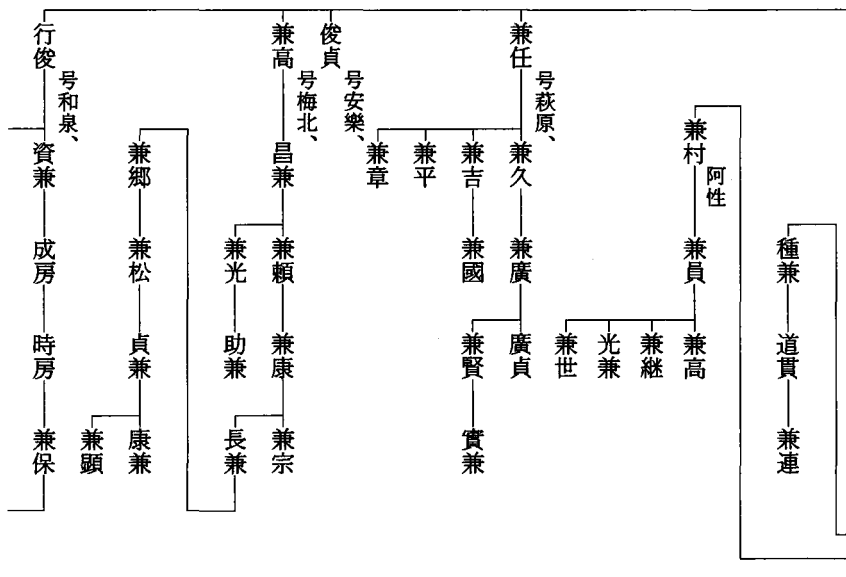
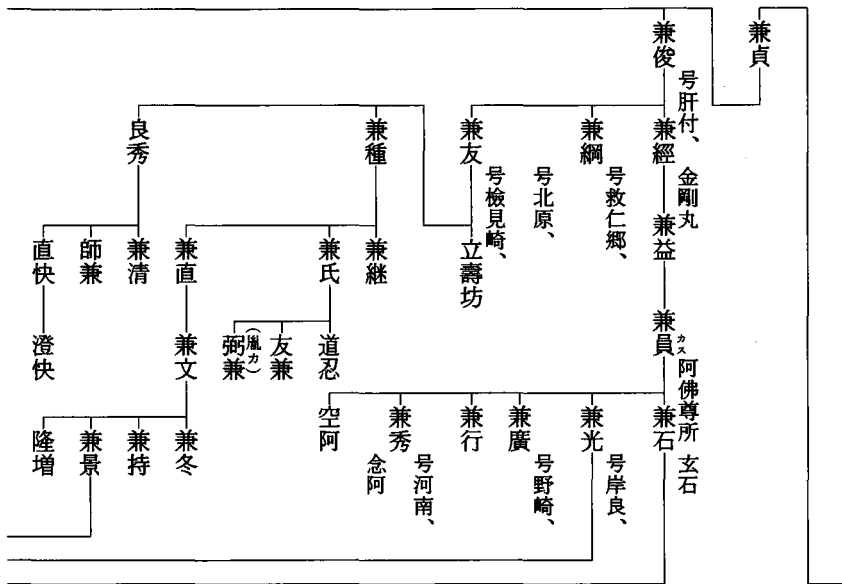
南雲氏為猶子、

『此本書古系圖ニ而候』

伴家系圖

『肝付十兵衛』





「兼清」兼宣 兼基

保久 保忠

尊尚 尊光 相模國鎌倉住、  
兼藤 兼尚 德林禪尼 秋兼妻女  
兼氏母 女子

兼市 兼重 三侯八郎左衛門尉  
玄源 周防守 龍嶽 秋兼 正林 号川北、  
兼朝

号鹿屋、 兼經 肝付殿番代 兼尚依無 男子為掣 猶子肝付 之家ヲ相 久兼 号山下、

金阿 宗兼 續ト云々、

又八郎 河内守 龍義 兼元 俊賀 又八 左衛門佐  
兼忠 義翁 國兼 女子一人

島津元久御 在京之時御 依背兼忠之儀、肝付ヲ退出、  
三郎四郎 河内

供下向、以後加治木陣中ニテ死去  
退治畢テ、兼忠若年之比、加治木殿ニ渡進、

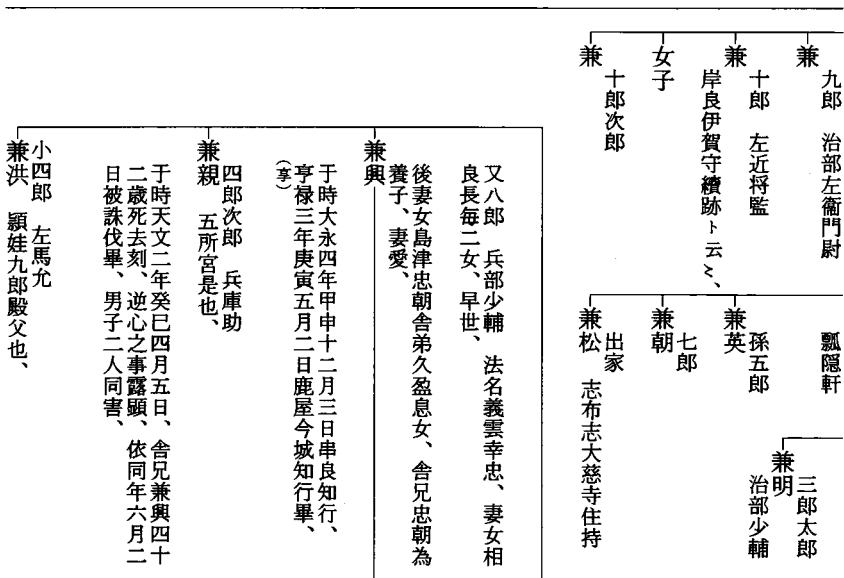
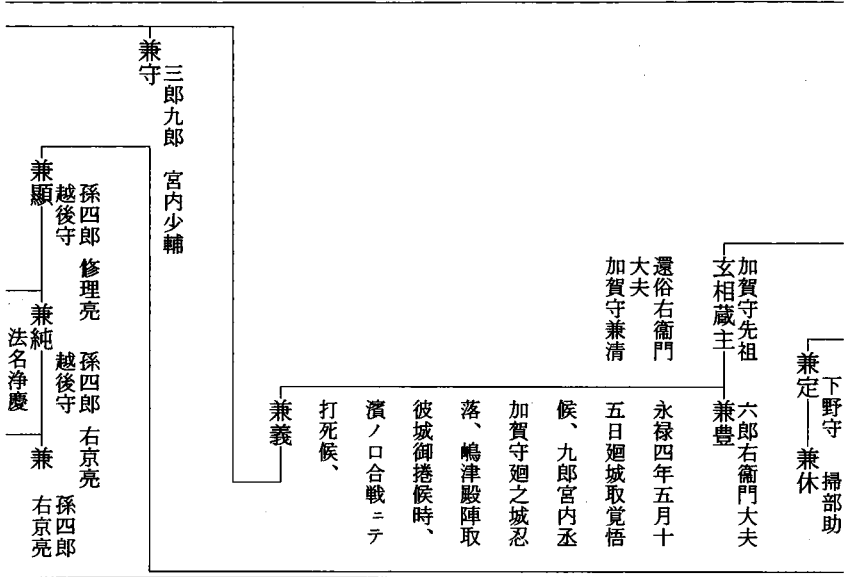
七郎三郎 守法名昌山五  
忠能 周防守 十一死去、  
兼久 兼連

文明十九年丁未二月廿五日、高山城落、同年九月廿三日庚申肝付本城令入部畢、

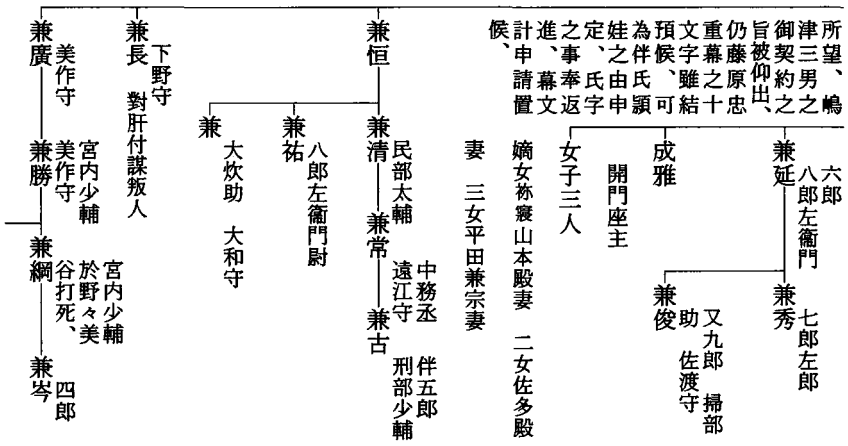
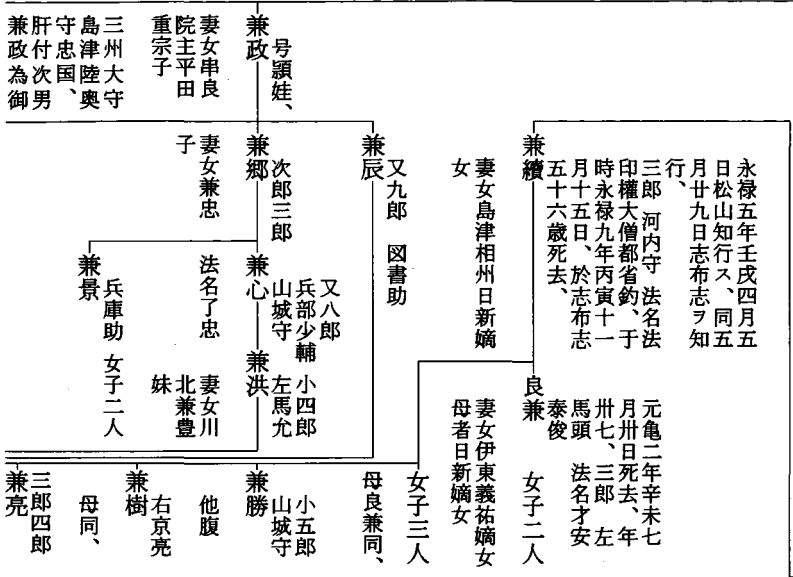
加治木先祖 三郎五郎  
越前守 兼因 越前守 兼演 三郎五郎  
兼光 越前守 兼利 四郎次郎 刑部少輔 兼致 八郎五郎 主稅助

對當家 叛逆人

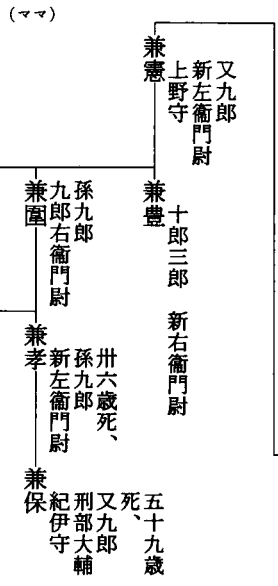
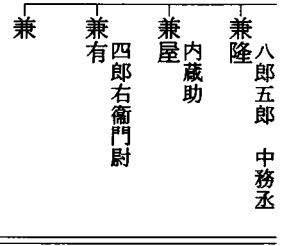
兼恒 紀伊守 兼好 九郎將監



穎娃兼心依無直子猶子云云、



對肝付謀叛人



又四郎 縫殿助 廻陣中濱口合戦死、  
依無直子兼嘉ヲ養子ト云々、

(本系図ノ人名上ノ「〇〇」印ハ朱書ナリ)

493

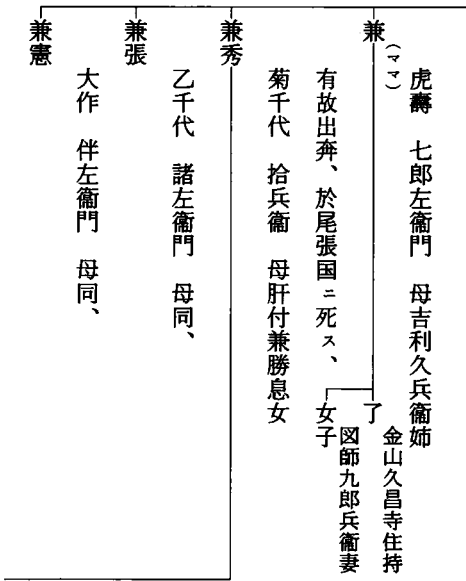
『伊集院 肝付十兵衛』

樋協衆中肝付隼人入道道庵兼里二男

利作 諸兵衛 母角野ノ主稅女

兼綱

(島津忠英)  
紹益老与力役相勤、付衆中ニテ罷居候處ニ、寛永十二年亥年手札始ノ時分、於宮ノ城凶書老ノ家来札申請、家来与罷成候、



兼 三郎五郎 平右衛門 母阿多字右衛門姉

肝付諸兵衛兼綱三男

『宮之城』

肝付諸右衛門』

乙千代 諸左衛門

兼憲 大作 半左衛門

兼次 諸右衛門 市左衛門 母井上十左衛門女

天和元酉七月廿五日死、法名自參常心居士

兼次 諸右衛門 市左衛門 無男子故為猶子、  
実父市来七郎兵衛家豊男也、

母領家笠右衛門女也、

495 阿佛禪定門

峻山妙大姉

釣歷禪定門

翁兼忠居士

岩栄玖上坐

妙大姉

大僧都省鈞法印

松山妙禪定尼

童玉

妙大姉

大僧都傳清  
蘭溪芳和尚

推禪定門  
屋禪門

玄相居士

漸翁宗頤上坐

澤

安泰俊大禪定門

心宗妙日大姉

九兵衛尉殿

寶山正珍上坐

常泉禪定門

長右衛門尉殿

正慶大姉

命岩慶芳上坐

十郎殿

月叟清王居士

妙喜大姉

承栄秀悦上坐

明山妙光大姉

妙春大姉

月林妙香大姉

月嶮兼海庵主

治禪定門

薰山妙芳大姉

新禪定門

狐雲芳清居士

永春大姉

大中守三大姉

玉禪定門  
梅院林香居士

自光兼照居士

林中禪定門

笑我禪定門

安禪定門

妙大姉



496 ▽ ㊦口上之寛△

先祖肝付豹右衛門兼弘と申者以来相知申候系圖へ、右豹右衛門死去申候刻、消失申候由申傳候、依之相知候分書出シ申候、

一 右豹右衛門兼弘親へ、肝付治部左衛門とか治部少輔とか申候由申傳候、

一 豹右衛門兼弘儀若輩之節、島津右馬頭以久江御奉公為罷出由候、其時檢見崎主膳と申者并人数過分ニ召烈、

為罷出由候、其節豹右衛門儀、奉對御先祖ニ不忠之者(者脱カ)之子孫之儀ニ而、被召果ニ相究候へ共、久敷家を被召絶茂如何ニ被思召上候ニ付、無違儀被召置候(命而)ニ付、

高拜領仕御奉公為申上由候、

一 豹右衛門兼弘、島津守右衛門尉彰久朝鮮御在陳之節御供仕候、於彼地彰久死去被申候付、川上六郎兵衛被致

軍代候處、手負被申候ニ付、豹右衛門兼弘軍代仕候、其節、伊勢兵部少輔殿たかひニ申合候文四ツ、今ニ御座候ニ付差出申候、

一 右豹右衛門兄弟か伯父か之間、佐土原江相別罷居候半

と存申候、様子へ豹右衛門兼弘、世倅城之助と申者、いとこニ肝付三郎兵衛と申人、佐土原へ御座候而、互ニ申通候文御座候間、差出申候、

○兼  
治部左衛門 治部少輔 此兩段分明不相知、  
法名承永秀悅  
『垂水 肝付豹右衛門』

兼弘  
平右衛門 豹右衛門  
法名竹殿實桂庵主  
妻藥丸孤雲女  
兼  
喜左衛門 喜左衛門  
兼固

兼  
隼人 無子孫、  
兼  
弥九郎 無子孫、  
兼  
無子孫、

兼 城之助 母藥丸孤雲女

兼 法名梅林壽林

妻佐土原桃山清右衛門久敦妹

權兵衛 兼 平右衛門 兼 覚右衛門

兼 母同、

兼好 十右衛門 母桃山清右衛門久敦妹

兼 法名月山常桂

妻河南式部左衛門女

兼 筑兵衛 兼 源藏

兼 母同、

兼 女子 魔島福山平左衛門妻

兼正 豹右衛門 母河南式部左衛門女

兼 法名心月正圓居士

兼 女子 魔島本田栄安妻

兼 女子 河南孫七兼好妻

兼宜 豹右衛門

▽ 如右、續来申ニ付書付差上申候、以上、

(元禄七年) 戊拾月五日

嶋津虎安殿内

肝付豹右衛門

肝付甚兵衛様

(本文書ハ「家わけニ」肝付文書四〇九号文書トホボ同文ナリ)

497

(マ) 候間善男へ大納言十番競馬の(時本) とりによひ籠候

て、(信仰) しんかう申候十一面金同御はとけをハ、(格闘) 覚悟之由申候、

三侯之上柱大明神ハ、平代けんとの御伊勢夢想を蒙り勸

請候、それニよりて梅北殿大官司御持候、彼平大けんとの

在所ハ都城与梅北間原ニ、屋形于今在申無隠候、伴家

幡の事、

大堂宮之御幡被下錦幡にて候、幡之横廣に三尺三寸、長

さ一尺鳩(マ)二寸五分にて候、竿一丈五尺也、

鹿屋一豹入道注之訖、(介忠兼) 鹿屋周防入道

兼 玄兼

(本文書ハ「諸家系図文書」四三・五三号文書ト同一文書ナルベシ)

尚以<sup>(⑥六)</sup>、喜左衛門尉殿へ先日之一札、いつそ懸御目度候と申度候、貴所御快氣候ハ、ちと御同道候へく候、

昨日者度と預御使候、自是こそ申後候処、重々儀難申盡候、仍腫物御煩候様ニ承候、無御心許候、あまりく長在陣にて候間、せき出候かと推申候、ちとく若衆成共御用候者、當日可為驗候、但葉代可難成候哉、拙者式すりきり申候て、さやうの儀も中く存絶候事候、我々も此比者切々相煩申候、只々氣のつまりと覚申候、よくく御休息尤簡要候、恐惶謹言、

六月一日

(伊勢貞昌) 伊弥九 (花押)

(肝付兼弘) 肝豹様

御陣所

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」六〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四二一号文書ト同一文書ナルベシ)

尚々申候、先日又六殿御光らひの刻、願文進候つる、其案文これへめし置候と存候へ共、見出し不申候、

ちと御うつし候て給候へかし、次第ニ御願成就申度候、頼入候、又昨日之一巻、いつ成共よみてきかせ申へく候、

昨日者被召寄、別而御懇之儀共、難申盡次第候、乍去、毎々儀候処、種々御慰之儀、相似御隔心、却而令迷惑候、あまりくことく敷候つるま、若後日儀を御坊かと存候、尤遂參上、此謂可申述候へとも、手前取紛候間、先如此候、さてもくこよひハ名月、いかなる御遊共御入候ハん哉、此方ハさやうなる催も無之事候、得寸暇候ハ、必一宴可相企と存候、御ひまにて候ハ、後方光臨所希候、恐惶謹言、

八月十五日

(伊勢貞昌) 伊弥九 (花押)

(肝付兼弘) 肝豹右さま

御陣所

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」六一号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四二二号文書ト同一文書ナルベシ)

500 此間者何角候て不能面上候、内々御荒増之書物、今日も

御出候てあそへし候へかしと申入度候へとも、御使仕儀候て、今日者雲州へ終日可罷居候間、乍存候、明日か晚ニか、いづれも従是可申候、無御懈御執心奇特感申事候、さてもく先刻者、見事之兩種送給候、御懇情難申盡候、され共毎々儀結句恥入候、委曲期面上候、恐惶謹言、

九月二日

(伊勢貞昌)  
伊弥九

(花押)

(肝付兼弘)  
肝豹様

人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」六二号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四一三号文書ト同一文書ナルベシ)

501 此間者釜山浦へ御越候哉、一昨日御帰候由承候へとも、無寸暇候て、とかく不申入背本意候、さても當時事關候刻、一種送給候、御志中く書物ニ不申得候、将又内々申候つる書物共、少々國もとよりまいらせ候、ちと申入候て可懸御目候へとも、今日者御番候間不能其儀候、明日も必これより御注進可申候間、御出候て可有御覧候、猶期面上候、恐惶謹言、

九月廿三日

(伊勢貞昌)  
伊弥九

(花押)

(肝付兼弘)  
肝豹さま人々

まいる申給へく候

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」六三号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四一四号文書ト同一文書ナルベシ)

502

猶々申候、はゞさまへもめんたひ老足、御内々へ帯一筋令進入候、音信迄ニ候、以上、

其後者不通ニ罷過候、其御地御無事ニ御座候へんと存候、此地無替儀候、去年大坂ニ而ハ不懸御目御残多存候、帰國以後、致何角と、以書状も不申入、非本意候、随而扇子式本箱入令進之候、誠ニ書音之験迄ニ候、将又、長次郎殿へ以別書可申候へ共、御意得頼存候、猶期後音候、恐惶謹言、

椋山清右衛門尉

六月十九日

久敦(花押)

肝付城介殿

人々御中

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四一五号文書ト同一文書ナルベシ)

503

尚々、安右衛門殿へも以別書申度候へとも、乍慮外御意得可被下候、以上、

先日者罷越、久々ニ而懸御目得御意、本望至極ニ奉存候、定而御無事ニ被成御座候へんと存事ニ候、此方相替儀無御座候、安右衛門尉殿御内儀さまへも可然様ニ御心得可被下候、随而者、見事成茶入、覚之允へ被下候、別而忝由申候、我等事も、在江戸被申付、近日罷上ル覚悟ニ御座候、前かた御咄之首尾ニ而、此表へ御越被成候ハ、留主ニ而候共我等所へ御宿可被成候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

五月七日

肝付三郎兵衛尉

兼林(花押)

肝付城介様

参人々御中

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四一六号文書ト同一文書ナルベシ)

504

猶々、新七郎方御返シ可被下事奉頼候、以直状申上候事憚多候、以上、

先日者高松新七郎方儀ニ付、預御使僧候、忝儀共ニ候、其後可申入候處ニ、公儀取紛候て延引、背本意候、慮外之儀ニ候、然者、彼相手相果申候間、新七郎方此方之様ニ御返シ可被下候事奉頼候、松山方角より茂入組共事六ヶ敷被仰候、菟角新七郎方不参候てハ難成候間、御返シ可被下候、猶此使僧可申上候条、不及重筆候、恐惶謹言、

福崎弓五

九月廿八日

重元(花押)

肝付儀右衛門尉様

参人々御中

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書四一七号文書ト同一文書ナルベシ)

505

従是上世自不知出所、

『末吉』

肝付覺左衛門』

兼隆  
權之助 豊前守

伊東合戦之時、十七歳ニテ伊東河内守ヲ討捕、為  
恩賞知行六町ヲ下賜フ、廿三歳ヨリ兵道ヲ行、于  
時豊後國岩屋之城ヲ攻玉フ時、敵三人ヲ討捕、飽  
肥合戦終、肝付郡高山江居住ス、然ニ村田壽仙末  
吉地頭之故、任下知末吉江相移者也、

兼清  
治右衛門

日刃志布志江住居、

兼  
七郎右衛門 始權右衛門  
薩州谷山江居住ス、

兼豊  
覺左衛門

延宝四丙辰年死ス、法号法屋清界居士

兼  
甚兵衛

肝付家ヲ退、(マヤ)  
榎木家養子ト成、

兼昌  
伴右衛門

兼寧  
覺左衛門

女子  
末吉門松十左衛妻

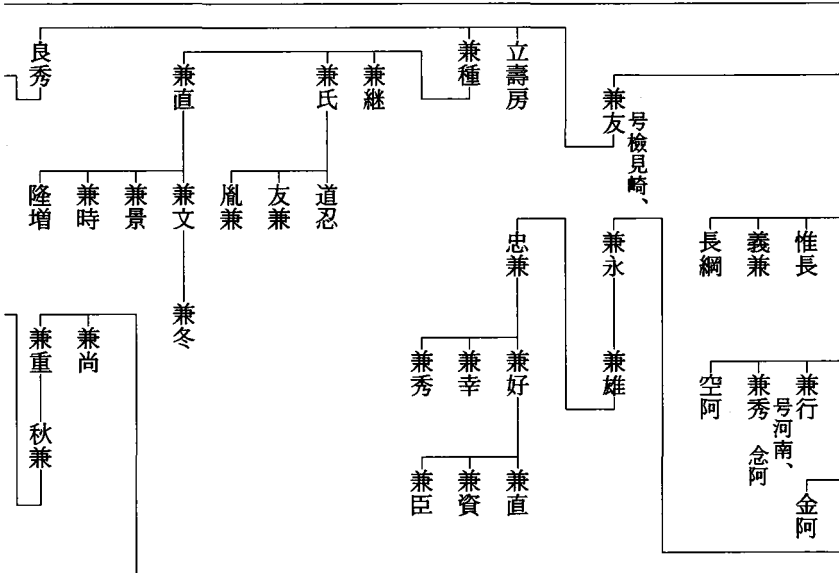
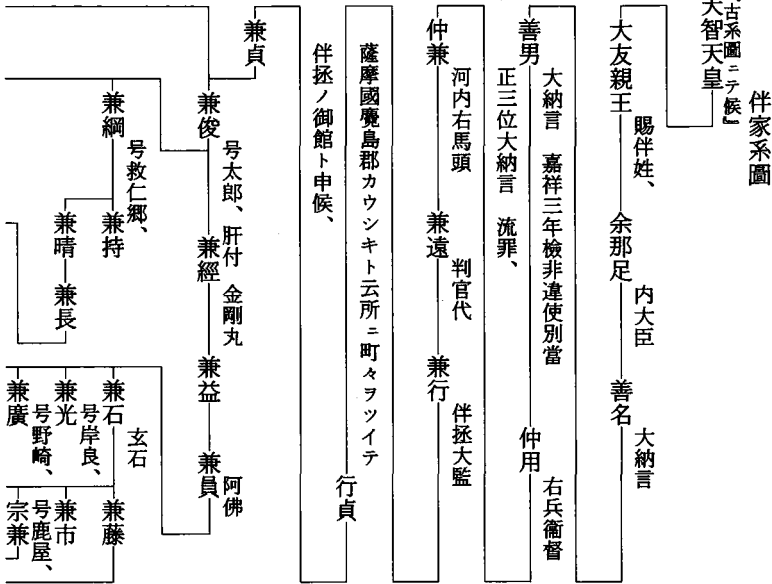
女子  
財部石塚伴左衛門妻

兼満  
權右衛門

兼門  
伴左衛門

兼  
伴彌

女子  
財部精松十右衛門妻









壽六十四、

兼林

次郎丸 伴五左衛門 寛永十二年乙亥二月十二日ニ生、母ハ川野新右衛門女

兼高

次郎丸 伴左衛門

万治元戌戌四月七日誕生、母久保清左衛門行徂女

女子

寛文四甲辰年三月十九日誕生、母同、愛甲勘左衛

門季實妻

兼陳

伴之助 寛文九年乙酉十月五日誕生、母同、

女子

延宝五年丁巳八月廿八日誕生、母同、貴島源八

左衛門實頼妻

兼

伴弥

天和三年癸亥九月五日誕生、母鹿屋權兵衛女

兼

甚太夫

元禄三年庚午正月廿五日誕生、母同、

508

『伊勢豊松内

肝付權左衛門』

豊前守兼隆三番目弟

兼

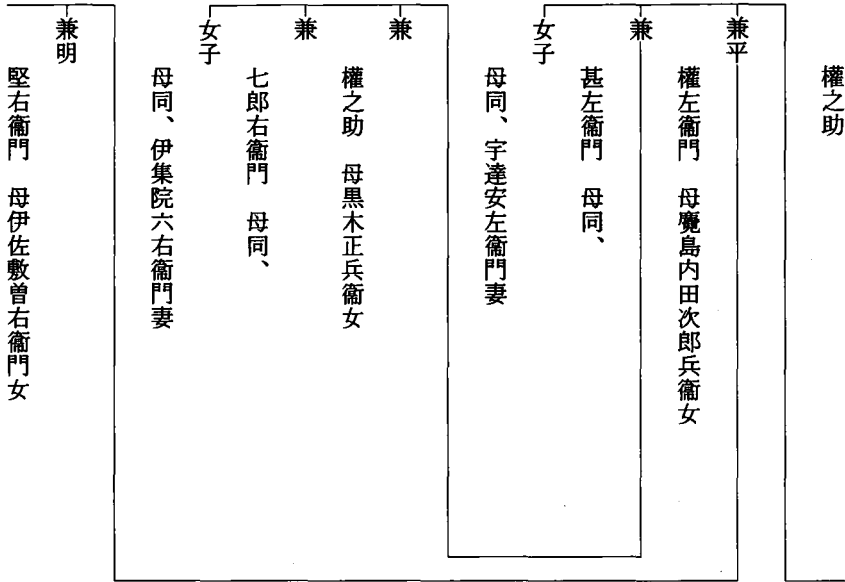
七郎右衛門 初權右衛門

肝付豊前三番目弟七郎右衛門、七歳之時、肝付取

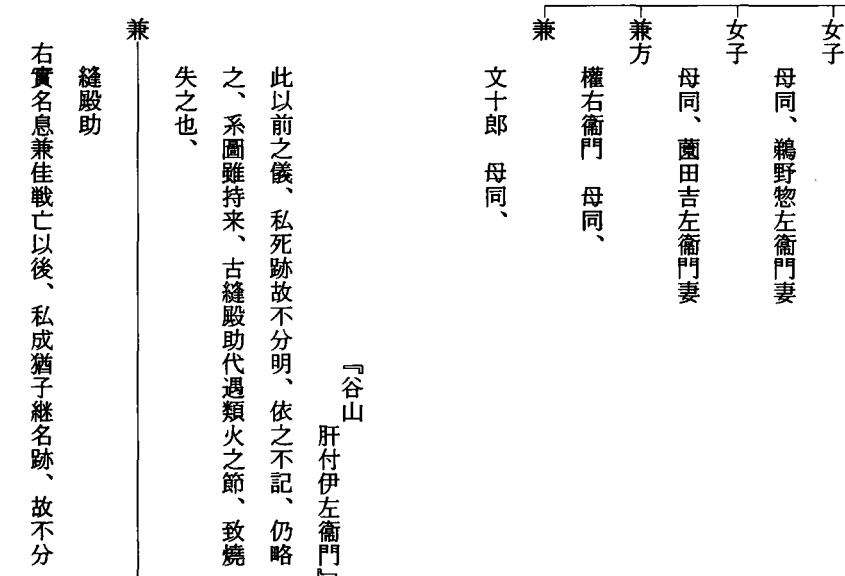
合之砌落城仕候而出家仕、十四五歳之時還俗仕、

伊勢兵部家来ニ成、于今代ヒ奉公仕来、

兼



509



明、依之不記、

兼佳

縫殿助

母平山和泉守女

谷山江致居住御奉公相勤、然處島津大和守殿被蒙御勦氣、谷山清泉寺江蟄居、此時為警固番奉谷山縣令命相勤之節、大和守殿正保二年酉十二月十一日及殺害刻遂戰死、依之福昌寺戰亡帳ニ被記之、

兼政

□(伊之)左衛門尉

寛永九年申二月十九日誕生、母竹之内土佐女

父伊集院古左京亮弟久兵衛尉嫡子七右衛門尉直子也、兼佳男子無之女子一人有之、是嫁以成掣養子、跡目相續之、

女子

寛永二十年癸未四月朔日誕生、母別府源七左衛門

尉女

猶子兼政成妻女而致跡目相續也、

兼英

喜左衛門尉

寛文四年甲辰六月廿四日誕生、母縫殿助兼佳女

兼武

五郎右衛門尉

寛文十年戌六月十五日誕生、母同腹、

兼寛

滿右衛門尉

延宝三年寅(マ)二月廿六日誕生、母同腹、

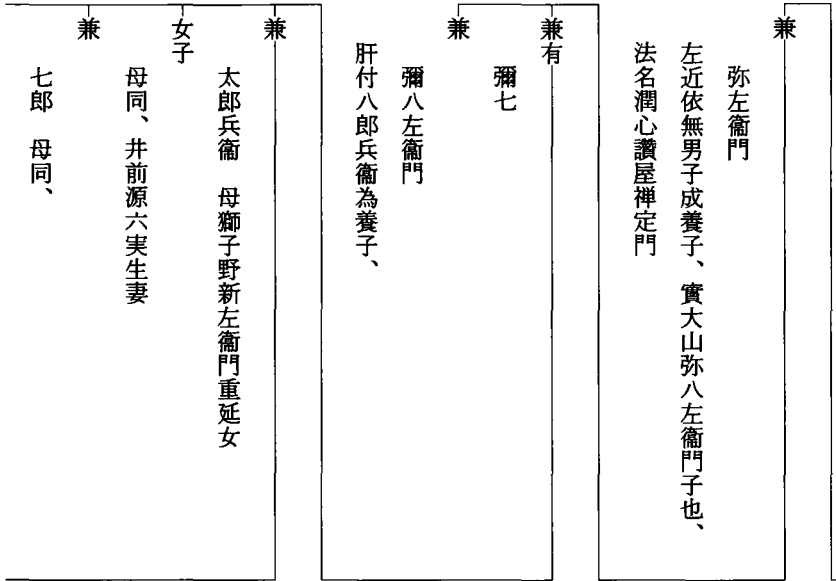
510

從是上世自不知出所、

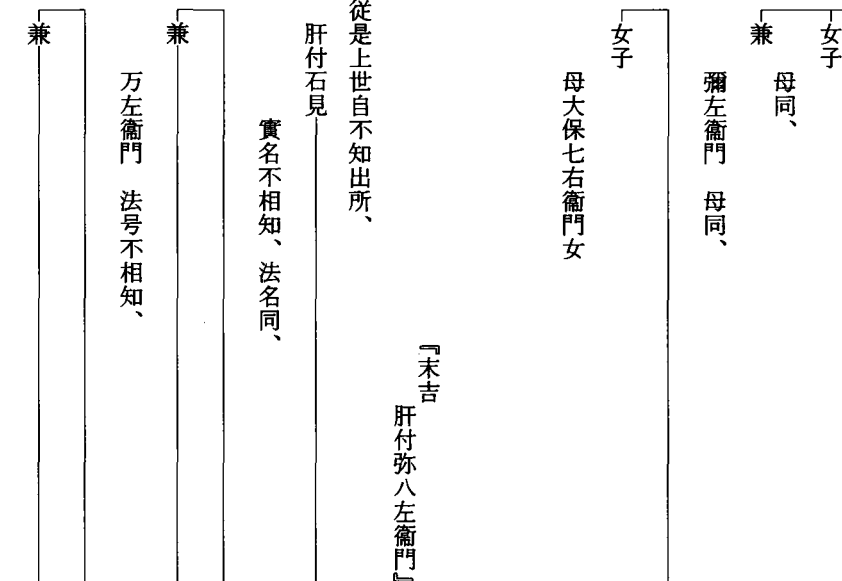
『末吉  
肝付孫七』

肝付左近

實名法号不相知、



511



八郎兵衛 法号教心善阿信士  
井之前半左衛門二男ニテ候得共為養子也、

兼重

弥八左衛門

實肝付弥左衛門二男、八郎兵衛無男子故為養子、

女子

摺本民部左衛門兼敬妻

女子

瀬戸山用右衛門妻

兼明

源弥左衛門

兼近

弥戸右衛門 別腹、

512

『高尾野  
肝付伴右衛門』

實名不相知、  
肝付如心入道

右近 藤左衛門

慶長五年、帖佐ヨリ出水江被召罷居候所、高尾  
野城地頭宮原秋扇(景時)為談合衆、徳永・穰所・肝付以  
上五人被召移、高尾野五ヶ處之内、預一城今日肝付之城、  
諸事物頭仕リ、一ヶ度御奉公仕ル也、

實名同前、

治部右衛門

如心同前御奉公仕候所、正月七日登于御始狩中化  
矢死、法名春宗賢入居士

兼盛

右近 藤左衛門

兼行

伴右衛門

女子 穰所助五郎妻

<p>兼平</p> <p>治兵衛 母治部右衛門女</p> <p>女子</p> <p>松崎諸兵衛妻 母同、</p>	<p>兼盛</p> <p>治右衛門 母高城備前女</p> <p>治部右衛門依無實子、岩田主水左衛門篤安以二男為養子、已十月廿六日死、法名明安禪定門</p>	<p>女子</p> <p>野崎李之助妻 母丸尾勘右衛門女</p> <p>兼 伴五郎 母丸尾勘右衛門女</p> <p>兼 仲助 母同、</p> <p>女子 母同、</p>
----------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------

513

<p>連光院 樋脇居住、</p> <p>大仙坊 本名飛彈</p>	<p>善行院</p>	<p>僧元院</p> <p>從是上世自不出所、 <small>(知脱之)</small></p> <p>『串木野 肝付源六左衛門』</p>	<p>兼經</p> <p>兵助 伴右衛門</p> <p>兼平無實子、故有馬兵右衛門純孝之二男為養子、母有馬兵衛左衛門純辰女</p>	<p>「女子</p> <p>大島勘兵衛妻 母同、</p>
----------------------------------	------------	---------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------	------------------------------

平左衛門  
内之浦住居、

女子  
休六妻

休六  
大仙坊無男子、故為掣養子、  
實父不相知、

兼明  
三左衛門 母大仙坊女

女子  
串木野有馬金左衛門純昌妻  
母吉利崎田清右衛門妹

兼春  
新助 母同、

兼重  
貞右衛門 母同、

兼次  
主膳 串木野久保与四右衛門某ノ養子成、

兼次  
五郎兵衛 串木野臼井五郎左衛門為掣養子、

兼  
三左衛門 母串木野竹田与左衛門光平女

女子  
母同、串木野兒玉喜兵衛實彬妻

女子  
母同、

兼  
六兵衛 母同、

兼  
三右衛門 母串木野野元治兵衛清純女

女子  
母同、

兼元  
源六左衛門 母串木野山下万兵衛次女

兼則  
母同、快昌院

女子  
母同、串木野中村十郎兵衛忠智妻



兼  
圓次 母串木野有村傳左衛門兼政女  
女子  
母子、

女子  
母市來衆中國分泉藏院重清女  
串木野宮之原覺左衛門重在妻  
兼長  
仲七 母同、  
兼  
三吉 母同、

日州諸縣郡

一作

高五石

野尻

三ヶ山之内

「樋脇

肝付鏡存坊」

先年高麗國輿陣迄御奉公被申候故、如此被宛行者也、  
文祿五年 伊集院右衛門入道

十二月二日

蓮光坊

幸侃(花押)

(本文書へ「旧記雜錄後編三」一四五号文書ト同一文書ナルベシ)

樋脇土  
肝付善行院三男

「内之浦

肝付五左衛門」

肝付平左衛門

元來清敷衆中ニテ御坐候処、五十年前以前平田豊  
前殿内之浦地頭之節、内之浦江為被召移之由ニ  
御座候、

兼寛

右近 母園田傳兵衛女

女子

母永井丹後女 兼通妻

兼通

五左衛門 母峯崎吉兵衛女

兼寛依無男子成聳養子、白坂五左衛門篤盈二男

兼

万次郎

覚

一私曾祖父肝付源左衛門与申者、高山江居住仕候處、志布志へ被召移、ぞうめき口屋敷被下罷居申候、源左衛門後ニ者入道仕、宗可与名乗申候、其子細、助三郎濱之市富隈石垣御普請之時分、巽之角之つま石を能相並、千人之夫遣仕候ニ付、三日被召留、從 龍伯様御褒美為有之由候、左候而、知行目録御老中町田出羽守殿判形、其上御袖判御印形有之候お頂戴仕候、

一助三郎事、其後末吉へ一節罷移居候處、為御心付山之口番代被仰付罷移候、山之口古大内と申所ニ而火事逢、系圖財宝家傳太刀等迄、不殘燒失仕候、然共右知行目

録計者乍焦相殘申候、

一右之以後、助三郎事老躰ニ成、山之口番代御断申上候得共、替役無之ニ付繼子番役を讓、末吉へ罷帰候、彼繼子ニハ本名をハ讓不申、北原小名之由ニて名乗せ申候、于今山之口衆中北原名字御座候、左候而、末吉ニ而助三郎死去仕候、其時分私親源左衛門事ハ十三歳ニて候、姉宍人御座候、十六歳ニ而候、弟ハ七歳ニ而候、母茂相果候ニ付、母方之叔父川東之百姓喜三兵衛と申者お頼、川東ニ參罷在、姉者垣籠門之大藏江縁与仕候、弟者出家成、龍峯寺弟子廉達と申候、上方へ編歴ニ罷越、終ニ下り不申候、右通百姓中ニ罷有候故、私親も柿木蘭門受取百姓役仕、于今私代迄右門ニ罷有候、右知行目録計于今格護仕候ニ付、此節肝付甚兵衛殿へ差上申候得者、委細御尋被成、一家中之證文取候而可差上旨承候、前ニ一姓も無之候、御方事ハ前々より肝付一姓を承事ニ候間、右之旨御存之通、御次書被成、御差出頼存候、以上、

都之城川東村柿木蘭門

(元禄八年)  
亥

四月四日

梅北正兵衛殿

嘉左衛門印

右之趣、別條無御座候、私一姓と申傳候間、次書を以  
申上候、以上、

亥

四月五日

梅北正兵衛印

覺

都之城内川東柿園門加左衛門事、我等先祖北原半右衛  
門与申者之為ニハ甥ニ而御座候、其親肝付行藏と申者  
之代ニ名字替仕、北原ヲ名乗申候、其代ニ系圖燒失仕、  
此方へ何ぞ慥成書物等無御座候得共、右嘉左衛門、筋  
目之者ニ而御座候儀、別儀無御座候間、宜様奉頼候、  
以上、

亥

四月五日

肝付甚兵衛殿  
(年兼)

山之口衆中

北原拾兵衛

從是上世不知自出所、

『都之城川東村柿木園門百姓  
嘉左衛門』

源左衛門

入道宗可 志布志ニ住、

女子 藥丸氏妻

助三郎

後山伏成行藏ト改、志布志ヨリ末吉ニ移、後ニ山  
之口江為御心付番頭役ニテ被召移候由申傳候、  
濱之市 御城石垣御普請有之節、石ノ直様入  
御意、依之 太守義久公以御袖判日州志布志ノ内  
壹段ノ御知行ヲ拜領ス、此代於山之口自火出来イ  
タシ系圖燒失ス、依之不詳候、

女子 都ノ城川東村カイロ(ノカ)門大藏妻  
母ハ都ノ城加藤丹波女

源左衛門 母同、

源四郎 此代致衰微、都ノ城川東村へ致中宿、浮世人ノ様ニイタシ罷居、鳴津式部殿致御供兩度上洛仕候、左候而、式部殿御死去以後始テ百姓ト成、

凡 母同、  
 出家 連達 上方ニ參終不下、

嘉左衛門

母都ノ城河東村柿蘭門孫右衛門女

女子 鳴津筑後殿家中山田正兵衛妻

母上同、

小左衛門

母同、

女子 都ノ城川東村東門次右衛門妻

母同、

女子

都ノ城早水村味噌ノ門正吉妻

母都ノ城川東村高頭門助三郎娘

516

都ノ城樺山上村傳藏妻

女子 母同、  
 孫 母同、  
 次郎 母同、

(角印、印文「義久」)

日刃志布志之内領知目録

志布志名

すみとこ門之内

壹段

二反之内

已上

うし田

町田出羽守

天正廿年十二月一日

久倍(花押)

肝付助三郎殿

(本文書へ「旧記雜録後編二」一〇〇一号文書ト同一文書ナルベシ)

【〇】肝付系圖

幕之紋足上鶴

【〇〇】天智天皇

大友親王 賜伴姓、余足 善名 大納言

國通 大納言 嘉祥三季檢非違別當

善雄 正三位大納言 流罪、仲田(44) 右兵衛督 流罪、

仲兼 河内右馬助 流罪、兼遠 判官代 流罪薩摩、

兼行 伴掾大監薩摩國鹿兒島郡イワウシキト云所ニ、二町マチヲツイテ伴掾御館ト号、

行貞 兼貞 執行田不兼帶檢非違所總官(所カ)

兼俊

伴新太夫 執行非違不總官(檢脱カ)所カ)

兼經 肝付大夫 檢非違不總官(所カ)

兼綱

兼石

兼元

兼廣

兼行

徒從房

頭阿弥陀佛

兼藤

兼壹

宗兼

兼尚

兼重

兼經

兼益

兼員カス

兼友

兼持 無子孫、

兼晴 養子 近江入道

宗能 養子 藏人

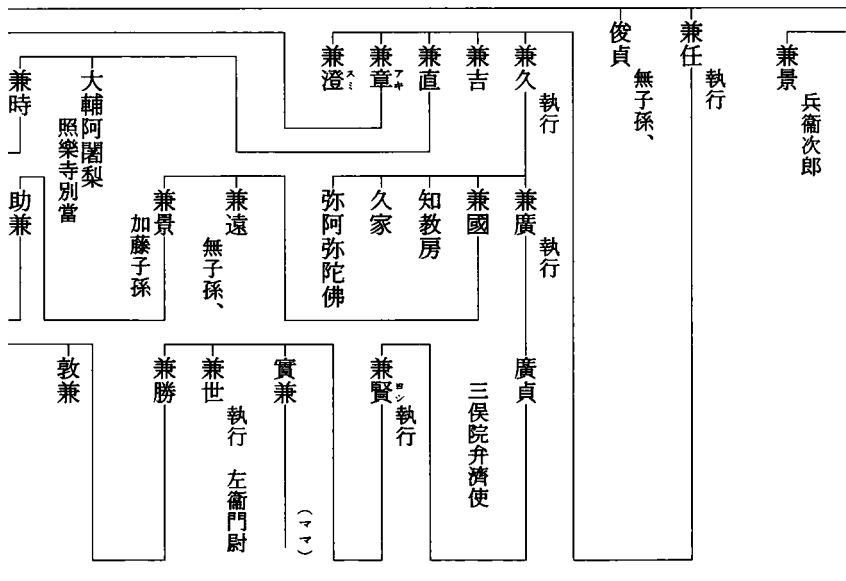
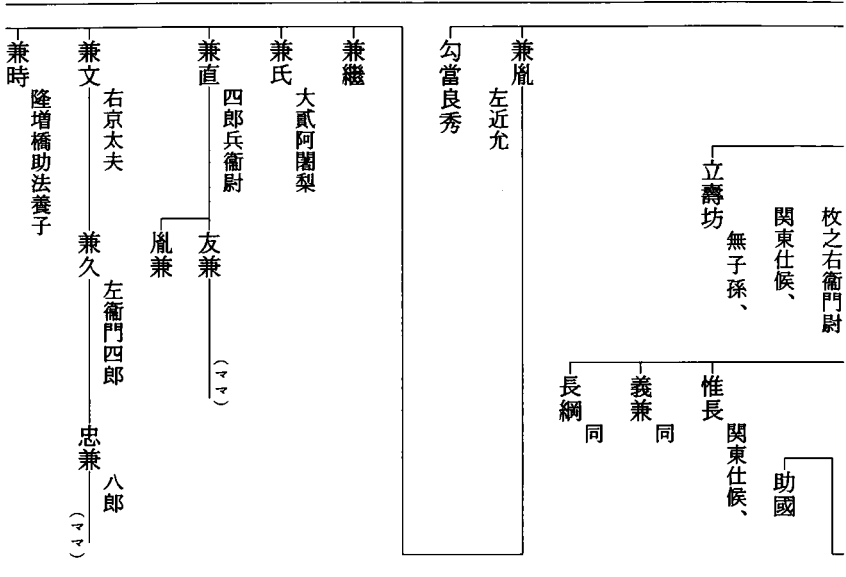
兼長 養子

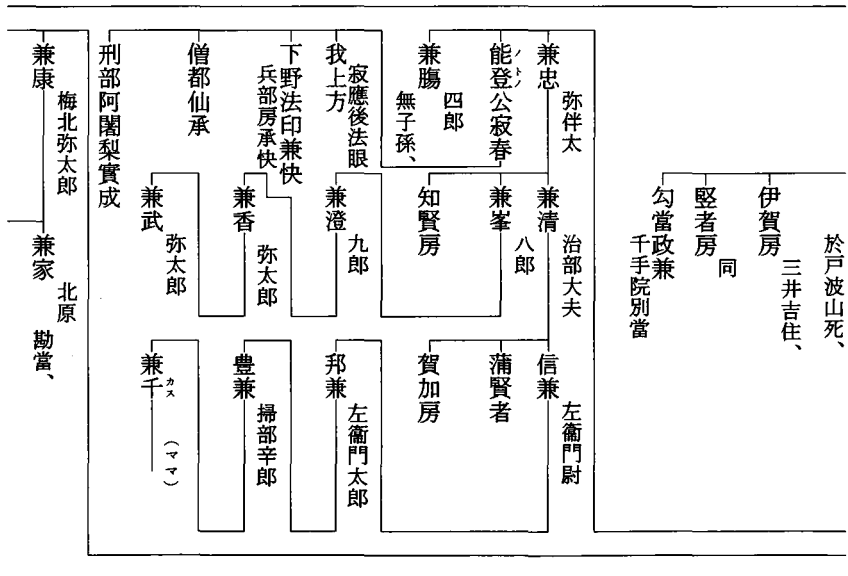
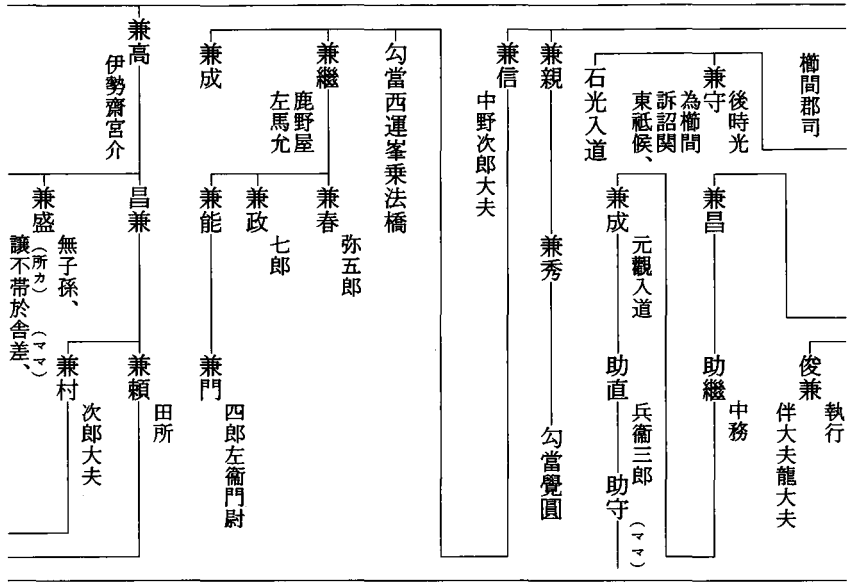
宗胤 無子孫、

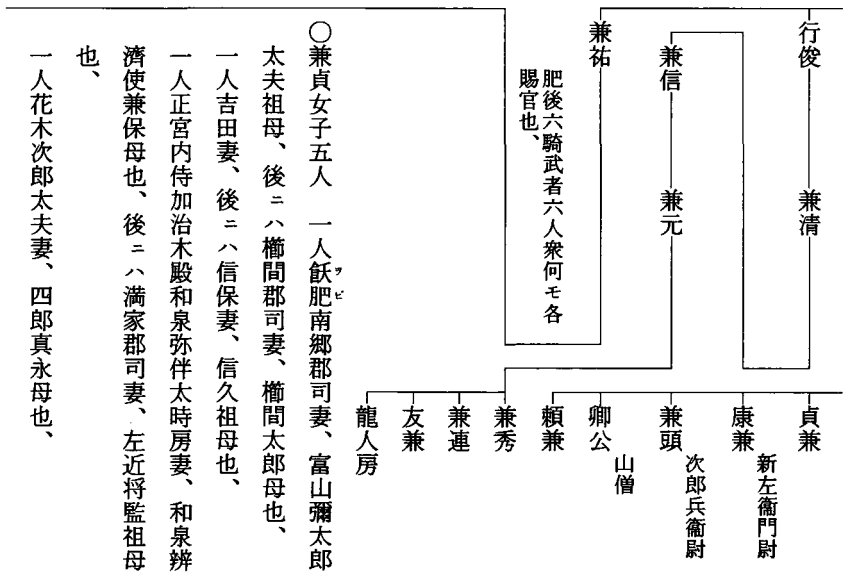
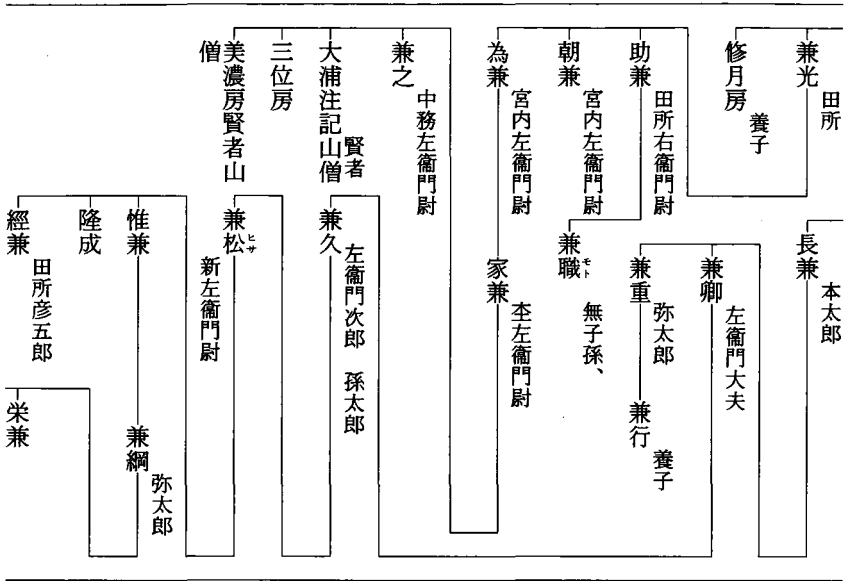
宗俊

兼宗 助宗

兼宗 助宗









一人薩摩在國司家通妻、大龍太夫母、後ニハ櫛間辨濟使助平妻、八郎四郎助繩・九郎四郎助屋母也、  
 ○兼俊女子五人 一人飢肥兵衛尉妻、後中九郎右兼妻也、

一人横河弁濟使原總二郎妻、

一人北郷弁濟使兼平妻、兼秀母也、

一人馬場二郎太夫妻、信保母也、

一人多祢島郡司有平妻、

○兼任女子二人 一人肝付太夫兼經妻、兼益母也、

一人信保妻、西俣小太夫信景母也、

○兼高女子四人 一人妬良平太夫良門妻、有數子、

一人日向中相郡司妻、元盛母也、

一人北郷弁濟使兼房妻也、定兼之持母也、

一人教仁院平八成直<sup>ナツ</sup>妻也、

○安樂又太郎肥後國へ打登、モチウチ將軍方ニテ、宮方ノ衆ト濱河ニテ合戦仕、分取高名比類ナシ、其時上洛仕、其中ニモスクレテ高名衆六人、將軍ヨリ直ニ賜官、第一番安樂隼人佐ニ御成、安樂名

字三人、此内二人ハ肝付・野崎、肥後名字三人、合此六人、何モ高名仕ルニヨツテ、肥後之六騎武者トハ此故也、兼祐曾孫為宗領、代<sup>(ミカ)</sup>ヒ隼人佐ト官ヲ給ハル、

兼貞 無子孫也、

兼清

義天之御時奉行也、江ニテ義天ノ御前ニフサカツテ討死仕也、高道也、

兼行

恕翁在京之時御供仕、騎馬之先打ノ衆也、安樂主殿介恕翁之奉行也、

兼平

兼伴

兼綱

笑翁之奉行也、大岳之御使者ニ上洛仕、在京之時ノ御屋形作半ニ洛ニテ死去也、安樂正樂

是也、

兼義

安樂兼義法名高道ト申也、生年四十八カリニテ肥後ツナテノ陣ニ立石塚之合戦ニアヒ高名仕、同氏稻葉介同合戦仕也、其已後三侯ノ高城ヨセノ時、巨山ノ合戦ニアヒ申也、此時モ同氏稻葉介働申也、此時新納四郎三郎殿討死也、

兼家

忠昌之御前為迎笑翁豊後ニ御上ノ時、十二人騎馬衆也、安樂隼人佐是也、

兼俊

七郎

出家一人

女子一人

肝付大宗内浦殿ヨリセキイタサレテ、志布志安

樂ニ御ノキノ時、安樂殿内浦殿ヲセメシタカヘ、肝付殿ヲ本ノコトク肝屬ニシスエ申サル、其時之恩賞ニ安樂殿四番目ノ子息ヲ御ツレ、内浦ニ十四町ヲ恩賞ニ出サル也、

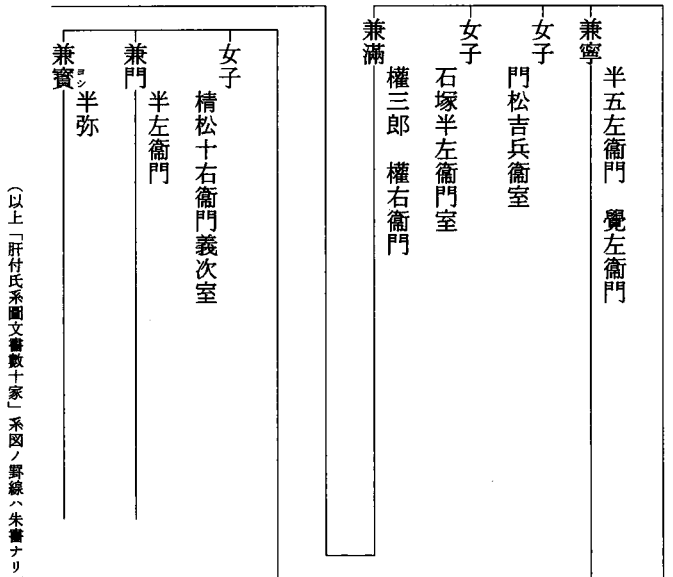
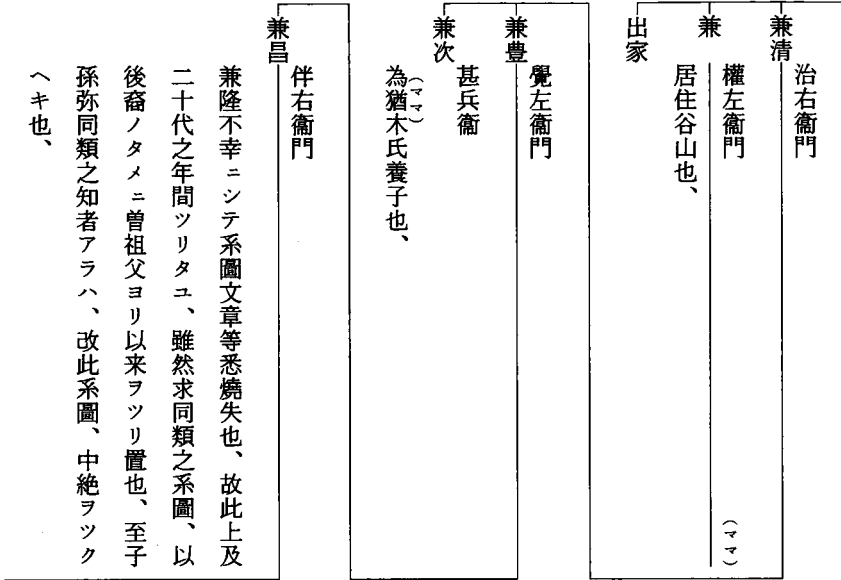
肝付權之介 豊前守

兼隆

○島津氏ト伊東氏ト大ニ戦事アリ、此時權之介十七歳ニシテ伊東河内守ヲ討捕ル、為恩賞地知行六町ヲ下シ給也、

○自二十三歳行兵道之法、日々冰ヲカキ敬礼スル事一日ニ三度、于時豊後岩屋之城ヲ攻玉フ事有、此時敵三人ヲ討捕也、

○飢肥合戦終テ、肝屬郡高山ニ居住ス、于時村田壽仙老末吉之地頭職ヲ給テ移居ノ時、共ニ移ラン事ヲス、メラル事再三、依之末吉ニ移居スル者也、



(中表紙)

〔薩州伊佐郡宮之城領主島津圖書久亮家臣

〕○宮之城之任藥丸四郎左衛門系圖 〕

518

○伴家藥丸系圖

○○天智天皇

大友皇子

起叛逆後大伴大友

孫勝部氏モ有、

余那足

黒主

内大臣 賜伴姓、 近江國志賀郡

辛崎黒主社は也、

權大納言

善名

參議國通

善雄

正三位權大納言 右大辨 權大納言

勘解由長官 檢非違使別當

△嘉祥三年大現

仲用

仲兼

右兵衛督

河内右馬頭

兼遠

判官代

薩摩守

兼行

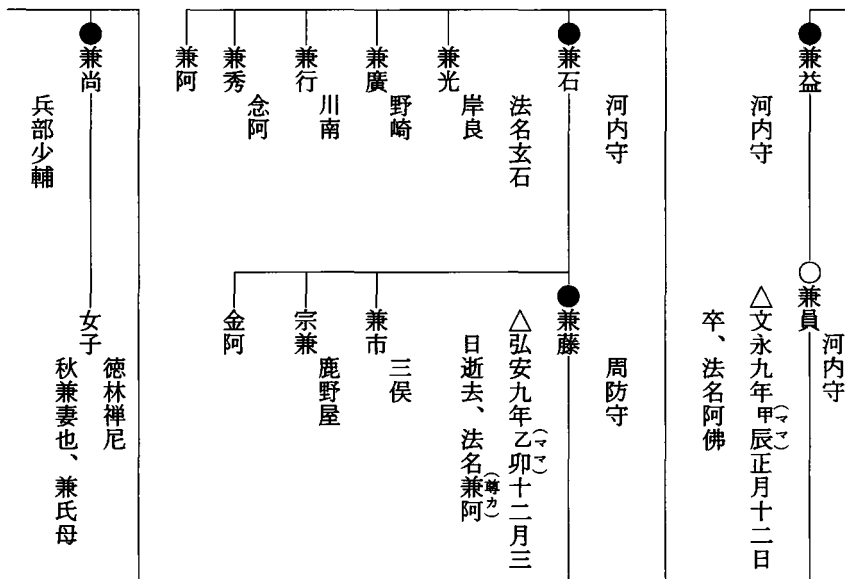
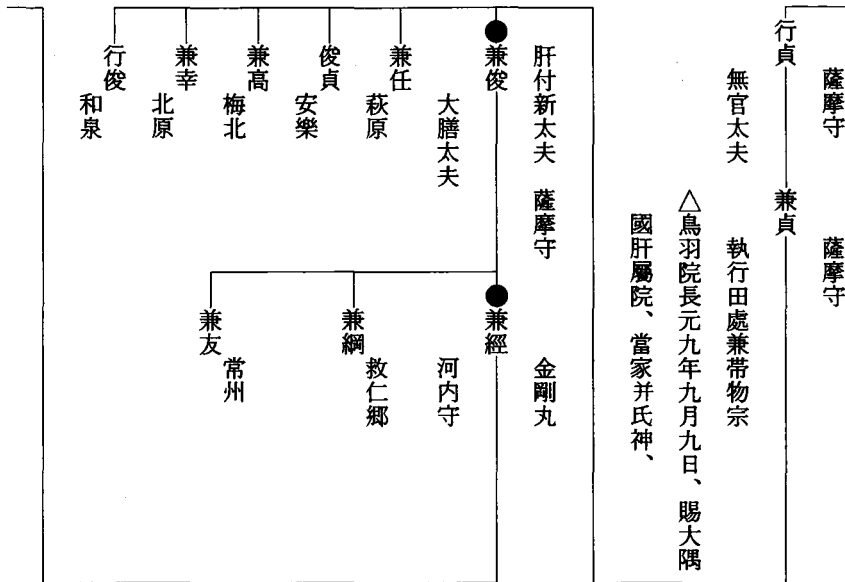
伴拯大監

△冷泉院御宇安和元年戊辰四月七日、賜薩摩國守

護職、同二年己巳八月十八日、始而下向薩勿鹿

兒島郡神食住居四十町御館也、

△村上天皇ヨリ賜舞鶴紋、



在鎌倉、

三俣八郎

兵庫頭

大膳太夫

●兼重

●秋兼

●兼氏

周防守

周防守

△應永廿七年庚

△嘉曆二庚辰十  
一ニ曆應三年庚辰

△永和二丙辰

子五月廿三日

月十七日卒、

霜月三日死、

死、号玄源、

法名尊光

号尊惟、

久兼 山下

一ニ尊性  
兼尚無子、為

權三郎

掣養子、

大外記

兼朝

太郎右衛門尉 他腹 長男

又八郎 河内守

加治木彈正忠

●兼元

●兼忠

△元久公御在京之時供

三郎四郎

奉、下向之後於加治

△文明十六年甲辰三月十一

木陣中死去、加治木

日死、法名義翁

事者退治畢、兼忠若

年比加治木殿へ渡進、

△寶徳元年己巳十月廿

五日死、法名天叟

國兼

又八左衛門佐

女子

依背兼忠之義追出肝付、

号加治木、

三郎四郎 周防守

●兼連

七郎三郎 周防守

●兼久

河内守

△文明十四年壬寅九月

△文明十九年丁未二月廿五

六日死、法名嶺南

日、高山城ヲ落、

越前守

同年九月廿三日庚申、肝

屬本城令入部畢、年五十

一死去、号昌山、

兼光

對當家謀反人

女相蔵司

還俗右衛門太夫

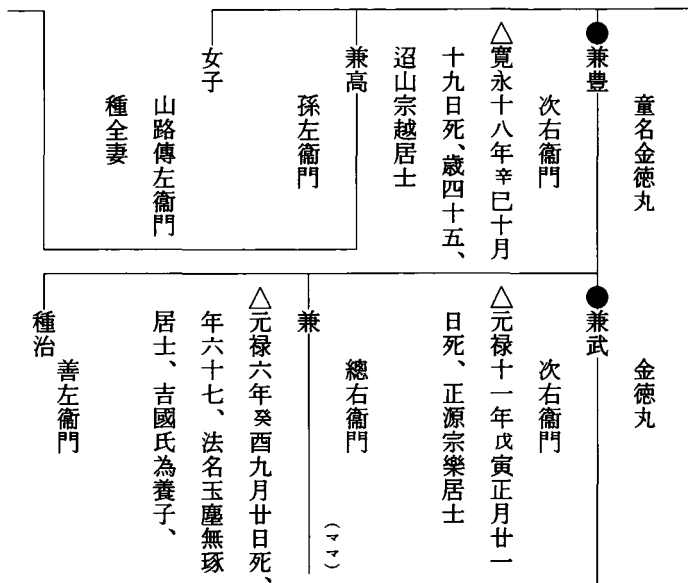
兼顯

越後守 鹿野屋地頭

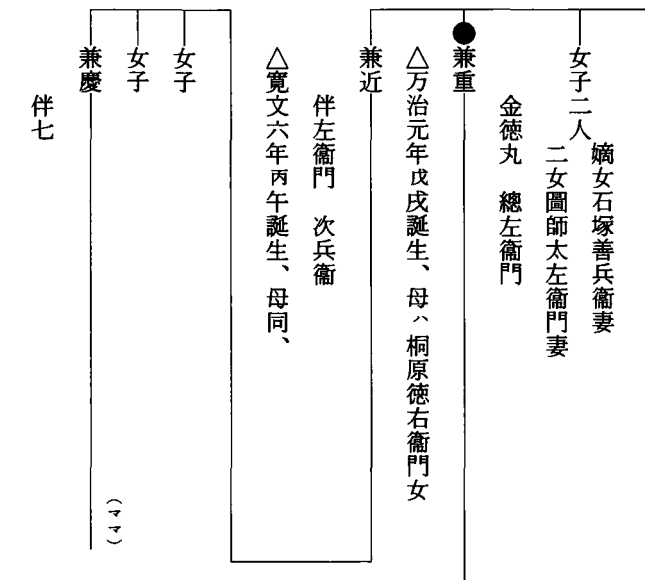
孫四郎 修理亮



據伊集院右衛門大夫忠棟  
入道幸侃之家、後屬島津  
下野守久元之旗下、



兼貞  
猶右衛門  
山路傳左衛門種全無嗣、  
為養子、  
藥丸孫左衛門兼高無嗣、為養子、實早河九左衛門  
子也、





△正徳三年癸巳誕生、母迫田仁右衛門女

伴之助

兼次

△貞享二年乙丑誕生、母貝崎市郎兵衛女

兼易

吉太夫 次右衛門

△元禄五年壬申誕生、母同、

(本系図ノ「○」・「◎」・「△」・「▽」・「●」印並ニ野線ハ朱書ナリ)

(中表紙)

「○」鹿兒島土津曲休右衛門系圖

此庶流津曲次兵衛

○伴家津曲氏一流系圖

人皇三十九代  
○天智天皇 — 大友親王 — 初賜伴姓、  
余那足 内大臣

善名 大納言 — 國通 權大納言 — 善男 權大納言

仲用 右兵衛督 — 仲兼 河内右馬頭 — 兼遠 判官代

兼行 — 行貞 無官太夫 — 兼貞 号梅北、

兼俊 号肝付、 — 兼經 河内守 — 兼益 河内守

兼員 河内守

兼石 又太郎玄石 — 兼藤 弥太郎  
西方弁濟使 尊阿

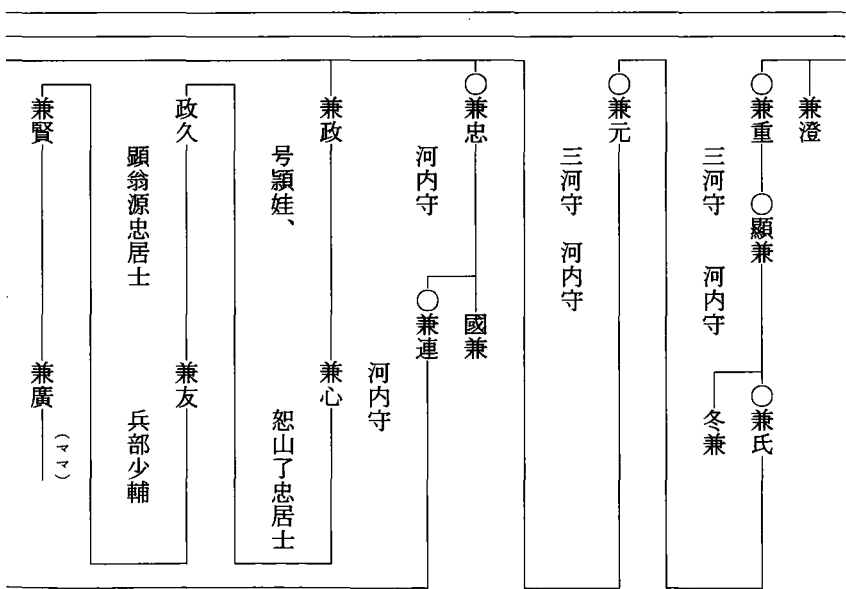
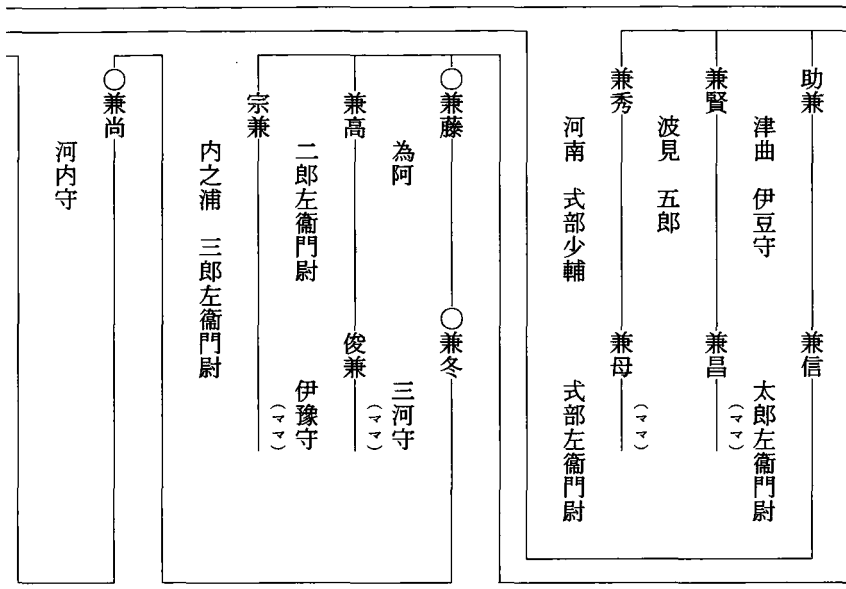
兼冬

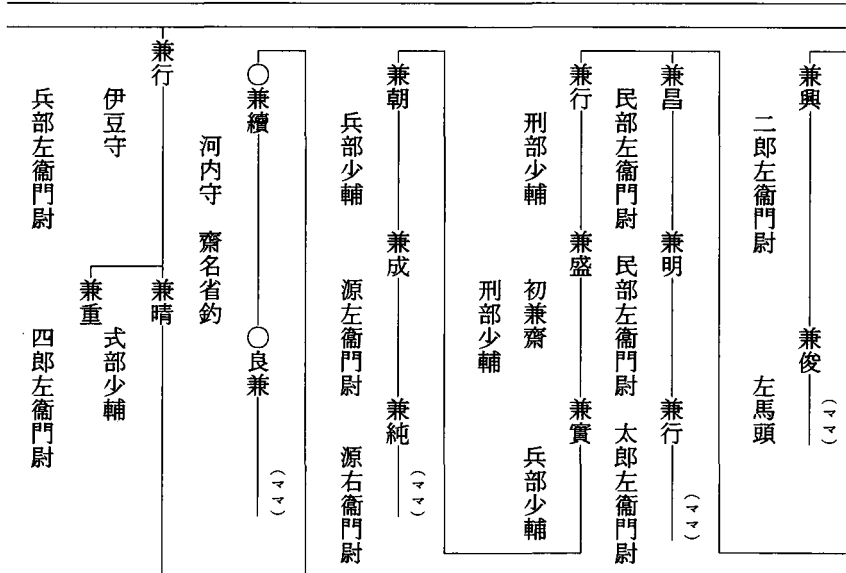
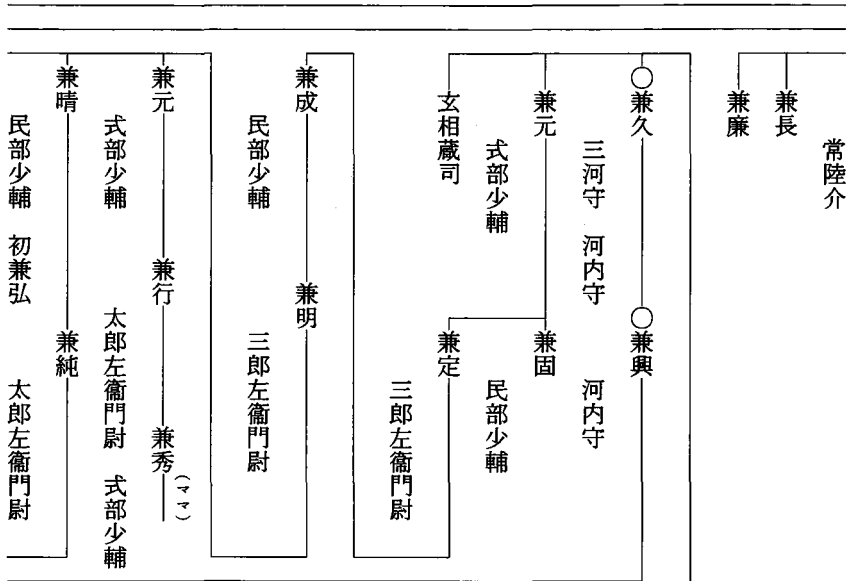
兼尚 五郎太郎

兼重 八郎 — 秋兼 又八 — 兼氏 龍久 — 兼元 天叟



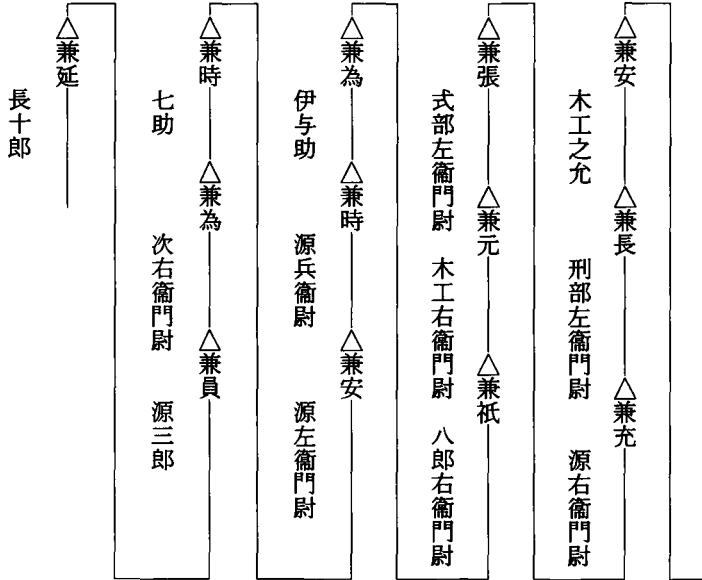








右系圖申良下小原万八千大明神之神主石塚相模所江致格護候處、明和九年壬辰四月廿四日、肝付彦兵衛



寫之者也、

(黒印、印文「肝付氏」)

(本系圖ノ人名上ノ「☉・「○」・「△」印並ニ野線ハ朱書ナリ)

(中表紙)

「鹿屋氏系圖并文書犬追物手組」

(朱印カ)

『志布志士』

鹿屋權兵衛

伴姓

鹿屋氏系圖

☉天智天皇 — 大友親王 — 余那足 — 善名

賜伴姓、 内大臣 大納言

大納言 嘉祥三年檢非違使別當

善男

正三位大納言 流罪、

右兵衛 河内右 判官代  
督 馬頭  
仲兼 兼遠 兼行 行貞 兼貞  
無官太夫

號肝付、太郎

△兼俊

領肝付城高山、

兼任 次郎 號萩原、

俊貞 三郎 號安樂、

行俊 四郎 號和泉、

兼高 五郎 號梅北、

△兼經 金剛丸

兼綱 號救仁郷又北原、

兼友 號檢見崎、

△兼益

△兼員

阿佛

△兼石 玄石 法名尊阿

兼廣 號岸良、

兼行

兼季(マキ) 號河南、

空阿

△兼藤 法名尊尚

兼市

女子 三侯之領主願阿妻

○宗兼

號鹿屋、

○得父兼石之讓而領鹿屋院、為辨察使、以鹿屋為家號、

○宗兼得日州三侯之領主願阿之讓、是依宗兼姉聲且願阿無男子也、故宗兼并領鹿屋院及日州三侯院而傳子孫、



金阿

周防介

○兼永

○永和之乱屬官方、於日州三俣高城戰死、

周防守 法名周榮

○兼雄

○兼雄十七歲未加冠之時、於鹿屋一谷長谷山城、戰于強敵平岡某斬首之、蒙數ヶ所深傷、

周防介 法名玄兼

○忠兼

○太守陸奥守元久公之家老、内ニハ勞政事外ニハ勵軍忠、

○太守公每ニ張行於犬追物之時、勤檢見矣、太守公所賜華翰幾多藏笥之、

周防介

○兼好

○於隅州加治木千本并數根、勵戰功得名譽、賜采地五町於河邊内矣、

兼幸

兼秀

兼盛

周防守 法名忠眼

○兼直

○兼資

若狹介 法名花慶 肝付河北殿掣

○於肥後國津奈木陣抽戰功、故 太守忠國公賜於隅州高隈而為履、

兼臣

紀伊介

太郎三郎 若狹介 越中守

○兼健

○兼健六歲之時、伯父兼直養之為嗣者廿餘年也、

有 忠國公之家老平田右馬介兼宗者、弟兼明之

舅也、以故兼宗吹拳而以兼明為家統、兼健者唯

領高隈耳、終ニ愁訴之而再兼健為家嫡矣、

女子三人

兼明 三郎二郎 周防守

兼正 新三郎 半左衛門尉

兼幸 又太郎 太郎左衛門尉 於三侯院志和池討

死、

民部少輔

○兼友

女子

兼公

兼家

於鹿屋討死、廿一歲

僧

○兼豐

周防守

○弘治二年丙辰八月十七日、北郷氏與肝付氏戰于

日州國合之原、兼豐為肝付氏之援而戰死於此地、

女子

僧

采女正

○兼任

○與父兼豐師于日州國合之原、為肝付方軍無利而

敗績、聞父兼豐戰死於末吉池之坊川涯而忽回馬、

再進國合之原會戰數回而終戰死矣、

○兼清

周防守 釣慰入道 月山江釣上座 病死志布

志永泰寺、

○父兄戰死而兼清少年也、故離本領鹿屋、而兼清

始移居于日州志布志、從是子孫相續、而住居于

此矣、

○兼方

伊賀 權之助 法名春清常室上座 志布志永泰寺

兼 市右衛門

○奧氏之猶子、住申良、

○明兼

長三郎 權左衛門 母有川備前娘

法名桂昌元清居士 明曆四年戊戌六月朔日病死、永泰寺

○兼治

長千代 權兵衛 母貴島主水娘

法名喝禪龍祖居士 延宝九年辛酉十月廿一日病死、永泰寺

522

兼明

小左衛門 權左衛門

女子 肝付伴左衛門妻

兼次

權之介

『志布志士

鹿屋權兵衛』

嶋津御庄官等謹言上

欲且依代、政所御下知、并庄号以後二百六十餘歲不

勤例此間、略ス、大隅國 正八幡宮御造營、當本庄不勤子

細、

副進

一通 普賢寺禪定殿下政所御下文案、承元二年九月日

狀云、於無舊記者、神人等今案計也、舊跡之外

可令停本庄新儀支配云々、

一 通 同政所御下文案建曆三年六月廿七日状趣、以同前、

△此外貞應二・嘉祿三・正嘉・弘長年間御下文御教書等

数通、又弘安元年十二月廿八日状、云造 正八幡宮・

島津本庄役事、一通同二年六月九日同断、

一卷 當御庄寺社繪圖、

一卷 同年中行事、

右、謹考故實、正八幡御垂跡者、和銅年中、正殿已下社

屋「欠」不残一字、被支配三州圖田日向・大之間、既五百

余歳、御造營敢所無相違也、嶋津本庄者、萬壽年中、以

無主荒野之地、令開發「欠」庄号、令寄進

宇治関白家以降、長元年中、奉崇伊勢太神「欠」宮依神告  
号神社

宇佐八幡、庄号以後二百余歳者、彼寺社造營之外、無余

事之處、神官等「欠」建仁三年始雖掠賜 宣旨御庄官「欠」

下略ス

於當本庄圖田之跡、為無主荒野開發地之間、停止新儀

「以下略ス」

右正應元年之言上状欵、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」八八八・八九三号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔本文書ハ「家わけ二」肝付文書一七八号文書ト同一文書ナルベシ〕

523 「鹿屋周防守忠兼覺書」

大隅・薩摩・日向於此三州、伴氏之源被分候次第之事、

少々存知分註置候、大伴親王後胤善男大納言、清和天皇

時、檢違使（非脱カ）之別當而御入候、其時流罪候、其末子兼貞言

仁、鶺鴒參詣之砌、三侯院御通候、三侯主平（大監）たひけんす

（季基）矣もとゞ言人之在所を一見候折節、平たひけん表に指出

候て、彼兼貞見參被申候て、客人者いつくより御渡候哉

尋被申候時、いつく共なき旅人にて候由被仰候、左様候

者、暫御逗留候へと留候間、一兩月逗留候、然者彼平た

ひけん被申事ハ、愚身者無子候、女子一人持申候、あわ

れく御茶取せ候へかし、左様候者我等か跡を可進之由

被申候、其儀候者ともかくも被仰候て、平たひけんの

聲に御成候、無程男子出来候、其次第御子出来候、已上

男子五人候、太郎肝付、二郎萩原、三郎安楽、四郎和泉、

五郎梅北と、皆々在名名乗候、兼貞梅北而遠行候、然ニ

梅北方ハ五人めにて候、兼貞之跡を次、即善男大納言十

建曆元年八月四日

番之けい馬の時、本とりにゆひ籠にて信仰申候十一面金

鋼之佛をハ格護之由申候、三侯之神柱ハ、平太檢殿御伊

勢夢想を蒙候て勸請候、其より梅北殿大宮司御持候、彼

平太檢殿在所、都城与梅北間原に、屋形于今在無隠候、

伴家幡之事、大堂宮の御幡被下錦にて候、幡横廣サ三尺

三寸、長サ一丈二寸五分候、竿五尺也、伴家幕文きつこ

ふの内に足上たる霧ニツ共ニくもてを合、根の日の松を

一本ツ、くわへ候、幕布上三のハ白、下二のハ黒候、妙

見氏神也、三侯院神柱大明神也、

(忠兼)  
鹿屋周防入道

(本文書ハ「諸家系図文書」四三・四九七号文書ト同一文書ナルベシ)

524 下 鹿屋院 (花押)

定補 弁濟使職事

散位伴朝臣兼廣

右、件職、相傳之由依申之、補任彼職如件、百姓等宣承

知、勿違失、故下、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二三四号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書一八六号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」五五号文書ト同一文書ナルベシ)

525 下 嶋津御庄鹿屋院

補任 弁濟使職事

左馬允伴兼賢

右、件職者、重代相傳所職也、仍補任彼人所也、恒例臨

時御公事等、無懈怠可致沙汰状如件、土民等宜承知、敢

無違失、以補、

寛元二年八月二日

預所僧 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二四三三号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書一八九号文書・「家わけ九」鹿屋文書一号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」五六号文書ト同一文書ナルベシ)

526 下 嶋津御庄鹿屋院

補任 弁濟使職事

伴千壽王丸

右、件職者、重代相傳所職也、仍補任彼人畢、恒例臨時御公事等、無懈怠可致其沙汰也、士民等宜承知、敢無違失、以補、

建長四年七月 日

預所 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四九八・五〇一号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書一九〇号文書・「家わけ九」鹿屋文書二号文書ト同一文書ナルベシ)

527 下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

補任 辨濟使職事

伴實兼

右、件職者、兼賢死去後、次男兼世望申之間、宛賜處、付御年貢等不致沙汰、不忠無極之間、收納使訴申之折節、嫡子實兼望申彼職条、非無其謂欵、仍停止兼世職、以嫡男實兼補任彼職畢、恒例臨時御公事等、無懈怠可致其沙汰也、若又雖為實兼、付御年貢等致不忠者、可被改易也、

士民等宜承知、無違失、以補、

弘長元年七月 日

預所法眼和尚位 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六三六号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書一九一号文書・「家わけ九」鹿屋文書三号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」五七号文書ト同一文書ナルベシ)

528 下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

補任 弁濟使職事

左馬允伴實兼

右、件職者、兼賢相傳之職也、然者以嫡子實兼、可為彼職之状如件、

弘長二年八月 日

預所法眼和尚位 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書一九二号文書・「家わけ九」鹿屋文書四号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」五八号文書ト同一文書ナルベシ)



鹿屋院弁濟使職事

右者、入道觀阿夜打殺害間事、申披候之上者、於向後者、  
可令還補之由、依 院家御氣色、預所殿御下知候也、仍  
執達如件、

永仁四年十一月廿日

僧榮擢(ママ)

謹上 鹿屋院弁濟使殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇〇四号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ」二「肝付文書」二〇一号文書・「家わけ九」鹿屋文書八号文書ト同一文書ナルベシ)

533 下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

定補 弁濟使職事

沙弥觀阿

右人、定補任件職畢、兼世沙汰所御年貢以下恒例臨時御  
公事、無懈怠可致其沙汰状、所仰如此、以下、

永仁六年五月三日

預所(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇二二号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ」二「肝付文書」二〇二号文書・「家わけ九」鹿屋文書九号文書ト同一文書ナルベシ)

534 下 嶋津庄大隅方鹿屋院

定補 弁濟使職事

沙弥觀阿

右人、定補任件職了、兼世之處、雖補定心、為重代之間、  
令計補觀阿了、定心去年於納取分者、念可糺返也、御年  
貢以下恒例臨時御公事、無懈怠可致沙汰之状、所仰如件、  
以下、

永仁七年二月一日

預所(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇三二号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ」二「肝付文書」二〇三号文書・「家わけ九」鹿屋文書一〇号文書ト同一文書ナルベシ)

535 嶋津御庄大隅方鹿屋院雜掌兼信謹言上

欲早領家一乘院鎮西御代管領匠作退座上者、當院惣地頭  
名越尾張孫次郎殿代官、有限領家御進止地、令押作六十  
余町水田并在家山野等、抑留追年領家御年貢濟物等上、  
適僅遂内檢地、重令押作三十余町水田・同在家山野等、  
毎年之貢濟物抑留間、彼是年之積不可勝計上者、所詮、



536 注進

康元々年以後悉遂結解、云御年貢、云下地、被糺返子細事、

副進

一通 地頭代官等年貢抑留注文

一通 同下地押領注文

右、於當院者、為領家一圓所務、至下地者、并濟使進止也、佛神事之重色、公家武家之所課、異于他、仍雖為地頭名、領家年貢不可有對捍之由、貞應・嘉祿・寛喜代々御下知炳焉也、況以領家御進止地、不相糺<sup>(糺)</sup>領家御使并并濟使、追年々貢一向抑留之上、適所遂内檢下地等、同押作之、令抑留御年貢、剩押止田貫社御米之間、年々積不可勝計、所詮、康元以後悉遂結解、云御年貢、云下地、可被糺返之由、為蒙御成敗、粗言上如件、

元徳二年八月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五五九号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書二二三号文書・「家わけ九」鹿屋文書二の1号文書ト同一文書ナルベシ)

嶋津御庄大隅方鹿屋院惣地頭代官等、領家御年貢色々濟物抑留并下地押領坪々在家山野等注文

合

一押作田三十二町五段貳杖仲 四八代<sup>(斗力)</sup>

御米一万一千五百六十一石七斗六舛此内可除地頭加徴米也、

是者令押作下地、不并御年貢坪々分、自康元々年至元

徳二年、一年別百五十六石二斗四舛宛、

一田貫社水田九町九段 六斗代

御米二千百九十七石八斗除地頭得分半分定、

是者近年打止内檢、所令抑留年貢也、自康元々年至元

徳二年、一年別廿九石七斗宛、

一大窪田六段四丈 五斗代

御米百五十九石八斗此内可除地頭加徴米也、

是者貞津守地頭代官、自弘安八年至元徳二年、四十七

ヶ年間一向抑留、一年別三石四斗宛、

一上加伊多田二町二段 五斗代<sup>(文永二年取換定)</sup>

是者當院定蓮寺別當兼地頭雜掌宰相殿明賢、正應三年以後抑留分、一年別十一石宛、

一馬庭田六段四丈 四斗代

御米十三石六斗

是者中村地頭代官、嘉曆元年以後初五ヶ年間押作分、

一年別二石七斗二舛宛、

一以有限領家御進止下地令押領之、不及領家御内檢坪之

田數六十余町分 三斗代

御米一万三千三百二十石除地頭加徴米定、

康元之年以后、一年別百八十八石宛、

一同野稻島百余町 一三代

御米七千四百余石

是者野原三十三ヶ所内除當知行分定、康元之年以后、

一年別百余石宛、

一在家園之濟物代事

錢七千四百余貫文

是者園百余字分、康元之年以后、一年別百余貫文宛、

一久木本市地新事

錢百十四貫文

是者下村地頭代官、自正和元年至元徳二年十九ヶ年抑

留分、一年別六貫文宛、

一狩倉事

皮三千七百枚

是者領家御狩者打止之、地頭お為宗、或狩倉跡在家等

仁不被相（種）綺雜掌之間、所懸申于地頭也、康元之年以后

七十四ヶ年、一年別五十枚宛、

都合

御米三万五千九十二石九斗六舛

錢貨七千五百十四貫文

狩皮三千七百枚

一押作田坪之事但依為公田、每坪余田雖在之、取帳面所注申也、

合

宮前田六反卍

上板吹田六反卍

鏡田九反卍

榎田三反

桑原田八反

樋渡四反

柚木田二反

霧田一丁二反

田代田八反

新開二反卍

柚木田一反卍

加津根田八反

小田代六反	唯念跡一丁二反	松本五反	樋渡五反
山口三反	田上田一丁一反	池尻二反冊	同坪一反冊
篠原三反丁	仲田六反	曾田一丁一反	牛込一反冊
加々留二反冊	荻原田四反丁	同坪一反丁	荒蒔田五反
始娘田三反冊丁	垣本二反	新一反	新一反丁 <small>二切</small>
寒水尻四反	新開一丁	同新二反	小種冊
田代田四反	大池田四反丁	小牟多田四反十	古河新丁
荻原新一反	小永田十	池頭一反	松本二反冊
崩下十	雜色新丁	中嶋二反	田崎松本冊
始娘田六反十丁	加那乃木三丁六反	窪田十丁	小前田一反丁
田部田一反冊丁	須久保田九反	助則新三反	河良田冊
池上新丁	河良新六反	上橋口三反	下渡瀬田四反
大曲新一反	庄司丁	鳥越田一丁一反	口町五反十
福定七反 <small>切々</small>	新上 <small>寛乍</small> 一反十	下牛垣四反	上牛垣三反冊
得万新十	黒太郎乍十	永水取二反 <small>(介脱カ)</small>	平田一丁二反冊
北田二反	古世城田十	上鼻田二反	牟呂田三反
渡瀬田丁	久木本丁	大窪田六反冊	上加伊多田二丁二反
小牟多田五反	寺前五反	馬田六反冊 <small>切々</small>	

- 一 田貫社田九丁九反
- 一 押領田六十余丁村之分
- 一 園之注文
- 一 所藤三郎則光園
- 一 所物太郎之
- 一 所藤五別當之
- 二 所下津岳
- 一 所紀三宗吉之
- 一 所狩窪紀藤別當清宗之
- 一 所大明神之
- 一 所中村源太郎之
- 一 所福礼命婦之
- 一 所弥中次之
- 一 所時取庄司之
- 一 所瀬貫之
- 一 所皮籠弥太郎清房之
- 一 所佐加利山六大夫之
- 一 所六郎之
- 一 所高井田二郎之
- 一 所新源太細工重房之
- 一 所藤平次之
- 一 所崩内行松弥二郎宗弘之
- 一 所田上名頭紀藤別當成久之
- 一 所紀三次之
- 一 所皮籠四郎清平之
- 一 所大窪小藤太別當之
- 二 所幡麻房西信房之元弁濟使堀内
- 一 所二郎大夫之
- 一 所吹上權別當則安之
- 一 所葎迫梶取房之
- 一 所弥五別當之
- 一 所郷原武重之脇在家在之
- 一 細工房之
- 一 所田崎弥藤太郎之
- 一 所踏繼弥二郎之
- 一 所宮仕五郎之
- 一 所草七大夫利友之
- 一 所高岳宮原之
- 一 所得万原之
- 一 所馬庭新大郎別當之
- 一 所長崎權次郎之
- 一 所權次郎別當之
- 一 所弥平太檢校守門之
- 一 所權大夫貞正之
- 一 所野間尼之
- 一 所田崎窪河内大夫守近之
- 一 所老弥二郎國道之
- 一 所青木之
- 一 所王平末平之
- 一 所中三郎之
- 一 所大曲覺文之
- 一 所小藤太郎之
- 一 所羽伊師弥太郎之
- 一 所藤伴太郎之
- 一 所清水弥二郎之
- 一 所加津根田之
- 一 所新二郎之
- 一 所專當守重之
- 一 所加伊多田溝口之
- 一 所綱丁三郎之
- 一 所久木本源藤次之
- 一 所古世城之
- 一 所弥大夫之
- 一 所紙漉之
- 一 所五郎別當貞正之
- 一 所圖師覺印之四ヶ所在之
- 一 所梶取房之多弥平六居在之
- 一 所和田新太郎之
- 一 所當時地頭所池上

一所曾田河内五郎弘用ゝ 二所白崎  
 廿八ヶ宇加横山木原定、 二所加那乃木  
 笠野岩屋迫数字 吉別苻数字  
 桶工六ヶ宇 行走数字  
 若荷迫数字  
 一野原注文  
 立山原 平見ゝ 竹山ゝ  
 得万ゝ 福岳ゝ 肥迫ゝ  
 牧内ゝ 谷田ゝ 紙漉ゝ  
 板吹ゝ 茗荷迫ゝ 中ゝ  
 阿内木ゝ 行走ゝ 桶工ゝ  
 柿ゝ 堀内ゝ 打門ゝ 大曲ゝ  
 笠野ゝ 北野ゝ 小牧ゝ 白鶴ゝ  
 加那乃木ゝ 吉別苻ゝ 鳥越ゝ 船岳ゝ  
 木原ゝ 横山ゝ 田崎ゝ 郷ゝ 立神原  
 一狩倉注文  
 大炊平 走出 立山 小板屋 牛平  
 由須乃木 苻谷 白木 大板屋 高牧

537

犬追物手組於肝付犬追物

殿  
 肝付周防守 嶋津式部太輔  
 伊地知左衛門尉 平田又七郎  
 長野新右衛門尉 肝付又八郎  
 蒲生刑部少輔 鹿屋三郎二郎  
 嶋津薩摩守 村田太郎左衛門尉  
 嶋津左衛門尉佐  
 検見 喚次  
 嶋津十郎左衛門尉 別苻因幡守  
 御屋形様忠昌御代

荒平 寺尾 牟礼 黒山 屎比利山  
 楊橋之小平 赤木平 須田木 内乃小平 中武  
 鋤崎 東吹 西吹 妻鹿平  
 右、水田在家園ゝ山野大略如斯、此外尚以押作在家以下  
 在之、且注文如件、

(本文書ハ「旧記録前編」一五六一〇号文書ト同一文書ナルベシ)  
 (本文書ハ「家わけ二」肝付文書二四号文書・「家わけ九」鹿屋文書二二の二号文書  
 ト同一文書ナルベシ)



541 鹿屋院預所方見參新用途事

合參貫文、

右、用途宗兼手(自脱カ)ニ從(マ)所請取如件、

文保元年六月九日

(肝付兼藤)  
尊阿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇三〇三號文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書二〇八號文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」四四號文書ト同一文書ナルベシ)

542 覺

一 御普請之事、

一 篋きりの事、

一 たのもそや之事、『字不知付り歟』  
竹尻之事、

一 諸口番衆きほうはぎ之事、

一 板城戸之事、付城近山切まじき事、

一 弓鉄鈔之事、

一 城屋敷あらすまじき事、

一 一番普請懈怠有間敷事、

一 鹿屋周防介被存候八木之事、(殿脱カ)

一 富隈御藏米之事、

一 秋月殿財部うつり之事、

一 福島(往)へ性還之仁、諸事可被嗜事、以上、

七月廿八日

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」八一六號文書・同附録「二九四號文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「家わけ九」鹿屋文書二七號ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ「諸家系図文書」四六號文書ト同一文書ナルベシ)

(久高)  
椀山權左衛門判

(中表紙)

「鹿屋氏庶流略系圖并犬追物手組家傳書付」

543

『新城之臣

鹿屋理右衛門』

私儀此内差出を以申上候様ニ、系圖并文書等所持不仕候ニ付、上古之儀少茂存不申候、近先祖より以来由緒之荒増、私無據親類ニ年成者御座候、彼者江委細相尋、又者

従前々承来候筋を為御目安、略系圖ニ書記差上申候、御引合之御證文茂可有之候間、御しらへ可被下候、

『新城

鹿屋理右衛門』

鹿野理右衛門系圖

○鹿屋純慶

幼名不知、

彼人之儀申傳候者、鹿屋領罷居タル由候、其時分色々取乱之儀有是、戦死為仕由、定而御引合之物茂可有御座候、其塚ニ大松之木ヲ植置、于今純慶之古塚ト申傳候儀、少茂無別儀候、且亦彼人弟余多為有是之由候、其子孫共祥(詳カ)相知不申候、

龜千代丸

弥九郎

彼人久保公高麗江御渡海之時分、御供人数之内ニテ、於彼地戦死為仕由候、

兼昌

龜次郎

彼人事、出家ニ成、文達藏主ト為申由候、兄弥九郎右通戦死仕候ニ付、子孫無是、家筋断絶之儀ヲ別而残念ニ存、致還俗得一男候而、則家督ヲ讓、又々出家ニ立歸リ融山之為申由候、左候而鹿屋江定蓮寺ト申候住持仕、其以後右寺ヒケ申候ニ付、直ニ始良之含粒寺ニ致入院、遂住ヲ為申由候、

兼継

理右衛門

彼人鹿屋江住居、武功有是候人ニ而、右一筋ヲ以、自義久公雖有上意ヲ、請義久公之御姫新城様江被召附、高杯拜領仕、至只今少持申候、

兼盛

新左衛門

彼人島津忠仍公江奉公、中納言様江茂至兩度御目見得仕候由緒、私同名之親類又ハ他之古老之



人モ存被申候、

兼歳

伴右衛門

彼人ハ鹿屋江住居、子孫茂有是、于今連續仕候、

女子 松尾

彼女、島津(忠博)又助殿幼穉之時分ヨリ守育、別而奉公仕候一筋以、太守光久公江 御目見得ヲ仕候、其節御意被遊候ハ、又助幼少ニ而両親無是人ニ而候間、随分成人迄入念守立奉公可仕由 御意ニテ、左候而御守母ニ 御意候一筋于今皆々存ニテ御座候、寛文七年丁未四月十日、七十二歳ニテ卒ス、

善長坊

山伏

彼人、高山衆圖師万左衛門猶子成、他家継申候、

兼教

龜徳丸 三左衛門 法名通岳一圓信士

彼人、鹿屋江住居、寛永五年戊辰六月十四日誕生、

545

女子 鹿兒島衆和田孫右衛門妻

寛文三年癸卯三月十六日誕生、母鹿屋衆福崎万左

衛門妹

兼矩

弥九郎 理右衛門

寛文七年丁未四月廿四日誕生、母右同腹、

右者島津久侶江奉公申罷居候、

『高山土

鹿屋勝左衛門』

伴氏朝臣鹿野屋之孫流

覺元祖

生死母方不詳、

△鹿野屋甲斐守

慶長年中高麗御陣相勤也、

生母者不詳、

民部左衛門尉

慶長年中琉球御陣相勤也、道号月仙 法名道心上坐

兼益

勝左衛門尉 生母不詳、

民部左衛門尉有一女、依無男子嫁一女連屬、實者  
兒島勝兵衛尉綱良二男也福久島豊州從士、道号栢庭  
法名宗壽居士

三左衛門尉

兼乘

慶長十二年誕生、母者民部左衛門女  
寛文九歳十月十四日病死、道号了菴 法名常縁信士

安陣

二右衛門尉 母者兼乘一腹、

二見藤七兵衛尉依無男子成養子也、

兼經

勝兵衛尉 母者兼乘一腹、

重共 覺兵衛尉

長瀨木工兵衛尉重共依無續子成養子也、

木工之助

兼如

寛永九歳正月廿日誕生、母者内田儀左衛門尉女也、  
先年此表 御巡見之時、奉見得 綱久公、改勝左  
衛門尉、

女子 隈元行仙坊圓如妻 母者兼如一腹、

兼家

松千世 軍平

寛文十二年三月廿八日誕生、母者野添平兵衛尉女  
也、

女子 山口廣乘院妻高隈宗職

五月朔日誕生、母同腹、

「女子

八月廿六日誕生、母同腹、

鹿屋氏系圖

『加治木家臣

鹿屋仁右衛門』

○兼詮

鹿屋周防介 從是前世不知、後世九十年餘不知、

彦四郎

兼貞

兼秀

天文元年壬辰八月八日、廿九歳ニテ卒ス、  
墓所肝付拂川有、

恒治

九郎左衛門尉

實ハ兼秀嫡子、他家岩本名字名乗球琳江住居、

兼長

三部千代 又三右衛門尉 彦右衛門尉 壹岐守  
永祿五年壬戌十二月十七日、於帖佐誕生、

女子

指宿ノ城頼姪殿奥方江奉公、

兼慶

與四郎 又仁右衛門尉 入道良可

女子

仁右衛門尉兼信妻 寛文六年八月廿五日死去、  
歳三十歳

兼信

仁右衛門尉

寛永十八年巳七月十二日、於加治木誕生、兼慶依  
無男子、枝元大藏重延三男為贅猶子鹿屋家ニ入、

兼記

寛左衛門尉

寛文六年午七月十日、於加治木誕生、母ハ仁右衛

門尉兼慶女

兼次

三之丞

天和二年戊十月廿五日、於加治木誕生、母ハ大山六

之丞綱安女

547 應永二年乙亥二月廿九日 犬追物手組

伊東殿

嶋津又三郎

嶋津越前守

稲津弥次郎

伊東伊豆守

嶋津弥三郎

嶋津修理亮

野村源五

湯地五郎四郎

鹿野屋周防介

嶋津殿

伊東遠江守

檢見

嶋津上野入道

548

於日州飢肥、各其家々を記、弓馬之道を嗜、御犬追物

三日御執行の場ニ令相出之趣、後代子孫為永見筆紙ニ

記置所、弟他家之養子なる故、豊浦左近將監幸綱ト名

乘是也、惣領家者肝付なるへき者也、

鹿屋周防守伴氏朝臣

應永二年三月十七日書之、

兼詮

549

一鹿屋三左衛門尉兼秀、肝付拂川より窄人いたし、永禄

五年辛酉四月七日ニ帖佐江中宿三年、從其求麻ニ住居、

妹指宿之城願娃殿奥方江奉公、兼秀嫡子岩元九郎左衛

門尉恒治他家之雖養子成、右代々持傳る書置を相渡候、

弟三部千代江以来ハ可被相渡候、元龜元年辛午二月十

四日、先恒治ニ渡置者也、兼秀父彦四郎廿九歳ニ而死

去、肝付拂川ニ墓所有之、母ハ帖佐舟津村上小森ニ墓

所有之、

一於隅州薩州ニ、鹿屋三右衛門尉兼長御奉公之條々、

一肥後表御弓箭、筑紫之城貢、天正十四年丙戌七月七日、

川上左京亮久親ニ両人相付、大手之口よりつめ入、久

親鐵逢之敵を披官弥平之丞打取是也、久親右之かひなをきり、引退敵を兼長打取、各城を責落被成、三四時之間ニ久親死去有を、肥後八代迄川船ニ乗下、川田村庄屋外屋敷へ、同九日之晩葬礼、八代増福寺被成導師候事、

一右同年豊後國江御出陣、某御供、明ル十五年丁亥四月ニハ、羽柴美濃守殿催教萬騎、如雲霞飛入、敵勢射失今津川原之石之火はなを散し、雨ハ瀉水をなかしやしをたとる折節、福岡新兵衛殿同前ニ某鉄炮を射はなし、銘々ニ名乗、惟新様御引陣之御供、山田新助殿日州高城ヲ構、一戦ニ相究被成後ニハ、籠城、川内表ニハ、関白様御下着、平佐之城江寄多勢責たゝかひ、上方之軍兵垂打ほろひ、和談之調法、桂殿御家之ほまれを被成、其後 義久様 兵庫頭様御入道被成、大関様江御參會之事、

一羽柴美濃守殿御使土屋大膳正殿、関白様へ參上之路次ニ出合狼籍衆三人之内、洲邊弥七・出石五郎兵衛殿・某江被仰付生害仕、右之打首三ツ、拙者為御使祈

答院竊田江令持參、上使荒川千大夫殿・赤松三十郎殿江相渡、其後新納武藏守殿、菱刈於曾木ニ 関白様江御目見得、御質様茂御同前御上洛之事、

一天正廿年高麗江御渡海、某御供、奥陣迄色々御奉公、其年年号文祿元年ニ相替候事、

一文祿三年甲午六月廿一日、川上三河守殿御使ニ而、於高麗ニ毛利老岐守殿御陣所江朝鮮人夜掛ニ寄る折節、きぬはる川洪水之故、御見次勢難成所ニ、某川を得たる由 惟新様被 聞召上、毛利殿江御使、其以後よりハ川為御用心、御馬之側へ被召列、辛勞為申 御意ニ而、知行十石伊集院郡山之内ニ被下候事、

一慶長四年己亥、伊集院源次郎殿就謀叛、明年之落城迄庄内へ相詰奉公之事、

一慶長五年庚子、美濃國関ヶ原江御出陣御供申、同九月十五日合戦、忽破ちりく、某中國を陸地ニ備前之國へ渡り候得者、彼表ニハ薩摩入之由候而、黒田甲斐守殿・肥前龍造寺・橘左近將監殿・加藤主計頭殿其外諸軍勢出立ニ打交り、肥後八代川田村庄屋所江加藤殿宿

陣、軍衆一日逗留之事、

一 彼庄屋、先年御弓箭之刻、某知人之故、ひそかに忍ひ寄致内通、諸大名衆差集り、薩摩方軍之評議有口傳、

相談念を入承届、又庄屋所へ前川上三河入道殿御宿被

成ニ付、(川上忠誓) 肱枕老へ彼庄屋より御傳言之條々之事、

一 伊集院源次郎殿より薩摩方こまか成繪圖并所々地頭衆を書立、彼地へ被差遣候事、

一 からくりハ何時茂船手方より入候する間、諸廻船江御用心之事、

一 伊源次郎殿肥後表からくり両度之使衆、家名ハ口傳ニ有之事、

一 川田村うやなき湊より某両度小舟を仕立、使薩摩方江被送届候事、

一 川上左京様墓所連々之掃地等、今度鹿屋三右衛門尉殿見及御存知之前事、

一 十一月十日ニハ芦北表へ打出、諸軍勢之物頭相しるし、長登り数等迄見及、其夜綱木浦より山ニ入、前後忘月星を方宛ニ心得、急き出水表御番大将紹益様・御地頭

本田六右衛門尉殿江右之條々申入、御道具衆兩人并送馬被相出、帖佐へ急き 惟新様江彼地之様子細々申上候事、

一 伊勢平左衛門尉殿為御使ト、敵陣之催等、態与山くゝりを被遣候而茂是程迄ハ有間敷ニ、今度為御家之忠節御大慶之 御意ニ而、後日御褒美可被加之由被仰聞候事、

一 龍伯様少将様江早々可申上任 御意、則富隈江新納四郎左衛門尉殿同心を以、鎌田出雲守殿・平田太郎左衛門尉江申上候處ニ、 御両殿様御前江被召出、彼地之様鉢具ニ申上、忝御礼御使猿渡新介殿ニ而被仰聞候事、  
一 慶長六年辛丑二月九日ニハ、筑前之黒田殿より使者鳥居勘左衛門尉殿を日向八代江留置、從 惟新様御使伊勢平左衛門尉殿・相良五郎左入道殿江某被相付、某後ハ吾等一人彼地江差越御使申候事、

一 右同年之五月六日、筑前江御使、行脚ニ身をやつれ、風雨をきらハす野宿山泊、肥後八代江たとり出、川上肱枕老より音信之銀子三枚、川田村庄屋へ相渡シ、急

き筑後之國榎津之渡りの於番所、已ニ一命あやうきを、種々様々武略を申のかり、筑前福岡之城元、或在々所々を廻り、口傳有様子承合、急き罷帰、御使之首尾申上候事、

一慶長七年壬寅三月十一日、黒田殿江者御使并肥後肥前ニハ口傳有様子ニ付、彦山參之支度ニ紛、山をくゞり、谷峯を越、熊本へ忍ひ寄、又龍造寺城元ニて稠敷あやしめられ、漸色々ニ謀、筑前黒田殿内鳥居勘左衛門尉殿ニ付御意趣之段々申入、早々帰り、御返更之條々并両國城本之様子、細々申上候事、

一慶長八年癸卯六月廿日、黒田如水老江御使、前ニ茂陸地ハあやうき更共有之ニ付、此度ハ出水表より塩船之商人ニ成り可參御談合を以、筑前國ちりく江着船、黒田殿老中衆久保山四郎右衛門尉殿・小河喜助殿取成を以、黒田甲斐守入道殿へ御目見得申、鳥居勘左衛門尉殿為御使、銀子五枚被下、行来無更ニ令帰宅、御返更慥ニ申上候更、

一慶長九・拾兩年、京都江伊勢平左衛門尉殿・松岡市右

衛門尉殿・中原圓乗坊・福永勘解由殿・三坂伊賀守殿同心上洛申御奉公之事、

一慶長十一年丙午正月廿三日、本田源右衛門尉殿・伊勢平左衛門尉殿為御使、前々御奉公、辛勞為申加増之知行拾斛之屋敷沓ッ、入来市比野村ニ被下、上様被成恐天下御隠居御逼塞時分ニ候條、先乍少分宛行るゝ之御意を分ヶ被仰聞候事、

一御分國地下方々御奉公之事、  
一兄岩元九郎左衛門尉恒治、求麻江住居ニより、本田源右衛門尉殿ニ付御暇を申、慶長十五年庚戌九月十日、彼地へ差越候時分、右直之判紙之書置、恒治より兼長受取持来所ニ、加治木ニ而寛永七年庚午八月六日之大風、俄之潮浪ニ濡埋り破すたるを、沓岐守兼長見究、糺求他筆書寫置、

一永祿五年壬戌十二月十七日、帖佐餅井田村ニ而兼長誕生之事、

一帖佐新正八幡、親子之産神候條、能々尊拜可申候事、  
一向後子孫次々ニ如斯手前之奥書を仕、可相渡事、

右之書置、鹿屋二右衛門尉兼慶ニ令附屬早、

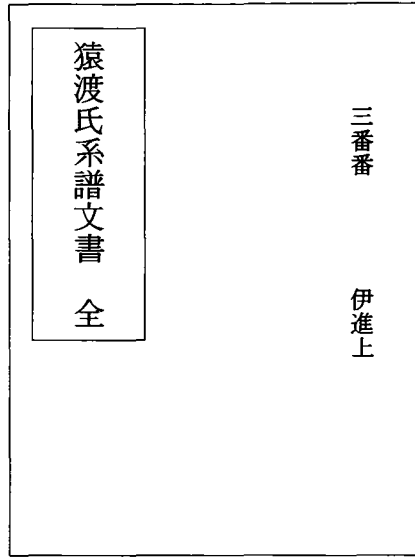
鹿屋老岐守

兼長



猿渡氏系譜文書

(表紙)



(中表紙)

「猿渡正統系譜 本平姓後改藤原姓」

一猿渡越中信光以来之儀、猿渡少左衛門室覚之趣、勝目助左衛門宗将自筆ニ而書記、山元孝右衛門清武迄被指越、清武ヨリ猿渡喜右衛門信安ニ被遣置候、宗将室者

右之少左衛門息女ニ而候、少左衛門室者猿渡掃部兵衛信豊息女川上小市郎ニ嫁候而出生候、小市郎者川上兵部左衛門二男ニ而候を乞請、猿渡を名乗せ号猿渡小市郎、後ニ改城之助・掃部之助、當家之二男家ニ取立置候、委細之訳者記録之内ニ記置之候、宗将書付左記、

1

覚

【正文有】  
猿渡越中

戦死ニ而候由候、

掃部兵衛

羽月地頭之時、高麗御陣江致渡海、於彼地十一月十八日ニ四十四ニシテ戦病死之分ハ不承究候、法名雲山元朝居士

与三

掃部兵衛弟ニ付跡目ニ被仰付候哉、四百石か之高之内百石ハ我等母ニ附属ニ而、餘高并系圖文書諸道具ニ至迄相渡候由候、

養子  
喜右衛門

加治木ノ住日野何かしノ家より被成候由候、  
此代ニ加治木より鹿兒嶋ニ移ニ而候由候、  
与三殿此代之間ニ二兵衛殿ト申人養子之様ニ  
承候、

(マ)

養子ニシテ川上兵部左衛門殿二男小市郎、後ニ城  
之介 掃部之介

女子

母ハ伊地知何かしノ娘、當所ニ住ノ由候、伊地  
知吉右衛門殿家ニテ候、帖佐之伊地知吉右衛門  
殿家ニテハ無之候、祖父事、我等母存人持、り  
べつ後ニ五代於喜安ニ取合、

我等

右ハ夕申入候様ニ母ニ相尋書記申候、書面ニ些難記ニ  
付如此ニ候、若キ時分ハ心寄不申、其上申聞せ候人無  
之、夢之様ニ覚候、就夫こまゝ之事、一圓埒明不申  
之由被申事ニ候、喜右老へ御取合之時分、御引合被成  
可被下候、尤參ヲ以可申達候へ共、普請ニ取込申候て  
如此御座候、以上、

〔延寶五巳年〕

九月廿五日

山本孝右衛門様  
(清武)

勝部助左衛門  
(宗將)  
(目力)

一右之通、勝目助左衛門より書付被差越候、已後段々之  
訳助左衛門へ相達、乍其上書付山元孝右衛門を頼、助  
左衛門方へ遣置候、委細之趣并書付留左記之、

一猿渡家之系圖、帖佐衆猿渡少左衛門殿後家との覚之  
通、勝目助左衛門殿より書付候而、山元孝右衛門殿

ニ而被遣候、少左衛門殿後室与申候ハ、猿渡掃部兵(信忠)

衛直之娘、川上兵部左衛門殿二男城之助殿へ嫁候而  
出生候女子ニ而、掃部兵衛為ニ者右後家者孫ニ而候、

右之通城之助殿江取合せ、掃部兵衛二男分ニ取立、

持高八百斛之内百石女子ニ令附属、猿渡城之助与名

乗せ別家ニ被取立置、掃部兵衛一筋者弟ニ而候与三

へ持高七百石并家財文書等一職被致附属、掃部兵衛

跡目与三相續ニ而、御奉公相勤被申候事、

一 右系圖之表ハ、与三を二男ニつり被申候、依之勝目

助左衛門殿へ直ニ申候ハ、系圖之表致相違候、與三

者掃部兵衛一筋之跡目無別儀候、就夫被遣候系圖小

書之通高百石之外、文書家財本高何レ茂与三へ相渡

候、女子江者高百石ニ而城之助を聳ニ取、猿渡を名

乗せ被申候、本家之一筋与申ニ而者無之候、御方よ

り被遣候系圖之小書者、與三を掃部兵衛一筋ニ書記、

扱つり様者二男ニ相見得候儀如何ニ候由申候へハ、

此方不案内故右通ニ候、与三殿儀者如何ニ茂掃部兵

衛殿一筋無別儀候、夫故持高之内百石女子江附属ニ

202

而、本高家財文書等、不残与三殿江讓ニ而、掃部兵

衛殿一筋相續ニ而、其跡喜右衛門殿被為續候由、少

左衛門後家より被申候、其趣ニ小書ニも仕置候つり

様を二男ニ仕候儀者、系圖方不案内故ニ而候間、右

系圖者捨候而可然由、助左衛門殿被申候間、互ニ致

落着候事、

一 右相違之系圖受取召置筈ニ而無之候得共、存ル子細

有之召置候、後日為見合掃部兵衛一筋之系圖書立、

猿渡少左衛門殿後室被見置候様ニ与被申候而口上書

相添、山元孝右衛門殿迄遣申候、但口上書留左ニ記、

【延宝五年】  
巳十月十五日

口上覚

私家系圖之儀、先頃猿渡少左衛門殿後室より被為問由

候而、勝目助左衛門殿より御書付被遣候、此内代々つ

り様相違之所有之ニ付、後ニ助左衛門殿へ相違ニ而候

通直ニ申談、互ニ致落着候、依之私家近代之一筋つり

候而遣候条、後室ニ見せ置申度存候、少左衛門殿養母

之儀者、掃部兵衛為直子之故を以、持高八百斛之内百石令附屬、川上兵部左衛門殿二男城之助殿被取合猿渡を名乗、掃部兵衛二男之家ニ相立候、如此巨細之段系圖ニ難記候故、別紙ニ書付候、此系圖之写御覽濟候ハ、御返被成候様御座有度候、後日清書之系圖遣可申候、此等之趣、助左衛門殿前より後至江御達可被成候、直ニ者助左衛門殿へ可申入候得共、詰句幸右衛門殿御心安候間如此ニ候、何とやら事新敷存候得共、委曲孝右衛門殿へ御物語申入通シ候、以上、

【延宝六年年】  
午三月十七日  
猿渡喜右衛門(信玄)

山元孝右衛門様(清玄)

一勝目助左衛門覚書左記之、

覚

【正文有】

石意妙庵大姉者天正十四丙戌歲誕生、寛永六年十月十八日、四拾四ニシテ於帖左卒、

右者、猿渡越中殿息掃部兵衛殿息女ニ而候、いつそ

や御引合申候御返答書近日可承之由、山幸右衛門殿より承候ニ付、書記進入申候、さて又此節とやら公儀江系圖御出シ被成候様ニ承候、此方へ者何そ書付茂無之候、いつれニも貴面ニテ可申達候、羽月表之儀傳御座候而申遣候、末とかく不申来候、何事も〳〵掛御目可得御意候、以上、

【延宝六年年】  
三月十三日  
勝目助左衛門(宗將)

猿渡喜右衛門様(信玄)

【正文有】

昨日者御捻被下候処、取込申義候テ不能則報候、如仰御物遠ニ御座候、随而ハ御先祖之義ニ付被仰聞候段、

(猿渡信光)

一越中殿如何茂日州根白坂ニテ戦死被成候由候、其節家来瀬川隼人ト申者、首ヲ格護仕、地頭所羽月於城内火さらニ取納ニテ候由候、其跡于今御座候、右だび所、猿渡休覚齋ト申候而、今ニ十郎右衛門殿先祖ニテ候、是ニ不案内ノ衆ハラうたかひ有之候、慥ニ越中殿だび所ニテ候、鹿嶋太郎兵衛住居之時ハ、毎々

見廻ニテ候由候、

(猿渡信重)

一掃部兵衛殿、十月十八日ニ四十二ニテ戦死被成候ト御書面ニハ御座候、此方ニハ十一月十八日四十四ニ

テ戦死ト御座候、是ハ御書違かと存候、親子同年同

日と申傳置候、石塔ハ帖佐ぼだい寺総禪寺ニ御座候、

一関意妙庵大姉ト御座候、頭之一字ハ書面ニハ石ト御

座候、此違迄ニテ候、是も御書違かと存候、

右之通御座候、此外ニも御引合申、落着申度事共御

座候、拙者ニハ不入事ニ候へ共、女房むかし生ニテ

何かと申候へハ申事ニ候、いつれとも御面ニテ可申

承候、恐惶謹言、

勝部助左衛門(目カ)

『延宝六年』十一月十九日

猿渡喜右衛門様

参御報

尔判

追而書面大形候へ共、御免可被下候、

一敷根氏跡断絶ニ付、末孫妙門義耕和尚ヨリ跡目之願有之候、就夫敷根仲兵衛殿、於朝鮮國猿渡掃部兵衛同前

之勤有之候、其趣彼家ニ不相知候、證書義耕任望ニ遣之候、左記、

御方御先祖敷根仲兵衛殿、私曾祖父猿渡掃部兵

衛江於高麗御使者被 仰付候首尾御尋被成候ニ

付、書付致進入候覺、

一文祿二年春、於高麗備前宰相殿并三御奉行石田治部

少輔殿・大谷刑部少輔殿・増田右衛門佐殿、加藤主

計頭殿江御用之儀有之、兀良哈江御奉書被遣候間、

御家中衆江御使者可被仰付由、義弘様被成 御承、

敷根仲兵衛殿・掃部兵衛兩人江御使者被 仰付候、

早速御請申上候、依之無比類被 思召上候之旨、從

義弘様・久保様被 成下 御感状候、兩人江中途之

為用心、鉄炮足輕二百人被相付、兀良哈江被遣候處

ニ、主計頭殿御陣所甲山与申所江致参着、御奉書指

上候、主計頭殿被御對面、十日路餘之敵國、小勢ニ

テ罷通御用相達候儀、武勇之至無比類由御褒美被成

候、頓而御返簡相受取帰陳仕指上候、 御兩殿様被

遊 御悦喜、右之御返簡御奉行衆江被指出候、其刻

6

猿渡越中守

兩使御奉行衆御前江可被召出由御座候ニ付、仲兵衛殿・掃部兵衛可罷出由被 仰付、罷出御目見仕候、

則御奉行衆より長々之敵地無為ニ往還仕御用相達候

儀、無比類被思召之旨被仰下、難有仕合共ニ而御座

候、其上治部少輔殿より仲兵衛殿・掃部兵衛御宛書

之御狀被下之候、

一 仲兵衛殿江御拜領被成候 御感狀被為失候由承候間、

私方江頂戴仕置候 御感狀并治部少輔殿御狀兩通共

ニ写候而致進入候、此外御奉行衆御狀并治部少輔殿

家老衆安宅三郎兵衛殿書狀御座候由申傳候得共、致

紛失于今無御座候、為御見合如斯御座候、以上、

延宝八庚申年二月廿二日 猿渡喜右衛門(信安)

義耕和尚

一 先祖近代之地頭付、御用候間可書出由天和二戊年五月、

御記録所より被仰渡候ニ付、同六月三日書付指出ス、

左記、

右、加世田・羽月地頭被仰付候、加世田地頭年間相知不申候、羽月江者天正年中ニ被仰付候、知行高惣様羽月江御操替被下、城内ニ被召置候、

猿渡掃部兵衛尉

右、羽月地頭被仰付候、越中城内ニ被召置候内、掃部兵衛尉事ハ城外ニ罷在候処、越中日州表ニテ戰死仕候、其後羽月之地頭被仰付候、城内ニ被召置候、年間不相知候、

猿渡與三

右、栗野地頭被仰付候、年間不相知候、

猿渡喜右衛門尉

右、川内山田之地頭被仰付候、年間相知不申候、

右、相知申候分ニ書付指出申候、越中前方之儀、申

傳候事共御座候得共、極而相知不申候故、書付差出

不申候、追而考可申出候、以上、

【天和二戊年】

戊六月三日

猿渡喜右衛門(信安)

一猿渡監物初而之 御目見奉願候ニ付而指出候書物留、

口上覚

私嫡子監物事、初而 御目見之儀、旧冬申上置候、依之御太刀進上被仰付被下候様奉願候、先祖以来御太刀進上仕來候処、私事十歳ニ而親監助死去仕、十一歳ニ而 御目見仕候故、進上物之分ケを茂存不申、御太刀進上之儀不申上、残念至極奉存候事長儀ニ御座候得共、近代御奉公相勳申候趣、別紙ニ申上候、私曾々祖父猿渡越中與申候者、於諸所城御攻之刻、一方之主取を茂被仰付、忝被召仕候者之儀御座候、其子猿渡掃部兵衛事、於高麗天下之御使を茂相勤為申者ニ而、代々地頭被仰付、掃部兵衛養子私祖父ニ而御座候書右衛門并親監助迄御太刀進上仕來候、乍然監助事、猿渡家養子ニ罷成候刻、 御目見仕候儀承置不申候、乍忝家右別紙之通被召仕候一筋之儀御座候間、監物事、御太刀進上被仰付被下候様奉願候、此等之旨、可然様御披露奉願候、以上、

「元禄二年」

正月十四日

猿渡書右衛門(信玄)

仁礼覚左衛門殿

右ニ付、相添候家筋由緒書、

覚

一私曾々祖父猿渡越中與申候者、加世田并羽月之地頭被仰付、羽月江被召移替候、日州伊東家與御合戰并於高城大友家御合戰之刻茂方々致御供軍勞仕候由、其後天正十年、肥前國知々輪之城御攻被成候刻、野久美口を越中江被仰付、一番ニ攻破敵數多打取得勝利申候、此時家來之者共多石打ニ逢申候由、右一番乘之儀者、上井伊勢殿日帳ニ茂相見得申候、一天正十二年、龍造寺隆信御攻被成候刻ニ茂、右之越中罷立候、夫より筑後國三池江茂新納武藏殿・伊集院下野殿・山田越前殿・猿渡越中四人被仰付、彼地江罷越別而軍勞仕候由、此段者御記錄所江茂相見得可申与奉存候、



一天正十三年、筑後國堀切之城御攻被成候刻、伊集院肥前殿・山田越前殿・猿渡越中三人江被仰付、宇土・隈本其外諸所之軍衆被召付罷向、内之久我手申所より攻入申、各尽粉骨急ニ相攻申候故、同年九月、堀切之城攻落敵三百余打捕申候、依之堀切之城輒入御手申候由、此段も御記録所江相見得可申与奉存候、其後越中事、於日州戦死仕候由申傳候、

一越中子猿渡掃部兵衛事、羽月地頭被仰付候、父子面々於諸所御奉公仕候、文祿元年、高麗江御供仕罷渡候処、同二年、備前宰相殿并御奉行石田治部少輔殿・大谷刑部少輔殿・増田右衛門佐殿より於奥陳加藤主計頭殿江被仰遣候儀有之候間、御家中衆江御使者可被仰付旨、義弘様江被成御承、敷根仲兵衛殿・猿渡掃部兵衛兩人江御使者被仰付候處ニ、早速御請申上候儀、無比類被思召上候之間、御知行可被下之旨、從義弘様・久保様被成下御感状候、右兩人江中途之為用心、鉄炮足輕二百人被召付、主計頭殿御陳所兀良哈之内、甲山与申所江罷越候、十

日路程之敵中ニ而御座候故、及難儀申候得共、兩人計策を以漸罷通候由、主計頭殿被成御對面、長々之敵中無吳儀押通候儀、御褒美被成候由、御用相濟掃陳仕候処、御兩殿様被遊御悦喜、右之趣被仰上候ニ付、兩人共宰相殿并御奉行衆御前ニ被召出候由、且又石田治部少輔殿より仲兵衛殿・掃部兵衛御宛書之御状被下置候、其後慶長三年十一月十八日、掃部兵衛於高麗死去仕候、申傳候者、番船ニ切乗戦死為仕由申傳候、掃部兵衛後家江從義久様被成下御使、代々戦死仕候筋目ニ而御座候処、嘆一篇ニ而罷在候儀、家之為ニ茂罷成間敷候間、向後者家を茂取立申候様ニ可心掛旨被仰下、難有仕合共御座候由申傳候、此段者旧記ニ茂相見得申候、右御感状写老通・治部少輔殿御状写老通、為御内見御自分迄差出申候、

一掃部兵衛養子猿渡喜右衛門事、日野内膳入道如琢嫡子ニ而御座候、喜右衛門儀、船奉行被仰付、其後阿多内膳殿・相良權兵衛扨同役ニ而、物奉行相動申候、

8の1

喜右衛門養子私親ニ而御座候猿渡監助事、伊東肥後

入道祐辰三男ニ而御座候、監助儀、幼少之時分、

黃門様御側江被 召仕候故、御奥ニ而 御前江被

召出元服被 仰付、名を源太兵衛与被下、廣正之御

脇指拜領仕、難有仕合共御座候、尤御太刀進上仕

候、右之御脇指于今頂戴仕置候、

右之旨、可然様御披露奉頼候、已上、

『元禄二年』  
正月十四日 猿渡喜右衛門(信安)

仁礼覚左衛門殿

一猿渡助左衛門初而之 御目見奉頼候ニ付而指出候書物  
留、

口上覚

私二男猿渡助左衛門事、此節初而之 御目見被仰付被

下候様奉頼候、依之御太刀進上仕度奉存候、二男之儀

ニ者御座候得共、先祖代々首尾能被召仕候訳茂御座候、

其趣別紙書付差上申候、 忠久公御下向御供之棟梁三

8の2

家之内ニ相加罷下、一在所之地を茂被下置、御譜代相

傳ニ被召仕被下、私曾々祖父猿渡越中与申候者は、度

々之軍功茂有之候、天正年間、數ヶ所之軍衆大勢被召

附、一城を茂攻取申候、其子猿渡掃部兵衛事者、於朝

鮮國 公儀之御使を被仰付、首尾能相勸申候、御家中

之者ニ而、乍憚御直之御使を茂相勸為申一筋之者ニ御

座候得者、乍恐二男迄者御太刀進上被仰付被下度、偏

奉頼候、此等之趣、宜様御披露奉頼候、以上、  
『元禄十二年』  
卯六月十日 猿渡喜右衛門(信安)

猿渡喜右衛門

右ニ付而之由緒書、

覚

一猿渡藤三郎与申候者之子猿渡藤四郎、後武蔵守与申

候者、 忠久公御供仕御當國江罷下候、本田家・酒

匂家・猿渡、此三家之儀者御供之棟梁ニ而罷下候、

右之藤三郎事者東鑑ニ茂相見得申候、十七代之祖猿

渡藤三郎与申候者、觀應年間薩州満家院御合戦之刻

抽軍忠申候、此儀者 貞久公御證判之内ニ茂相見得申候、師久公御代より猿渡家漸々滅勢茂相衰申候、昔者加世田邊を領罷在候、其後者隈之城を領候儀茂有之候、此外由緒之訳共候得共、事長御座候故、委細を不申上候、

一私五代之祖猿渡越中<sub>ニ</sub>申候者、加世田之地頭職、其後羽月之地頭被仰付、羽月<sub>江</sub>被召移、知行を茂羽月<sub>江</sub>まとめて被下置、越中子猿渡掃部兵衛迄二代、羽月之地頭職ニ而城内ニ被召置候、

一天正十年十二月、肥前國知々輪之城御攻被成候刻、野久美口を越中<sub>江</sub>被仰付、一番ニ攻破敵数多討捕得勝利申候、越中家来共多人數遂戦死申候、右一番乗之儀者上井伊勢殿日帳ニ茂相見得申候、

一天正十二年、龍造寺山城守隆信御攻被成候刻、越中事罷立候、夫より筑後國三池<sub>江</sub>新納武藏殿・伊集院下野殿・山田越前殿・越中四人被仰付、彼地<sub>江</sub>罷向、別而軍勞仕候、

一天正十三年九月六日、筑後國堀切之城御攻被成候刻、

伊集院肥前殿・山田越前殿・越中三人<sub>江</sub>被仰付、肥後國宇土・隈元・大津山・和仁・邊春・小代等之軍衆召列罷向、宇津久我<sub>ニ</sub>申所より攻入申、各尽粉骨急ニ相攻申候故、同年九月十二日、堀切之城を攻落、敵三百餘討取申候、三池・江之浦・堀切表入御手裏候儀者、肥前殿・越前殿・越中三人之勲功迄を以、右之通御座候、右段々之儀者、御記録所<sub>江</sub>相見得申候、其後越中事者、於日州戦死仕候、

一越中子猿渡掃部兵衛事、羽月之地頭職被仰付置候、文祿元年、高麗<sub>江</sub>御供仕罷渡候処、同二年、從公儀於奥陣御用之儀被仰越候ニ付、備前宰相殿并御奉行石田治部少輔殿・大谷刑部少輔殿・増田右衛門殿より右之御使薩摩衆<sub>江</sub>可被仰付旨、義弘公<sub>江</sub>被遊御承、敷根仲兵衛殿・掃部兵衛兩人被仰付候、奉畏早速右之御請申上候儀、無比類被 思召上候間、掃部兵衛掃部國仕候ニおゐてハ御知行可被下之旨、從義弘公・久保公被成下 御感状候、往来敵國を罷通候ニ付、右兩人<sub>江</sub>鉄炮足輕式百人被召付、奥陳加藤

主計頭殿御陳所兀良哈之内、甲山与申所江罷越候、十日路程敵中を罷通候ニ付、敵慕来別而及難儀候得共、兩人尺粉骨無矣儀罷通申候、主計頭殿被成御對面、長々之敵中無矣儀押通候儀御褒美被成、御用相濟帰陳仕候処、御両殿様被遊 御悦喜、右之趣被仰上候ニ付、兩人共浮田宰相殿并御奉行衆江被召出、御用相達申候、依之石田治部少輔殿より御状被下置候、掃部兵衛事ハ、其後高麗於唐嶋番船ニ切乗戦死仕候、右 御感状写一通、治部少輔殿御状写一通、為御見合差上申候、

一掃部兵衛養子、私祖父ニ而候猿渡喜右衛門事、川内山田之地頭職被仰付、菱刈半右衛門殿・阿多内膳殿同役ニ而、物奉行役相勤申候、

右之旨、可然様御披露奉頼候、以上、  
〔元禄十二年〕  
 卯六月十日 猿渡喜右衛門 (信安)

右両通之書物、當番川村少左衛門秀尊ニ而披露、

右、當家系圖文書燒失故、家傳一筋を以嫡家之申立難致、折を以可申出与多年差扣置候、依之右巳卯兩年詔書物近代之儀迄を申出置候、師久公御代より當家相衰候由、家傳之趣右卯之年訴状之内ニ相記候得共、此儀ハ相違ニ而候、其故ハ藤三郎信重・大和守信忠、此兩代專 貞久公・氏久公・元久公御代指立候一列之勤有之候儀、他之旧記ニ茂相見得、別条無之候、然者師久公御代可相衰様無之證據分明ニ候、

一村山自伯元徳由緒之覺

一御直参村山自伯老与申御外科者、元来肥前國ニ而寺沢志摩守殿御家ニ仕、其後窄人ニ而長崎ニ数年居住之由、先年從長崎外科三人、御直呢ニ被召出候、自伯老茂其内ニ而候、江戸ニ而居所ハ小石川水道橋近クニ而、御屋敷を被給、結構成様子ニ而被居候、元禄九丙子年、喜右衛門信安在江戸之節、右之自伯老より御直参衆松平彦太夫殿を以 此時右御番役、此御方へ毎度御出被成候、信安御

心安心 信安ニ被仰聞候者、自伯老事、信安家之親類

ニ而候、家ニ付而之由緒を茂被為聞度由被仰掛候、

此趣を右之彦太夫殿より又能瀬瑞徴を以信安ニ被仰

聞候、其訳承届候処ニ、自伯老祖父ハ猿渡与作殿与

申候、親父ハ猿渡傳左衛門殿与申候由、寺沢志广守

殿肥前國唐津在城之節彼家中ニ被居、其後窄人シテ

一旦越前表ニ茂被居候由、与作殿親父ハ何某与申候

哉、不相知由、信安家ヨリ何様之分レニ而親類ニ候

哉、其趣茂不相知候、然共親類与申傳候儀者、無別

条候由被仰掛候、依之右之瑞徴を以返答ニ申達候者、

家筋之系圖國元江召置候得者、急ニ家筋之分レ可見

合様無之候、右由緒之家傳、喜右衛門覺無之由申達

候、其後彦太夫殿芝御屋敷江御見廻被成候節、信安

を御書院ニ被為呼候テ、右ニ同前之趣被仰聞候得共、

瑞徴を以申達候筋ニ不相替趣之御挨拶申達、一向受

込不申候、然処元禄十三庚辰年、信安在江戸之節、

自伯老御直參衆小笠原三左衛門殿を以此時御書院御番

御出、信安又々右之趣被仰聞候、三左衛門殿ヨリ茂無

別儀親類之由ニ候得者、請込相交可然由毎度被仰聞  
候得共、根元不相知儀ニ候得、難受込事ニ御座候故、

三左衛門殿江則答ニ申候茂、系圖之分レ見合申、漸

々同名中江茂吟味仕、重而從是可申入由申達置候、

然処ニ同年七月廿五日、江戸田町御屋敷江酒井右京

亮様被仰入候、三左衛門殿茂御出候処ニ、御前前

席末ニ而、三左衛門殿より右之趣蜜々ニ被仰聞候、

右之様子ハ、御前江茂被、御覽置候、此時茂三左衛

門殿へハ、右ニ不相替相應之御挨拶申上置候、翌廿

六日、就、御用御前江罷出、相下り候節、御意候ハ、

昨日三左衛門殿用事ハ何ニ而候哉与被遊、御尋候、

申上候ハ、村山自伯与申御直參之外科、先年從長崎

為被召出人之由ニ御座候、彼祖父者猿渡与作与申、

親父者猿渡傳左衛門と申候由、寺澤志摩守殿肥前嶋

原ニ在城之節、彼家中ニ罷居被申候由、其後窄人仕、

一節者越前表ニ茂罷居被申候、其以後長崎江居住被

仕候由、私家ニ付而親類ニ而御座候由被申掛候、此

儀者先年御當地江相詰申候節、松平彦太夫殿を以親

類之由被申掛候、彦大夫殿より能瀬曆庵ニ而私江被仰聞候、其後彦大夫殿より私へ直ニ茂右之趣被仰聞候へ共、申傳茂一向無御座候得へ、請込申候而親類之交茂難仕存申候ニ付、此方へ右之由緒相知不申由、彦大夫殿江御返答申達置候、此節茂三左衛門殿ニ而自伯より又々右之通親類ニ而候由被仰聞候、三左衛門殿より茂無別儀親類之由ニ候得者、受込相交可然由、毎々被仰聞候得共、根元相知不申儀ニ御座候得ば、難受込事ニ御座候故、三左衛門殿江者、系圖等表見合、同名中へ茂吟味仕、重而従是可申入由申達置候、昨日茂右之儀を弥受込申候様ニと被仰聞候、御則答右ニ不相替相應ニ申達置候、此儀以御席可達(序カ)貴聞与奉存罷在候処、被遊御尋候之間、先ッ此段申上候、私家ニ自伯親類之覺無御座候、乍然私六代之祖猿渡越中と申候者、天正年間九州表ニ長々在陣仕候、肥前國知々輪之城責ニ茂罷在、其後筑後國御攻被成候ニ付、伊集院肥前・山田越前・越中三人ニ被仰付、数月相掛攻崩申候、越中子共之内、一人ハ

於肥前戦死仕候、兩人ハ以後迄御奉公相勤申候間、子共之内を残置為申ニ而者有御座間敷候、右之節、家来共之内茂猿渡名字之者茂罷在候、左様成ル者、子共を残置為申ニ而茂可有御座欵与考申候、外ニ存寄申所無御座候、右肥前ハ元巢事ニ而、跡伊集院十右衛門殿御相續候処ニ、此比伊集院休左衛門元巢跡目ニ為罷成様ニ承及申候、越前跡者山田新助ニ而御座候由申上候得者、御意候者、彼方より右之通被申掛候ハ、覺無之候共、たとへ家来之者一筋ニ而茂不苦候間、彼方より被申掛趣ニ任せ、いかにも親類筋ニ而候由致返答、親類之つり合仕可然候、爰元之儀者皆親類を頼と相見得候、松平讃岐守殿家来長尾善庵者、喜右衛門ニ茂存候、彼者ハ讃岐之百姓之由候、此比者醫者茂上手ニ罷成、方々はやり候由、ケ様成ル者ハ御當地ニ而能親類無之候得へ、いか様世間之交能無之候故、能親類を求タガルト相聞得候、初者小笠原彦大夫殿此時ハ、約奉行・小野次郎右衛門殿此時御書院など物音茂無之候処、此比者彦大夫殿・次

郎右衛門殿より善庵親類之由被申候、善庵より右之衆江親類と申候様ニ為頼由おかしく候、此方へハ古キ家ニ而候得者、家中ニ而も其方抔之様成ル古キ家筋之者親類と申候得バ、世間之交も能候而之願ニ而候半間、いかにも親類ニ而候由申候而可然候、由緒訛糺候儀者不入事ニ候与 御意候事、

一其後小笠原三左衛門殿、此御方江御見舞被成候、喜右衛門被為呼候付罷出候処、自伯老儀を被仰聞候間、則答ニ申達候ハ、自伯老事、私家ニ付而御由緒之儀此程ニも被仰聞置候、内々相考申候、御祖父者猿渡与作殿と申候由、私同家之儀者いかに茂其通ニ可有御座候、折を以御近付ニ可罷成由、三左衛門殿へ申達置、右之旨 中将様達 貴聞ニ茂置候事、

一右之後同年八月三日、小笠原三左衛門殿・深原清庵老・村山自伯老、芝御屋敷江御見舞、三左衛門殿より喜右衛門御用之由候間、御書院へ罷出候処、三左衛門殿被仰候者、兼而村山自伯儀申達候通、喜右衛門殿家ニ付而由緒有之候、自伯今日はへ御見舞被申

901

候、互ニ心安近付ニならせられへき由、三左衛門殿御引合被成候、自伯老より被仰聞候者、御名字中之由緒有之候間、御近付ニ罷成度と兼而三左迄申置候、今日始而御近付ニ罷成大慶ニ存候、向後御心安得御意可申候由挨拶有之候、私より茂相應之御返答申候、夫より何角との物語有之候、追付 中将様御書院江被遊 御出候、御直ニ申上候ハ、自伯老私へ御由緒御座候ニ付、今日はニ而始而御近付ニ罷成申候由申上候、則三左衛門殿・自伯よりも相應之御挨拶御座候、喜右衛門事ハ則御座相下り申候、追付自伯老喜右衛門木屋ニ被為見舞被仰置被為帰候事、

一右之後、喜右衛門事茂右之為謝礼、自伯老宅へ見舞申置候而罷帰候、

但此儀御内意奉伺御免已後見舞申候事、

一村山自伯老より両品到来、依之書付御近習北郷右衛門八ニ而御内意を奉伺候、 仰出之旨左相記候、

村山自伯より私へ為見舞雁一羽・信州蕎麦粉一箱  
【村山自伯より被遣物者、喜右衛門事彼方由緒有之由被申候間、此遣被申候、断申候而返進仕ニ而可有御座候哉、又

節迄者別而之儀候間、致受用可然候、重而より者断申、不致  
 ハ受用仕、何そ相應之返礼物を遣申ニ而も可有御  
 受用様ニ可仕候、断をも可申候得共、此度者初而之儀候間、  
 座候哉、各迄御内意ニ而申上候、御序を以被達  
 中將様へ得御内意、此節者致受用候段返答ニ相達候様ニ可仕候、  
 貴間可被下候哉、何分ニ茂宜様ニ奉頼候、已上、  
 『元禄十三年辰』  
 十一月六日  
 猿渡喜右衛門(信安)

一 右ニ付而自伯老へ喜右衛門より為返礼琉球泡盛酒一  
 壺・口塩鱈一折遣之候、其後向後互之音物断之由、以  
 状申遣候事、

一同十四辛巳年四月廿九日、就 御用御前江罷出候節、  
 御席(序カ)御座候間申上候へ、今日村山自伯御見舞ニ而御座  
 候、私罷出申候、自伯儀者私先祖家来一筋ニ而も可有  
 御座候哉之由、先頃申上置候所ニ、私家之系圖、旧臘  
(忠名)  
 吉利治部家より出申候、見合申候処、私八代之祖刑部  
 与申者之二男ニ与市兵衛と申者御座候、右与市兵衛嫡  
 子を宗阿弥と申候、二男を順阿弥与申候、上井伊勢日  
 帳ニ茂加世田之順阿弥与相見得申候、順阿弥者猿渡仲  
 右衛門先祖ニ而御座候、右之宗阿弥事、先祖代々戦死

仕候為菩提出家仕、方々遍曆仕、後ニ肥前國ニ留り還  
 俗仕候由系圖ニ相見得申候、其時分はやり為申儀欵与  
 存申候、長徳軒杯之被成方ニ而御座候、自伯先祖者肥  
 前ニ為罷居由ニ御座候得者、多分右之宗阿弥流ニ而可  
 有御座欵与存申候、村山者猿渡小名ニ而御座候、他國  
 へ出申候而へ、先ッ小名を名乗申之由ニ御座候、今井  
 八右衛門親杯も御家ニ罷出候節者、佐藤仲兵衛ニ而罷  
 出申候、右之訳ニ而自伯茂村山を名乗為被申欵与存申  
 候、自伯ハ系圖方別而不案内之人ニ而御座候、被申候  
 へ、東鑑ニ村山七郎与有之候、先祖ニ而可有之由被申  
 候間、私より申候者、あれハ源家ニ而候、私家之先祖  
 者猿渡藤三郎与申候而、東鑑ニ茂鑑ニ相見得申候、村  
 山名字者 旦那元祖供仕、國江罷下候而、其後ニ庶流  
 之者國元ニ而村山与申所を被申付、領地仕候而名乗為  
 申名字ニ而御座候、東鑑之村山者別家ニ而候由申達置  
 候、近頃系圖不案内之人ニ而御座候由申上候得者、猿  
 渡者平ラ氏など 御意候間、本者平氏ニ而御座候由申  
 上候得へ、國へ有之候村山者猿渡家庶子ニ而候哉、向



之嶋之村山抔茂喜右衛門庶子欵与 御意候、申上候ハ、御國元村山ハ多分庶子ニ而可有御座与存申候、何れ茂之紋所茂同二疋龍を付申候由申上候得バ、自伯者猿渡名字ニ成度とハ不被申候哉と 御意候、申上候者、只今迄者左様成ル願無御座候得共、祖父ハ猿渡与作と申候、 御家之御家来筋ニ而御座候与被申立候を以者、多分猿渡名字を願被申ニ而可有御座欵与存申候、今日茂須原清庵老噂ニ被申候ハ、自伯事ハ土屋相模守様殊外御心安出入被仕候、大久保加賀守様へ茂別而御心安御座候由清庵被申候、如何様四方を仕人与相見得申候由申上候得ハ、被遊 御笑候而被成御座候事、

一猿渡家系圖、元禄十三辰年十一月十一日、吉利治部忠名於箭藏猿渡監物信方見出ス之、則市来源右衛門家年を頼、右之系圖を乞請候折節、猿渡喜右衛門信安在江戸、右之旨信方ヨリ達ス、江戸ニ右ニ付テ信方互之證書を取ル、左ニ記之、但系圖見出候儀ニ付而、委細之趣者此奥ニ記置候、

10

【正文有】  
古系圖寫壹通 自猿渡藤三郎信元  
至于廿代喜右衛門殿

右御方家之古系圖、祖父吉岡宮内太輔久喜以自筆寫置之、代々之文書考引合候趣、同前ニ以朱書記置候系圖、拙者致箭藏候處ニ、右本古系圖者、其以後於御方為致燒失由ニ而、任御懇望致進入之候、仍證文如件、

吉利治部

元禄十三年辰十二月十八日

忠名判

猿渡監物殿  
(信方)

11

【正文有】  
覺

古系圖寫壹通自猿渡藤三郎信元至廿代喜右衛門殿也、但代々之文書ヲ以被考候趣同筆之朱書有之、  
右者、御方御家之御系圖、吉岡宮内太輔殿以自筆為被為寫置由ニ而、吉利治部殿御箭藏被成置候処ニ、本古系圖其以後於御方燒失為被成由候而、右古寫御所望被成候ニ付、治部殿より被遣之候、御頼ニ付拙者御使仕候、為後證如此御座候、以上、

市来源右衛門

元祿十三年辰十二月十八日

家年判

猿渡監物殿  
(信方)

一猿渡家系圖文書之儀者、元祖廿代之孫猿渡喜右衛門信綱代ニ自火起、家財不殘系圖文書悉致燒失、旧記少ク為相殘迄ニ候、依之家筋之由緒為見合、他之旧記を茂尋求候事多年心掛候処ニ、吉利治部忠名家筋之記錄、當家廿三代之孫猿渡監物信方ニ可見ス之由兼約ニ而、元祿十三辰年十二月十一日、忠名宅ニ而古キ書籍等信方致見分候所ニ、猿渡家之系圖有之候、然与見届候ニ、信綱迄記付候系圖ニ而、無別条當家之系圖ニ而候間、市来源右衛門家年を頼、忠名江相達、右之系圖を乞請候而、則御記錄所江出、写相濟候由、折節猿渡喜右衛門信安在江戸故、信方より右之注進状、元祿十四巳年正月十八日、於江戸芝御屋敷相達ス之、系圖之趣者吉岡宮内太夫久嘉自筆ニテ候、古系圖文書見届、代々ニ引合文書何通有、時代引合候与其代々ニ朱書被加置候、是又自筆ニテ候、右系圖之端ニ右三家辰三月十日

久嘉ト被記置候、久嘉者寛永年間之御文書奉行ニテ候、右三家之内、本田次郎左衛門親(マヤ)家之系圖者少相見得候、今一家者料紙離レ一向不相知候、當家者元祖藤三郎信元ヨリ喜右衛門信綱迄廿代迄ニ記付有之候、久嘉被見届置候古系圖一通、時代引合候文書十五通、時代難引合文書八通、合文書二十三通、此外文書坪付数通有与被記置候代茂有之候得共、其員教者記付無之候、久嘉自筆之儀者忠名證書、且又類筆茂有之候、久嘉者忠名祖父ニテ候、然者前之御文書奉行古系圖文書見届相糺、三家を一紙ニ被写置候事、古系圖文書所持同前ニテ候、系圖之傳記与他之旧記ニ相見得候趣与家傳之一筋、何レ茂無相違致封合候、系圖之表ニ從前攝政基通公藤原御姓ヲ被下置候儀相見得候、幸信安在江戸、此時節乍恐當 関白基熙公江藤原氏御由緒之記達 高聰、并蒙 御免許度願、以御内意 綱貴公江奉候候、且者此儀ニ事寄家筋之段々、達 上聴度念願有之、旅中委敷訳不相知候得共粗相調へ草案、御記錄奉行田中五右衛門國明此時在江戸、右之書物内見之上、

巳卯月十日、隈元太市左衛門ニ而逢 貴聞候、書付左ニ記、

御内意口上覚

一 私家之元祖より二代猿渡藤四郎江從 近衛基通公藤原氏被下候儀、系圖ニ相見得申候、其後私より六代之祖猿渡越中江從 近衛龍山公藤原氏由緒之 御書を被下置候、右 御書者、吉岡宮内御文書奉行之節見届置申候由、宮内自筆を以系圖ニ記置申候、依之由緒之趣、此節諸大夫衆迄内意ニ而申上度奉存候、私式右躰之儀共申上候茂如何ニ候得共、近代迄右之通ニ御座候得バ、其篇ニ而も難召置、幸私御當地江罷在儀ニ御座候間、乍憚奉頼事ニ御座候、被遊御免許被下候者、諸大夫衆江縁取を以先承合、不苦事ニ茂御座候者、其御様子次第申上ニ而可有御座候、右願ニ付而ハ乍恐家筋之由緒を茂御自分迄申上度候、一 私家古系圖文書等、祖父猿渡喜右衛門代ニ自火を出シ悉燒失仕、此内者委敷訳御記録方江茂相知不申候

處、私家之古系圖写吉利治部家ニ御座候を、旧臘同名監物所望仕候、彼方江写有之候様子者、治部祖父吉岡宮内御文書奉行之節、私家之古系圖文書を見届申候而、系圖者自筆を以寫置、文書者代々ニ引合せ、文書何通有、時代引合候与其代々ニ朱書仕、祖父喜右衛門迄廿代、詳ニ自筆ニ而記付、奥書ニ右三家辰三月十日久嘉与記置申候、久嘉者宮内名乗ニ而候、三家之内本田家者少相見得申候、今一家者料紙はなれ候故、一向相知不申候、三家を一紙ニ写候而文書引合せ件書仕候者、御文書方之役目ニ付而之考与相見得申候、右之通、古系圖宮内自筆ニ而寫置候得者、古系圖同前ニ而御座候、且又文書写之類者少々相殘、當分所持仕候、其外之古文書者悉燒失仕候、然共宮内見届候而系圖之内代々ニ記置候文書之數者、合テ廿三通ニ而御座候、此外文書坪付數通有之与記置候代茂御座候得者、文書餘多所持仕候儀者、是又證據ニ罷成候、

一元祖猿渡藤三郎信元者、比企判官能員甥ニ而候、建

仁三年能員依謀叛、猿渡之庄を没落仕薩摩江罷下候、  
 嫡子太郎信景者、一幡君御館於小御所討死仕候、  
 二男藤四郎實信者、文治二年 忠久公御供仕、御劍  
 之役ニ而薩加山門院江罷下候、彼者江者 頼朝公御  
 感之儀有之、御旗を被下候、依之紋所及於于今二引  
 を用來候、從 前攝政基通公藤原氏を被下候儀、右  
 段々之趣系圖ニ相見得申候、元祖藤三郎事者、頼  
 朝公ニ奉仕候儀、東鑑ニ相見得申候、嫡子者打死仕、  
 二男者御國江罷在候ニ付、藤三郎事茂、 忠久公御  
 下向以後十八年目ニ御國江罷下申候、  
 一右藤四郎子藤三郎信高事、能員謀叛之後者鎌倉之御  
 供不相叶候故、御劍之役を本田貞親ニ讓申候、右信  
 高嫡子を太郎信輔与申候、嫡家其節末吉を相領罷在  
 候故、信輔弟次郎与申候者は、末吉之内村山を領地  
 仕、村山与名乗申候、且又代々加世田を被下為領儀  
 茂御座候、右之段々家傳ニ而御座候、村山者猿渡庶  
 流之儀者系圖并他之旧記ニ茂相見得申候、  
 一藤三郎信重、於郡山高名仕候、其後文和四年九月三

日、於榑木野ニ官方之大將三條侍從其外官方之敵ト  
 相戰討死仕候、右信重子大和信忠、應永四年於清色  
 城高名仕候、郡山合戦之儀者、從 貞久公加治木家  
 江被下置候御文書之内ニ茂比志嶋孫太郎・同太郎・  
 猿渡藤三郎与相見得申候、榑木野ニ而官方合戦之儀、  
 是又他家之文書ニ有之候、 元久公清色御合戦之儀  
 者、山田正榮(題)記置申候記録ニ茂相見得申候、  
 一筑前信宗、隈之城を被下領地仕候儀系圖ニ有之、彼  
 地江罷在候儀、他之旧記ニ茂相見得申候、從 忠國  
 公筑前江西手之内を被下候御文書有リ与吉岡宮内記  
 置申候、是ハ隈之城之西手之事ニ而御座候、筑前事、  
 文明十七年六月廿日、於日州鉄肥討死仕候、  
 一右信宗子刑部信迄(有威カ)隈之城江罷在候、刑部事茂文明  
 十七年六月廿日、父筑前同所ニ而討死仕候、筑前・  
 刑部戦死之儀者文明記ニ茂相見得申候、  
 一刑部子與市左衛門信資三歳之時、祖父筑前・父刑部  
 討死仕孤ニ罷成、 日新公江罷出御奉公相勤申候、  
 於諸所軍功茂有之候、天文七年、加世田城外黒鳥口

ニ而戰死、家来茂七人討死仕候、貴久公御危時、  
与市左衛門討死仕候故、嫡子藤三郎江本領之外、加  
世田之内ニ而五町被下置候御文書有之候由、采圖ニ  
相見得申候、藤三郎五歳之時、與市左衛門戰死仕  
候、藤三郎事者、後ニ越中与申候、与市左衛門戰死  
之儀者 貴久公御一代之軍記ニ茂相見得申候、  
一右与市左衛門子越中事、天正中、肥後・肥前・筑  
後・筑前・豊後之間ニ長々在陣軍勞仕候段々之趣共  
御座候、天正十年十二月七日、肥前知々輪之城攻ニ  
茂野久美口者越中一番ニ攻破、敵数多討捕得勝利申  
候、一番乗之儀ハ上井伊勢日帳ニ茂相見得申候、同  
十二年三月、越中一手ニ而鍋嶋加賀守与遂合戦候處、  
二男與次郎討死仕候、此合戦之儀者、九刃記ニ茂相  
見得申候、同年十月八日、新納武藏・伊集院肥前・  
伊集院下野・山田新助・越中五人、筑後國三池江被  
差遣段々軍勞仕候、此儀茂伊勢日帳ニ相見得申候、  
一其後筑後之國江之浦堀切城御攻被成候ニ付、天正十  
三年九月六日、伊集院肥前・山田越前・越中三人江

被仰付、肥後之内宇土・隈本・大津山・和仁・邊  
春・小代六ヶ所之人数被召附、三池境江被差遣候、  
同月十二日、急ニ攻入尽粉骨、堀切之城切崩、敵三  
百餘討捕、同十三日ニ肥前・越前・越中より右之注  
進申上候、是より先キ鍋嶋飛驒守江被仰遣候茂、三  
池境江伊集院肥前・山田越前・猿渡越中其外被差遣  
候間、相談被成入魂肝要ニ候由被仰遣候、且又大寺  
大炊助を以、各辛勞仕候由御礼被仰下儀共御座候、  
右段々何茂伊勢日帳ニ委數相見得申候、  
一同十五年三月、筑前・筑後之御人数被引取候節、越  
中事茂同前ニ引取、同年四月、於日州根白戰死、家  
来十一人同時ニ討死仕候、越中事者、加世田・羽月  
地頭被仰付置候、  
一越中子掃部兵衛、文祿元年高麗江御供仕罷渡候、同  
二年二月、奥陣加藤清正江 公儀御用之儀有之候条、  
從 公儀之為御使薩摩衆可被仰付由、五大老浮田宰  
相秀家其外御奉行衆より 義弘公江御承被成、敷根  
仲兵衛・掃部兵衛兩人江被仰付、鉄炮足輕式百人被

召付、清正陣所兀良哈之内甲山与申所江罷越候、往  
来十日路餘、敵中を罷通候ニ付、敵大勢慕来別而及  
難儀候得共、相防無吳儀罷通、御用相達申候、長途  
之敵中無吳ニ罷通候儀、清正御褒美被成候、從 義  
弘公・久保公右之為軍忠御知行可被下旨、被成下  
御感状候、石田治部少輔三成より茂状被下置候、  
公儀御直之御使勤申候、委細者征諱録（傳書）ニ茂相見得申  
候、

一掃部兵衛事、慶長三年十一月十八日、自朝鮮 御帰  
朝之節、於唐嶋番船ニ切乘戦死仕候、其後掃部兵衛  
後家江從 龍伯公折々御使被下、代々戦死之跡ニ而  
候間、身本をあらし不申可罷在旨 御意候、於市臺  
よりとしてへにおしろい等をも被下候、是者加治木  
江罷在候大村市兵衛家之記録ニ相見得申候、掃部兵  
衛事者、羽月地頭被仰付候、

一掃部兵衛弟與三与申候者、掃部兵衛跡目ニ被仰付候、  
与三養子者私祖父喜右衛門ニ而御座候、與三事茂高  
麗江御供仕罷渡候、其後栗野地頭被仰付候、喜右衛

門事ハ、薩州山田之地頭被仰付候、喜右衛門養子者  
則私父監助ニ而御座候、私迄二十二代連續仕候、

一私九代之祖筑前、其子刑部、其子与市左衛門、其子  
越中、其子掃部兵衛、同弟与次郎迄者引續六人戦死  
仕候、此段ハ他之旧記ニ茂相見得申候、本田家・酒  
匂家・猿渡之儀者、 忠久公御入部之節、御供之棟  
梁ニ而罷下候儀者、御記録所ニ茂相知世俗迄茂申傳  
候、乍悴家 忠久公以来御譜代一筋ニ而、終為奉背  
御家儀無御座候、本田家ニ者藤原氏御許容御證書于  
今有之由候、私家ニ茂御許容之儀、右之通ニ相見得  
申候得者、 忠久公江藤原氏御恩免之節、御家臣故  
御許容茂御座候哉与奉存候、然者由緒絶不申様ニ与  
奉願候ニ付、段々事長キ儀をも申上候、偏恐多奉存  
候得共、私事忝被召仕被下儀ニ御座候得者、由緒之  
趣を茂御自分迄申上度奉存如斯御座候、成合申儀ニ  
茂御座候ハ、何分ニ茂可然様頼存候、

以上

『元禄十四年巳』

四月十日

猿渡喜右衛門（信安）

右之由緒書、元祿十四巳年四月十日、隈元太市左衛門  
ニ而達 貴聞候処、書物被 聞召上、奉願候通 近衛  
様御方江、藤原氏由緒之儀可申上旨 御意候由、太市  
左衛門より奉承知之、早速御礼申上候事、

一 近衛様御方江藤原氏御由緒之訳申上候儀、蒙 御恩免  
候ニ付而、飯限山蓮光院相頼、由緒書 近衛様・諸大  
夫衆迄差上申候、依之右之案紙式通、元祿十四巳年五  
月四日、隈元太市左衛門を以御内意ニ而達 貴聞、由  
緒書奉備 御覽候、左記之、但此時御記録奉行  
田中五右衛門國明草案之、

## 覚

私家号者猿渡、本姓者平ニ而御座候得共、故御座候而  
藤原之姓ニ改申候由緒、此節諸大夫衆迄申上奉願度趣  
共御座候、私家元祖者猿渡藤三郎与申候、嫡子者太郎  
信景、二男藤四郎実信与申候而、父子三人共右大将頼  
朝卿江奉仕候處、薩摩守太祖豊後守忠久者、頼朝卿長  
庶子故、薩隅日三刃之守護職ニ被補、文治二年八月、  
薩隅日江初入部之節、頼朝卿之命ニより、藤四郎實信

を忠久江被召附、供仕薩州江罷下候、頼朝卿より忠久  
江被召附候者之内、本田・酒匂・猿渡之三氏者、棟梁  
ニ而差立為申者共ニ而御座候、忠久儀者 不賢寺関白  
基通公之御猶子ニ被遊候故、忠久姓を藤原ニ被改候、  
此時ニ右之藤四郎實信江茂藤原之御姓を御恩免被遊、  
且又私六代之祖猿渡越中信光ニ茂、藤四郎江藤原之御  
姓御恩免被遊候御由緒之趣、從龍山公御書被 成下置  
候、藤四郎より私迄廿一代藤原之御姓を拜受仕罷在、  
冥賀至極難有仕合奉存候、然處私祖父代ニ火災有之、  
右 御書焼失仕候而残念至極奉存候、御姓之儀者五百  
年来被下置断絶無之候得共、右之通御證文焼失仕候故、  
以時節由緒之趣諸大夫衆迄申上、右之引次を以 御證  
書を茂頂戴仕置度念願奉存候、乍恐御旧記を茂御沙汰  
被成、御由緒書を茂被下置候者、難有仕合忝次第ニ奉  
存候、此等之趣、諸大夫衆迄成合候様ニ被仰達可被下  
儀頼存候、藤三郎以来家傳之有増、別紙ニ相記申上  
候、以上、

「元祿十四巳年」

五月

猿渡書右衛門  
(信安)

右ニ相付候由緒書、

覚

元祖猿渡藤三郎事者、比企判官能員甥ニ而候、頼朝卿  
 江奉仕候儀者東鑑之内ニ茂相見得申候、建仁三年、能  
 員之隠謀ニ與同仕、嫡子太郎信景者能員合戦之節、一  
 幡君之御館於小御所遂戦死候付、藤三郎無據本領猿渡  
 之庄を没落仕、二男藤四郎實信ヲ慕薩劾江罷下候、夫  
 より實信猿渡家之嫡流を相續仕候、實信薩州江罷下候  
 節、從頼朝卿御感之儀有之、御旗を被下候、依之紋所  
 茂於于今二引龍を用來申候、藤三郎以來私ニ至廿二代  
 ニ而候、於家中茂先祖共ニ薩隅日三劾之内、諸所ニ而  
 一城を茂被預置、且又於自他國戰場之武功を励候儀、  
 多々有之候、此外之儀共事長御座候故略仕候、右之訳  
 為御目安書付申候条、此節願之趣ニ付而若可被仰上儀  
 ニ茂御座候者、成合候様頼存候、以上、  
 『元祿十四年巳ノ一  
 五月  
 猿渡(備安)書右衛門

右由緒書、近衛様御方江申上候儀、綱貴公達 貴聞  
 蒙御免許、蓮光院江相頼申度候、其趣者重而可申越由、  
 於江戸元祿十四巳年四月相達之置候、依之蓮光院上京之  
 後、五月三日之以状被申越候、左記、

14

猶々急便故不能細毫ニ候、以上、  
 『正文有』

一筆致啓上候、先以其御地上ニ様方御機嫌克、先月  
 廿六日御結納之御使者、御首尾能御座候半と目出度  
 御儀奉存候、貴様ニも弥御堅固ニ御勤被成候半と珍  
 重奉存候、拙僧事、先頃罷下每度得御意候處、御慈  
 意之御事、其上罷立候時分ハ品川迄預御使者、段々  
 御丁寧之至、忝奉存候、  
 一貴家之義、兼而御咄承知仕置候ニ付、御家御譜代  
 家之人々御尋被成候、次而有之候ニ付、乍卒忽内々  
 ニ而委細申上候処ニ、貴家之御書付御覽被成度被  
 思召候由 御意ニ而御座候間、中将様江能々御内  
 意被仰上、何とぞ 近衛様江御由緒書被指上候様ニ  
 御座有度奉存候、爰元之義ハ随分御取持可仕候、先



此等之段蜜々申進候、追付御上京可被成候間、貴面

可申述候、恐惶謹言、

蓮光院

【元祿十四巳年】  
五月三日

頼英判

猿渡喜右衛門様

右當家由緒書兩通達 貴聞候處、書付之趣委敷被 聞召  
上宜候間、蓮光院を以 近衛様御方ニ申上、可然之旨喜  
右衛門ニ可申聞由、則限元太市左衛門ニ而被 仰出、同  
年五月廿四日、奉承知之、同月廿七日、二階堂市之允便  
ニ於京都蓮光院ニ申越候書狀、左記之、

猶以由緒書此等事長御座候間、今少ち々め申度存  
候得共、右之由緒然々儀者不申上候得ハ、事不足  
御座候故、兩通ニ相調申候、家中ニ而段々由緒之  
訳御座候、其趣者、先比貴様御内見ニ茂入置申  
候、尤此段者態致略候、為御心入申入候、將又先  
日者預貴札忝存候、御礼之儀者先便申入候、以

上、

一筆致啓上候、弥以御堅固御勤被成候由、珍重奉存候、  
然者内々申入置候通、私家筋之儀ニ付 殿下様・諸大  
夫衆迄願申上候趣、御内證ニ而達 貴聞候處、御免被  
成候間、此節可申上旨被 仰出候、依之由緒書二通差  
越申候、御披見被成、其許様儀者、何分ニ茂成合申候  
様、御取持被成可被下候、段々事長由緒共可被仰達  
儀、近比以御六ヶ敷儀御座候得共、何とそ宜様萬々頼  
存候、乍恐願奉存候者、龍山様御證書頂戴仕置候訳  
茂御座候間、右之御引次を以 御當代様之御證書を茂  
拜受仕候儀念願奉存候、右願之通相叶申御事御座候  
ハ、孫々到而茂難有次第可奉存候、其段者貴様御取  
持頼存候、私事追付伏見ハ致参着、旁可得御意候、猶  
期後音之節候、恐惶謹言、

猿渡喜右衛門

【元祿十四巳年】  
五月廿五日

信安判

蓮光院様

右由緒書并書狀、京都ニテ蓮光院ニ相達之、然者 綱貴  
 公同年巳五月晦日、江戸御發駕、木曾路被遊 御通道  
 候、信安供奉、然処於京都 御用之儀有之、其旨信安奉  
 之、同月九日之夜酉之下一刻、濃州之内大井之宿罷立、通  
 路急ニ罷通、同十一日巳下刻、京都四条御屋鋪ニ参着程  
 六十、兼日蓮光院ニ相頼候儀事相達候由、同十二日、蓮  
 光院ヨリ被申越候書面、左相記之、

『正文有』

夜前者得御意大慶ニ奉存候、直ニ 御所江参上仕、

(近衛基熙)

関白様御前へ罷出、貴様御上京之由内々ニ而申上候、

(長之)

然者御願之義、昨日進藤刑部太輔殿より表向キ披露被

致候処、御許容ニ而御證書可被下旨、夜前 御意被遊

候、尤刑部太輔殿よりも被申聞候、先以目出度御義ニ

奉存候、右御請之義、明後十四日十五日之間、貴様御

勝手次第御参上被成度存候、追付 御所へ伺公仕候

間、委細於伏見ニ可得御意候、以上、

『元禄十四巳年』

六月十二日

『上書ニ』

猿渡喜右衛門様

蓮光院

一進藤刑部太輔并ニ蓮光院江從大坂書狀指越候、左記之、

一筆致啓上候、愈御堅固御勤可被成珍重奉存候、昨

日者大坂旅宿迄御見廻被成忝存候、急成儀ニ而無調

法之儀共御残多存候、然者 殿下様より之 御證書

之儀、何とそ早々拝受仕度奉存候、乍此上貴様御取

持偏奉頼候、 御證書之趣者、 不賢寺殿基通公よ

り藤四郎實信江藤原之御姓を被下置、其後從 龍山

公右之御由緒ニ付而御書を被下置候、右之一筋ヲ以

被遊 御恩免候之趣ニ 御證書被下置候へハ、一入

難有仕合と奉存候、此段者貴様より諸大夫衆迄御噂

をも被成可被下候哉、何分ニ茂貴様御了簡を以宜様

奉頼候、

一去ル十三日、 御所江御供仕候節、御路地之 春日

宮江参詣仕候刻、私藤原筋目之者之由、從 関白様

中将様江御挨拶之趣茂御座候由、其外 関白様御噂

被成候儀共、少之訳ニ而茂御書付被下度候、此段者

昨日御直ニ茂申入候得共、御取込之半ニ候間、又々

申入事御座候、何れ之筋ニ茂其元様之儀、可然様御  
取持奉頼候、恐惶謹言、

猿渡喜右衛門

『元禄十四巳年』

六月十八日

信安判

蓮光院様

一筆致啓上候、先以 御三公益御機嫌能可被成御座、  
恐悅之御事奉存候、貴様愈以御堅固御勤可被成、珍重  
奉存候、私事、此程 御所江罷上り申候処、段々首尾  
好被仰付、家筋之儀ニ付而 御證書を茂可被下置旨、  
頂上難有仕合冥加至極不浅忝次第奉存候、於國元御左  
右奉待可罷在候、右之節貴宅へも致参候処、御同名  
へ長松様御出、御挨拶被成忝奉存候、初而御近付ニ罷  
成大慶仕候、今日致乗船候、何様國元より以状可得貴  
意候、相應之御用等茂御座候へ、無御隔意可被仰聞  
候、猶期後首之節候、恐惶謹言、

猿渡喜右衛門

『元禄十四巳年』

六月十八日

信安判

進藤刑部太輔様

猶以 御證書之儀、是而已を朝暮奉待罷在事御座候、  
何分ニ茂宜様奉頼候、將又御同名筑後守様・長松様  
へも御同前ニ申上度候、乍憚可然様頼存候、以上、

一進藤刑部太輔ヨリ右之返状、元禄十四巳年六月廿八日  
被指越候、左記之、

猶々 殿下此節依御用日ニ御参内、御用繁ク被成  
御座候、近々御閑暇之節、件之御書之事御催促申  
候て出来候者、早々差下可申候、其段御氣遣被成  
間敷候、今度段々御心安得御意忝奉存候、已上、  
【正文有】  
貴札忝致拜見候、如仰雖酷暑之節、愈御所方御安全之  
御亵候、其許御無亵御出船、此節天氣能海上閑ニ可有  
御座、旁珍重存御事候、然者今度從 殿下貴家由緒之  
御證書可被下候亵御許容、其節為御礼御参候處、首尾  
克御對顔、彼是忝思召之由、委細之御楮面被入御念儀  
ニ存候、其節私宅へ預御出、世粹初而掛御目候由、大

慶奉存候、折節御殿相詰不得貴意、早速以書狀御礼可申入之處、大坂へ御越之儀候故延引背本意候、老父・世倅へ御傳書忝奉存候、万禱期後段候也、恐惶謹言、

【元祿十四巳年】

六月廿八日

進藤刑部大輔

(長之) 長判

猿渡喜右衛門様

一右之通蓮光院江大坂ニテ申越置候、依之蓮光院ヨリ證書被差遣候、左記之、但六月十三日、於陽明御所 中将様江從 関白様御咄御座候、依之右當日ノ日付ニテ證書被差越候、

【正文有】

一筆致啓上候、然者今日 綱貴公御夏、 陽明御所江

御見舞被成、

(蓋懸)

関白公江御對顔ニ而被為成候節、御供

之御家老衆・御用人衆・御目付衆・御納戸衆・御小納

戸衆、各御庭拜見被仰付、春日明神江社參之時分、

御前被罷通候ニ付、 関白公御覽被遊、猿渡之儀者

御先祖様より藤原之姓被下置候、右由緒段々被聞召届

候、重而御證書被下置筈之由、 中将様江御咄有之候、其御拙僧茂 御前江罷有、右之旨奉承知、貴家御規模之至、御冥加成御儀不可過之奉存候、此等之御怡為可申演如斯ニ御座候、恐惶謹言、

【元祿十四巳年】

六月十三日

飯隈山別當蓮光院

頼英判

猿渡喜右衛門様

一猿渡助左衛門信成、初而之 御目見願申上置候処、重而申出候趣有之候、左記、但元祿十四巳年八月五日、御用人高橋左門取次ニ而申出候也、

口上覚

私二男猿渡助左衛門事、初而之 御目見被仰付被下度

旨、去々年六月十日、川村勝左衛門御取次ニ而申上、

其節御太刀進上仕度由奉願、由緒書を茂差上置申候處、

其已後私家筋之儀ニ付而、吉利治部家より相知為申訳

共御座候、慥成證書之儀御座候間、委敷申上度奉存候、

依之最前差上置申候書付二通、御返被下度奉願候、右之趣可然様御披露奉願候、以上、

〔元祿十四年〕  
巳七月廿二日 猿渡喜右衛門(信安)

右之口上書御家老衆被聞召達、同八月八日初差出置候口上書老通、家筋之由緒書老通、御感状写老通、石田三成状写老通、高橋左門御取次ニ而返給之候、一宇都宮次郎左衛門事、越中守信光江被召付羽月ニ被召移候由緒、鮫嶋仲兵衛より被相尋候ニ付、書付遣候、左記之、

宇都宮次郎左衛門殿、羽月江被召移候由緒御尋ニ而候、拙者家ニ相知候趣申達候覺、

一私六代之祖猿渡越中、天正之始加世田地頭被仰付置候處、羽月地頭被仰付、加世田より羽月江罷移候、彼地之儀者肥後國ニ相境候ニ付、其節別而被入御念候訳有之、宇都宮次郎左衛門殿・猿渡備後・鹿嶋藤七足輕大將ニ而候ヲ、越中為附役羽月江被召移候、

越中子掃部兵衛事茂羽月地頭被仰付、彼地江罷在候、右三人之衆茂同前ニ被召付置候、

一天正十五年、肥後國合志之城主合志藏人、僅五十人餘之手勢ニ而羽月ニ落來候、此儀 義久公被 聞召上早ニ可打捨旨、右之掃部兵衛ニ被仰付候、同年八月廿五日、藏人并相隨候湊川加賀糺三義、其外之人數悉打果候、次郎左衛門殿・白坂式部取分働之趣共有之候、此儀私家傳無別儀候、

一合志藏人墓、羽月大聖寺江有之候、藏人打果候段之趣者、於于今羽月之衆申傳茂有之候、

右由緒之趣、任御尋證文如件、

元祿十四辛巳年七月廿五日 猿渡喜右衛門判(信安)  
鮫嶋仲兵衛殿

一猿渡助左衛門信成 御目見願ニ付而、重而差出候口上書老通、由緒書老通、元祿十四巳年十月五日、御用人大野隼人取次を以申出候、御家老喜入安房殿御當番(久亮)ニ而、同日佐多豊前殿(久連)・嶋津助之允殿(忠守)・種子嶋藏人殿(久時)同

前ニ被聞召置候、口上書并由緒書、左記之、

口上覚

私二男猿渡助左衛門事、初而之 御目見被 仰付被下  
 度旨去々年六月申上、其節御太刀進上仕度由奉願、乍  
 俾家由緒之趣を茂申上置候処、其以後家筋ニ付而段々  
 相知為申趣共有之候、委細者別紙ニ申上候、私家之元  
 祖藤三郎信元者、比企判官能員為ニ者甥ニ而候、嫡子  
 太郎信景・二男藤四郎實信父子三人共ニ 頼朝公江奉  
 仕候処ニ、藤四郎事者 忠久公江被召附、御供仕罷下  
 候、右之信元・信景父子共能員之謀叛ニ與同仕、剩信  
 景於小御所遂戦死候故、藤三郎事、猿渡之庄を没落仕、  
 藤四郎を慕御國ニ罷下候、夫より藤四郎猿渡家之嫡流  
 致相續、私迄廿二代無断絶連續仕候、藤三郎事、頼  
 朝公江奉仕候儀者東鑑ニ相見得申候、本田・酒匂・猿  
 渡之三氏、御供之棟梁ニ而罷下候儀者、御記録方ニ相  
 知申、今以世俗迄茂申傳、乍憚差立為申者ニ而候、從  
 忠久公五百年來御譜代ニ被召仕、元祖以來終ニ奉背

御家候儀無御座候、守護代・御家老職を茂被仰付、代  
 々一所之地を茂被下置、戦場之武功を勳候儀、近代ニ  
 至迄数多有之、筑前・刑部・与市左衛門・越中・掃部  
 兵衛・与二郎迄者六代引續戦死仕候、右之越中事、伊  
 集院肥前・山田越前三人之軍功を以、筑後國入 御手  
 裏候儀も有之候、越中子掃部兵衛事、於高麗 義弘公  
 御意を以、從 公儀直之御使を茂相勤申候、代々御文  
 書を茂数十通被下置候、越中祖父刑部迄者限之城を傳  
 領仕、其子与市左衛門幼少迄ハ限之城ニ罷在候、其子  
 越中より私祖父喜右衛門迄者、引續諸所之地頭職被仰  
 付候、右之通、段々首尾好被召仕被下候一筋之者ニ而  
 候間、二男之儀御太刀進上被仰付被下度偏奉願候、此  
 等之趣、宜様御披露奉頼候、已上、  
 『元禄十四年』  
 巳十月五日 猿渡喜右衛門(信安)

覚

一右ニ相付候由緒書、左記之、

一 私家之儀者猿渡家嫡流ニ而、古系圖文書持傳罷在候得共、祖父猿渡喜右衛門代ニ自火を起委燒失仕、家傳其外旧記少々為相殘迄ニ而候故、私家筋之儀此内者御記録方ニ茂委敷訊相知不申候処、私家之古系圖写、吉利治部家ニ有之候を、去年十二月、同名監物乞請候而則御記録所江指出、写迄相濟申候、右之写治部家ニ有之候、様子者治部祖父吉岡宮内御文書奉行之節、私家之古系圖文書を見届、系圖自筆を以写置、其代々ニ文書何通有、時代引合候与是又自筆之朱書を加、元祖より祖父喜右衛門迄二十代詳ニ記付、奥書ニ右三家辰三月十日久喜と記置被申候、久喜者宮内名乗ニ而候、三家之内本田次郎左衛門家之系圖者少相見得申候、今一家者料紙離レ一向相知不申候、三家を一紙ニ写候而文書引合、件書被仕置候者、御文書方役目ニ付而之考与相見得申候、宮内見届系圖ニ被記置候文書数二十三通、此外文書坪付数通有と被記置候代茂御座候得共、其員數者相知不申候、然者文書数多所持仕候儀茂證據分明ニ候、右之通、古

系圖文書を見届、時代迄茂引合、自筆を以被写置候得者、古系圖同前ニ而御座候、右ニ付而此節段々申上候趣共御座候、

一元祖猿渡藤三郎信元者、猿渡之庄を相領致家號、猿渡者尾張國ニ有之由家傳ニ候、右之藤三郎ハ、比企判官能員為ニ者甥ニ而候、藤三郎・嫡子太郎信景・二男藤四郎實信、父子三人共ニ頼朝公江奉仕候処ニ、忠久公三州之御守護職ニ而、文治二年八月 御入部之節、右之藤四郎事、從 頼朝公被召附御供仕、御劍之役ニ而罷下候、頼朝公被遊 御感御紋之御旗を被下候、依之二疋龍之紋所、於于今用來候、右之藤三郎信元・太郎信景父子者本國ニ罷在候處ニ、藤四郎御國ニ罷下候拾八ヶ年ニ至リ建仁三年、能員謀叛之企有之、信元・信景父子共ニ與同仕候処ニ合戦相破能員滅亡、剩信景事者 一幡君之御館於小御所遂戦死候故、藤三郎事、猿渡之庄を没落仕、藤四郎を慕御國ニ罷下候、從夫藤四郎猿渡家之嫡流を相續仕、元祖より私迄二十二代無断絶連續仕候、酒匂・本田・猿

渡之三氏者、忠久公御供之棟梁ニ而罷下、乍憚差立為申訳之者ニ而候、此儀者御記録方ニ相知申、今以世俗迄茂御供之内右之三家を指候而唱申事御座候、藤三郎 頼朝公江奉仕候儀者東鑑ニ相見得申候、

一 右藤四郎事、前攝政基通公より藤原之御姓を被下置候、其後私六代之祖越中信光ニ從 龍山公藤原氏御由緒之御書被下置候、基通公者 忠久公江御由緒御座候ニ付、忠久公御姓を藤原ニ被遊御改候、乍恐藤四郎事者、比企能員為ニ者又甥ニ而、御供仕候御家臣之内ニ而茂差立為申列之者故、右之節藤原之御姓を被遊御恩免候哉与奉存候、藤四郎事、御家老職ニ而罷下、其後守護代をも相勤申、末吉を被下領知仕候由家傳ニ有之候、御供之三家与世以申傳候得者、家傳之通無別条證據欵与存申候、

一 藤四郎子藤三郎信高事、能員謀叛之後、鎌倉之御供難叶候故、御劍之役を本田貞親ニ相讓申候、信高子太郎信輔茂末吉を相領罷在、弟次郎与申候者、末吉之内村山を領知仕、村山与名乗申候、村山氏猿渡家

庶流之儀者御記録方ニ相知申、他之旧記ニ茂相見得申候、其後加世田を為領由家傳ニ候得共、時代相知不申候、

一 藤三郎信重・其子大和信忠父子共於諸所軍勞仕候、信重事、於郡山軍功有之、從 貞久公御文書被下置候、郡山合戦之儀者、觀應元年、從 貞久公大藏氏頼平ニ被下置候御一見状之内ニ茂、比志嶋孫太郎・同太郎・猿渡藤三郎与相見得申候、其後信重事、文和四年九月三日、於櫛木野宮方之大將三條侍從与致合戦討死仕候、櫛木野御合戦之儀茂他之旧記ニ相見得申候、右大和信忠事、應永四年、於清色城軍勞仕、從 元久公御文書被下置候、清色御合戦之節大和罷向候儀者、山田聖栄記録之内ニ茂相見得申候、信重・信忠父子ニ者、從 貞久公・氏久公・元久公御文書數通被下置候、

一 筑前信宗、限之城を被下領知仕候、從 忠國公限之城西手之内被下置候、御文書をも頂戴仕候、筑前以來限之城ニ罷在候儀者、他之旧記ニ茂相見得申候、



筑前事、文明十七年六月廿日、於日州飢肥戰死仕候、

一 筑前子刑部信有事茂隈之城ニ罷在候、父筑前同所ニ

而同日ニ戰死仕候、筑前・刑部戰死之儀者、文明記

ニ茂相見得申候、

一 刑部子與市左衛門信資事茂幼少迄者隈之城ニ罷在候、

信資四歲之時、祖父筑前・父刑部共ニ戰死仕孤ニ罷

成、日新公江罷出御奉公相勸申候、於諸所軍功有之、

御文書をも被下置候、天文七年十二月、貴久公加

世田之城御攻被成候節茂、与市左衛門御供仕致軍勞

候、同月廿八日、右城御攻落被成候處、俄ニ後詰之

勢寄来散々ニ相戰御味方危、已 貴久公御一大事ニ

御究被成候節、与市左衛門城之大手黒鳥口ニ而遂戰

死候、家来迄茂七人討死仕候、御合戰御勝利之後、

與市左衛門折目之戰死を 貴久公被遊 御感、嫡子

藤三郎五歳ニ而未幼雅之者ニ而候得共被 成下 御

感状、本領之外加世田之内五町被下置候、与市左衛

門戰死之儀者 貴久公御軍記ニ茂相見得申候、藤三

郎事、後ニ越中与申候、

一 右越中信光事、加世田之内小湊村を被下置、彼地ニ

罷在、直ニ加世田之地頭被仰付候処、羽月之儀肥後

境故、越中移地頭ニ被仰付、足輕大将猿渡備後・鹿

嶋藤七・宇都宮次郎左衛門杯被召附罷移、数年彼地

ニ罷在、天正年間、九筋表ニ長々在陣、軍勞為仕儀

共多々有之候、右段々之次第、他之旧記ニ茂相見得

申候、

一天正十年十二月七日、肥前知々輪之城御攻被成候刻、

野久美口ハ越中一番ニ攻破、敵数多討取得勝利申

候、右一番乘之儀者、上井伊勢日帳ニ茂相見得申候、

一天正十二年三月、於肥前嶋原龍造寺隆信与御合戰之

刻、越中一手之勢を以山之手之大将鍋嶋加賀守与遂

合戰候処ニ、加賀守致敗軍候、此時越中二男與二郎

戰死仕候、越中一手を以致合戰得勝利候、次弟与二

郎戰死之儀者、九州記ニ茂委數相見得申候、家傳之

趣ニ相違無御座候、與二郎を討捕候者、鍋嶋平五郎

茂里与申者ニ而、子孫者唯今鍋嶋主水与申候而、松

平信濃守様御家老ニ而罷在候、

一 同年十月八日、新納武藏・伊集院下野・山田新助・越中四人、筑後國三池ニ方角為見賦被差遣、各軍勞為仕儀共、上井伊勢日帳ニ相見得申候、

一天正十三年、筑後國御攻被成候ニ付、九月六日、伊集院肥前・山田越前・越中三人ニ被仰付、肥後國之内宇都・隈元・大津山・和仁・邊春・小代六ヶ所之人數を被召付被差遣候、依之鍋嶋飛驒守ニ茂筑後表ニ肥前・越前・越中其外餘多被差遣候間、相談候而入魂肝要之由被仰遣候、右三人惣勢を卒シ急ニ攻入、先山下里目之邊を放火仕、同十二日、堀切之城ニ取掛ヶ各尽粉骨切崩、敵三百余討捕申候、夫故江之浦其外之城ニ茂降参仕候、其後大寺大炊助を以各辛勞仕候由、御礼為被仰下儀共御座候、筑後國入御手裏靜謐ニ相治候儀者、越前・肥前・越中三人之軍功迄ニ而御座候、右段ニ之趣者、上井伊勢日帳ニ委數相見得申候、

一天正十五年三月、筑前在陣之人数御引取セ被成候節、越中事茂同前ニ引取申候処ニ、同四月、羽柴美濃守

殿日州口より被入來、於目白坂御合戦之節越中事茂罷向、終ニハ於彼地ニ遂戦死申候、此時家來茂拾一人討死仕候、越中ニ茂數通之御文書被下置候、

一 越中子掃部兵衛信豊事茂羽月地頭被仰付置候、天正十五年八月、肥後國合志之城主合志藏人手勢五拾五人ニ而羽月ニ落來候処ニ、詔有之候ニ付早ニ可打捨旨、掃部兵衛ニ被仰付候、依之被召付置候白坂式部・宇都宮次郎左衛門其外人数を催、同月廿五日、藏人并相隨候者共不殘討果申候、藏人墓羽月大聖寺ニ有之候、右之趣者、今以羽月衆中申傳茂有之候、

一 掃部兵衛事、文祿元年、高麗ニ御供仕罷渡候処、同二年二月、奥陣加藤清正ニ公儀御用之儀有之候条、從 公儀之為御使薩摩衆可被仰付由、浮田宰相秀家其外御奉行衆より 義弘公御承被成、數根仲兵衛・掃部兵衛兩人ニ被仰付候処ニ、無吳儀御受申上候ニ付、從 義弘公・久保公無比類被 思召上候、於為掃部兵衛御知行可被下旨 御感状被下置、兩人ニ鉄炮足輕式百人被召附、清正陣所兀良哈之内甲山与申

所ニ罷越候、往来十日路程之敵中故、大勢取圍及難儀候得共、打破罷通御用相違候、清正對面被成、長途之敵中小勢を以押通候儀襲美被成候、兩人罷帰候処ニ、秀家其外御奉行衆より使者を以被為呼、右同前之襲美被成、石田三成より状を給候、右段之趣者、征韓<sup>(録)</sup>禄ニ具ニ相見得申候、御感状写、三成状写為御見合差上申候、此外ニ茂掃部兵衛ニ御文書被下置候、

一掃部兵衛事、慶長三年十一月十八日、從朝鮮 御帰朝之節、於唐嶋番船ニ切乘戦死仕候、其後掃部兵衛後家ニ從 義久公折々御使被成下、代々戦死之跡ニ而候間、身本をあらし不申罷在、家を可取立旨 御意候而、御一臺よりとして紅粉・輕粉等をも被下置候、此儀者加治木ニ罷在候大村市兵衛家之記録<sup>(録)</sup>ニ相見得申候、右記録ハ先年市兵衛より御記録所ニ差出置申候、

一掃部兵衛男子無之候故、弟之與三跡目ニ被仰付候、與三事も高麗ニ御供仕、御帰朝以後直ニ関ヶ原ニ御

供仕候、其後栗野地頭被仰付候、与三養子者私祖父

喜右衛門ニ而候、薩州山田之地頭被仰付候、喜右衛

門事者、日野内膳入道恕<sup>(子)</sup>嫡子ニ而候を、從 義弘

公家久公江可被召附旨 御意之趣御座候而、猿渡家

養子ニ被仰付候、喜右衛門養子者則私父監物<sup>(助)</sup>ニ而候、

右由緒之儀者、他之旧記を以家傳之趣を相糺、如

斯御座候、以上、

「元禄十四年」  
巳十月五日 猿渡喜右衛門<sup>(信安)</sup>

一右之口上書并由緒書、御感状写、石田三成状写、何

レモ大野隼人取次ニ而致披露候処ニ、其後御記録所江

調之儀被仰渡候由、依之御記録<sup>(録)</sup>奉行田中五右衛門國明

より家筋之傳記可書出由承之候、兼而傳記之一筋相糺、

他之旧記ニ引合、相違無之儀迄を集号ニ通考家譜<sup>(一)</sup>、則

右之通考を御記録所江指出候、且又通考大意之旨を茂

別紙ニ書記、是又同前ニ元禄十四巳年十月指出候、左

ニ記之、

通考家譜

【正文有】  
高望王七代

○猿渡藤三郎信元

叔父比企能員カムホンニ依テ猿渡庄ヲ落テ薩摩ニ

下ル、

右考ルニ

○高望王七代と有之候儀、桓武平氏之系圖見合候ニ、

高望王ヨリ平相國清盛迄八代ニ而候、藤三郎迄ハ

七代ニ而候、清盛家よりハ一代不足ニ而候、清盛

と藤三郎時代相并候事、

○猿渡之庄者尾張國ニ有之由家傳ニ候事、

○能員者信元叔父ニ而候得者、丹後御局様者藤三

郎為ニ者御伯母ニ而、乍恐 忠久公江御従弟之御

由緒ニ而候事、

東鑑卷之十五 建久六年三月

十日、 將軍家<sub>ト</sub>為令<sub>レ</sub>逢<sub>ニ</sub>東大寺供養<sub>一</sub>給<sub>上</sub>、著<sub>ニ</sub>御

于南都東南院、自<sub>ニ</sub>石清水<sub>一</sub>直令<sub>ニ</sub>下向<sub>一</sub>給<sub>ニ</sub>云、

【此間先陣并次御隨兵等之人數略之】

將軍御車

次御隨兵

小山左衛門尉 北條五郎 平賀三郎

奈古藏人 徳河三郎 毛呂太郎

南部三郎 村山七郎 毛利三郎

淺利冠者 加々美二郎 同 三郎

後藤兵衛尉 葛西兵衛尉 比企藤次郎

稲毛三郎 梶原源太左衛門尉 加藤太

阿曾沼小次郎 佐貫四郎 足利五郎

小山五郎 三浦平六兵衛尉 佐々木左衛門尉

小山田四郎 野三刑部丞 佐々木中務丞

波多野小次郎 同 三郎 沼田太郎

河村三郎 原宗三郎 同 四郎

長江四郎 岡崎與一太郎 梶原三郎兵衛尉

中山五郎 渋谷四郎 葛西十郎

岡崎四郎 和田五郎 加藤次

小山田五郎 中山四郎 那須太郎

野瀬判官代	安房判官代	伊達次郎
岳邊 <small>(岡之)</small> 小次郎	佐野太郎	吉香小次郎
南条次郎	曾我小太郎	二宮小太郎
江戸七郎	大井兵三次郎	岡部右馬允
横山權守	相模小四郎 <small>(小山四郎之)</small>	【○】猿渡藤三郎
笠原十郎	堀藤次	大野藤八
伊井介	横地太郎	勝田玄番助
吉良五郎	浅羽庄司三郎	新野太郎
金子十郎	志村三郎	中禪寺奥次
安西三郎	平佐古太郎	吉見二郎
小栗二郎	渋谷二郎	武藤小次郎
天野藤内	宇佐美三郎	海老名兵衛尉
長尾五郎	多々良七郎	馬場二郎
筑井八郎	臼井與一	戸崎右馬允
八田兵衛尉	長門江七	中村兵衛尉
宗左衛門尉	金持二郎	奴加田太郎
大友左近将監	中條右馬允	伊澤左近将監
渋谷彌五郎	佐々木五郎	岡村太郎

24の2

猪俣平六	庄太郎	四方田三郎
仙波太郎	岡部 <small>〔辺〕</small> 六野太	駕三郎
古郡二郎	都筑平太	菅田太郎
熊谷小二郎	志賀七郎	加世次郎
平山右衛門尉	藤田小三郎	大屋中三
諸岡次郎	中條平六	井田次郎
伊東三郎	天野六郎	工藤三郎
千葉四郎	同 五郎	梶原平次左衛門尉

後陣『人数略之』

【○】右之列ニ藤三郎相見得候事、

東鑑卷十七 建仁三年九月

三日、被<sub>レ</sub>搜<sub>二</sub>求能員餘黨等<sub>一</sub>、或流刑、或死罪、多以被<sub>二</sub>糺断<sub>一</sub>、『下略』

右之通、能員ニ與同為仕者、被尋搜被所嚴科候故、尤藤三郎事、本國猿渡之庄を没落仕、二男藤四郎を慕御國ニ為罷下筈と相考候事、信元叔父之謀叛

ニ致シ與同、嫡子信景遂戰死候、無摠親類ニ而與致シ候得者、能員同前之張本ニ而候、依之能員滅亡之以後者、比企・猿渡兩家一向東鑑ニ相見得申候事、

信景

太郎 於小御所打死、

右考ルニ

東鑑卷第十七 正治三年 (建仁)

(九月)

二日、「此間略」御使退去之後、廷尉子息親類等諫云、「此間略」廷尉僮僕奔歸宿慮、告事由、仍彼一族郎從等引籠一幡君御館、「此間略」各襲到彼所、比企三郎・同四郎・同五郎・河原田次郎能員・笠原十郎左衛門尉親景・中山五郎為重・糟屋藤太兵衛尉有季已上三人能員筆、等防戰「下略」

【〇】右之通、能員を北條時政館ニ被招候節、子息

并親類諫言為仕由候得ハ、即時之儀ニ候故、右之親類茂不殘小御所ニ引籠候、能員之子息・猶子・聳之名迄相見得、親類者名不相見得候、信景も諫言之人数ニ而、子息・聳同前之戰死与相考候事、

【〇】實信

藤四郎 文治二 忠久公御供ケン之役ニテ山

門院下向、頼朝公御感有テ御旗ヲ給、故幕

旗之紋ニ引ニ定ル、前撰政殿基通公ヨリ藤原

氏ヲ給、「御下向ハ建久七年ノハス不審」

右考ルニ

東鑑卷第十 文治六年十二月 (建久元)

一日、右大將家御拜賀也、「下略」

路次行列

糟屋藤太有季直衣折烏帽子持御劍、武太刀

二日、右大將家御直衣也 (始脱カ)

無扈從之人、先御參 仙洞ニ入東門、候ニ西作

會廊ニ給、則依レ召右中辨棟範朝臣召之、參進御前、移レ冠御退

出、抑昨日拜賀、直垂者持<sub>二</sub>太刀<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御尋<sub>一</sub>、被

奏<sub>二</sub>姓名之處<sub>一</sub>、無官不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>兵衛尉<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>云云、

東鑑卷第二十四 建保七年正月

廿七日、入<sub>レ</sub>夜雪降、積<sub>二</sub>二尺餘<sub>一</sub>、今日將軍家右大臣為<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>、御<sub>二</sub>參鶴岳八幡宮<sub>一</sub>御社參、酉尅御出行列<sub>二</sub>此間略<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>御宮寺樓門<sub>一</sub>御之時、右京兆<sub>義時</sub>朝臣<sub>義時</sub>俄有<sub>二</sub>心神御違例事<sub>一</sub>、讓<sub>二</sub>御劍於仲章朝臣<sub>一</sub>退去給、

東鑑卷之廿七<sup>(八)</sup> 寬喜四年三月

三日、依<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>鶴岳宮恒例神事<sub>一</sub>、午一點、將軍家欲<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御參宮<sub>一</sub>、<sub>二</sub>此間略<sub>一</sub>御劍又被<sub>レ</sub>擇<sub>二</sub>其仁<sub>一</sub>、改<sub>二</sub>先役人<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>式部太夫政村朝臣<sub>一</sub>權<sub>二</sub>依<sub>二</sub>此儀式<sub>一</sub>、時尅推移<sub>二</sub>下略<sub>一</sub>

東鑑卷之二十一 建曆三年六月<sup>(八九)</sup>

廿日、將軍家新御所移<sub>徒</sub>之御車、自<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>遲到之間、被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>、酉時、自<sub>二</sub>前大膳太夫廣元朝臣<sub>一</sub>第<sub>二</sub>入<sub>二</sub>御新御所<sub>一</sub>、<sub>二</sub>下略<sub>一</sub>

隨兵前駈<sub>二</sub>人數略<sub>一</sub>

御劍役人 修理亮泰時<sub>權</sub>

東鑑卷第四十九 正元二年二月<sup>(三九)</sup>

廿一日、<sub>二</sub>此間略<sub>一</sub>吉時將軍家<sub>御烏帽子</sub>直衣<sub>土御門黃門</sub>

<sub>顯方</sub>朝臣<sub>顯方</sub>役<sub>二</sub>御劍<sub>一</sub>、相模太郎殿猷<sub>二</sub>御沓<sub>一</sub>給、<sub>二</sub>下略<sub>一</sub>

○右之通、御劍之役者其時代執權又者御公家方、其外<sub>二</sub>而者為差立人之勤<sub>一</sub>而候、糟屋藤太有季事、右之御役被<sub>レ</sub>相勤候故、依<sub>二</sub>勅定兵衛尉<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>召成候、有季事者比企能員聳<sub>二</sub>而<sub>一</sub>、頼家公之<sub>二</sub>御臺所者<sub>一</sub>有季內室ノ御兄弟<sub>二</sub>而候<sub>一</sub>、此外將軍家出御每<sub>二</sub>御劍之役之儀者<sub>一</sub>、北条殿を始時之執權差立候御譜代之面<sub>二</sub>為被仰付<sub>一</sub>ト東鑑<sub>二</sub>相見得候<sub>一</sub>、時代を以<sub>レ</sub>相考候得者、藤四郎事、乍恐<sub>二</sub>忠久公江御由緒有之<sub>一</sub>、御家老職を茂相勤候故、御劍之役<sub>二</sub>而被召列<sub>一</sub>、其後御守護代をも被<sub>レ</sub>仰付、取分<sub>レ</sub>御取持茂屹<sub>二</sub>為相替儀曆然<sub>一</sub>候、昔時當家より御劍之役相勤候儀ハ系圖迄<sub>二</sub>而も無之<sub>一</sub>、他之旧記<sub>二</sub>茂相見得候事<sub>一</sub>、

東鑑卷第九 文治五年九月

廿日、「此間略之」紀權守波賀次郎太夫等勲功事、殊蒙<sub>ニ</sub>御感之仰、但不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>賜<sub>ニ</sub>所領、被<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>旗二流、被<sub>レ</sub>仰<sub>上</sub>可<sub>レ</sub>備<sub>ニ</sub>子孫眉目<sub>上</sub>之由<sub>上</sub>云云、

【〇】右紀權守波賀次郎太夫軍功之儀者、國衡居城を攻落、國衡打死候、此依軍功之賞御旗を被下候、然者藤四郎事、忠久公江被召附、遠國迄被差下候依賞、右之通御紋之御旗を為被下事与相見得候、二足龍之御紋之儀者、前代より今以猿渡家付来候事、

【〇】右藤四郎江從 普賢寺閔白基通公藤原之御姓被下置候儀者、忠久公江 基通公御由緒御座候ニ付、忠久公御姓を藤原ニ被遊御改候、藤四郎事、能員又甥ニ而、乍恐 忠久公江御由緒有之御家臣之内ニ而茂差立為申訳之者故、右御改之節、藤四郎江茂藤原之御姓を為被下御事ニ而候事、宮内太輔殿朱書ニ 御下向者建久七年之筈不審与

有之候、宮内太輔殿御文書奉行之時分迄者、專建久七年 御下向之一説御座候間、宮内殿不審尤之儀ニ候得共、其後文治二年ニ為相極御事ニ候得者、系圖之表ニ致封合候事、

【〇】實信事、御家老職ニ而御供仕罷下、末吉を被下領地致、守護代を茂被仰付置候旨家傳有之候、忠久公御供仕罷下候人数之内、本田・酒匂・猿渡之三家を差候而、今以世俗迄茂申傳候、是則御供之内為差立棟梁ニ而、御家老職・守護代職をも相勤為申者之證據ニ而候、実信守護代相勤候年間を考候ニ、本田次郎近常、其養子貞親父子被罷下、酒匂家者梶原刑部丞朝景・子息左衛門尉景貞父子為被下由承事ニ候、弥其通ニ候ハ、次郎近常・刑部丞朝景・左衛門尉景貞事、忠久公御下向之以後、鎌倉江為被相詰趣ニ東鑑ニ相見得候、次郎近常、文治五年七月九日泰衡御退治之節、彼地ニ被罷向候、其後元久二年六月廿二日、重忠打死之節茂近常被相見得候、文治五年与元久二年者十八



ヶ年程之間ニ而候、養子貞親者、実父重忠元久二年四十二歳ニ而打死を以考候得者、忠久公御下向之節者、如何茂幼雅之筈ニ而候、酒匂氏之儀者、刑部丞朝景正治二年正月廿日梶原平三景時打死之節降参仕、後々迄鎌倉ニ被罷居候、嫡子左衛門尉景貞事茂、建久三年二月廿九日、將軍家供奉之列ニ相見得被申候、其以後数年之間鎌倉ニ被居候儀、東鑑ニ相見得候、近常茂景貞茂其子を御國ニ召置、其身ハ鎌倉ニ被相詰候哉、然者當家守護代職之儀者、近常・景貞在鎌倉之年間ニ相當候事、

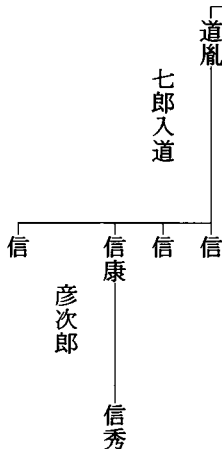
【○】信高

藤三郎 能員カムホンノ後、鎌倉之御供不叶故ニ、御劍之役ヲ本田貞親ニ譲ル、秩父殿男ナリ、

右考ルニ

右本田貞親事、重忠之息ニ而候を近常養子ニ為被仕儀者、本田次郎左衛門殿方江茂相知有之由候、

重忠之儀者、関東御家人之内ニ而茂威勢有人ニ而、殊更 忠久公御簾中様者重忠息女之由候得者、貞親 御簾中様之御兄弟之筈ニ而御座候、左様成由緒を以、御劍之役を讓渡為申證據之為ニ、秩父殿男ナリト腰書ニ書載置為申儀与相考候、無左候得者、貞親家之俗姓を當家之系圖ニ書載置筈ニ而者 無之候事、



【信高ヨリユツリ状アリ、詳ニ見エス、時代引合】

【○】信輔

太郎

右考ルニ

【○】信高ヨリ信輔江讓状之儀者、實信以来傳領之末吉を讓渡候状与相考候、信輔弟次郎事、末吉之

内村山を致領知、直ニ致家号候、村山庶流之儀者、  
他之旧記ニ茂相見得候、

次郎

村山ト号、

【○】信邑

二郎

【○】信統

藤四郎

沙环  
(マヤ)

【○】信重  
『貞久公之文書ニ通時代引合、頼久之状一通アリ』

藤三郎 郡山ニテ高名ヲ極ル一見状明白也、

文和四年九月三日、櫛木野ニテ宮方ト合戦打

死、

右考ルニ

24の6

諏訪舎人殿家来加治木伴右衛門所持候文書写

『正文ノ写有』

今月十八日薩州郡山城江大隅助三郎入道以下凶

徒等寄来之時、十八九廿日、致散々合戦之處、

親類小山田彦五郎左ウテ被射貫、若黨藤丸左衛門次郎

左ノチノ下、同森五郎三郎左ノ大モ、被射貫、中間弥三郎

左ノ大モ、被射、同藤三郎左スネ被射、此等子細、比志嶋孫太

郎・同舎弟太郎・猿渡藤三郎等同所合戦之間、

被見及畢、爰率凶徒等大勢、令取用害七八ヶ所、

押卷城候之間、依無人数無力引退候訖、所詮、

御方志候之上者、為凶徒退治、被向御勢候者馳

参、重可致軍忠候、然者給御判、為備後證粗言

上如件、

觀應元年八月廿一日 大藏頼平

承了(島津貞久)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二三三三号文書ト同一文書ナルベシ)

右御證判ニ相見得候郡山合戦之儀并猿渡藤三郎罷

向候事、系圖之表致封合候、從 貞久公藤三郎信重江被下置候御一見状茂、右之大藏頼平ニ被下候御文書同前、御一見状ニ而可有御座与相考候、其外ニ被下置候御文書者、何様之分ケ難相考候事、

古跡集之内但諸所之由緒ヲ書タル也、

榎木野今串木野

文和四年九月二日、官方大将三條侍従并市来太郎左衛門尉・鮫島彦次郎入道・知覽四郎・左當彦次郎入道以下賊徒寄来當城之間、師久馳向五ヶ日致合戦、御敵等数輩討捕之追落訖ト云云、

【〇】右信重事、文和四年九月三日、於榎木野官方之大将三條侍従与遂合戦候処ニ致討死候、年月日系圖之表右之文書ニ致封合候、頼久之状尙通有与宮内大輔殿見届、朱書ニ被記置候者、川上上野介頼久ニ而候事、

【氏久公・元久公之文書四通アリ、時代引合】

【〇】信忠

大和守 應永四年、元久公御手於清色城高名アリ、一見状明白也、

右考ルニ

(応永記)  
山田聖栄日記之内

應永四年丁丑四月下旬ニ清色城ニ被押寄、山北よりハ前上総介伊久為大将「此間略」鹿兒嶋より 陸奥守元久為大将、新納越後守實久・北郷讃岐守・(守脱カ) 柗山安藝守・佐多和泉・河上、御内之人(ニハ脱カ) 本田・酒匂・阿多・平田・石井・伊地知・上井・鹿野(肥後脱カ) 屋・猿渡・田代・長野・千代・富・北原、皆成一(向田カ) 人當千之思、「下略」

【〇】右記録ニ猿渡与相記有之候者、大和守信忠事ニ而候、年月并其所迄系圖之表ニ致封合候、右一列之衆者、何レ茂一所之地を領候衆ニ而候、信忠迄茂末吉を領候哉、又者此時加世田を領候哉、其段者不相知候事、

<p>【○】信吉 右衛門太郎</p>	<p>【○】兼信 筑前守</p>	<p>【○】藤三郎 【○】信兼 五郎 <small>(ママ)</small></p>	<p>【○】藤九郎 五郎 左衛門尉</p>	<p>【○】氏久公・元久公御兩代様之御文書四通、宮内殿被見届置候由、朱書ニ相見得候、内一通者御一見状与相見得候、其外之三通者何様之訳難相考候事、 信夷</p>
------------------------	----------------------	--------------------------------------------------------	-------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

24の9

<p>「龜次」 『忠國公ヨリ西手之内給ル文書アリ』 【○】信宗 筑前守 限之城領、 右考ルニ 文明之比之旧記但知覽之寺ニ有之候、 文明六年甲午八月之比、花洛西九州下三ヶ國、日向大隅薩摩行脚廻聞侍ニ、當守護御屋形島津又三郎殿藤原朝臣武久、御年十二、譜代御住居鹿兒嶋、 『此間諸所略之』限城ニ猿渡、天辰、本田周防助、成枝、町田、『下略、但他所故略ス』 【○】右旧記ニ相見得候猿渡ハ、筑前守ニ而候、從忠國公西手之内被下候文書、宮内大輔殿見届、朱書ニ被記置候ハ、限城西手之事ニ而候、其後限之城を惣様領シ、彼地江罷在候事、</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

文明記之内

文明十七年乙未六月廿日、『此間略』薩州國久之手切負テ、猿渡筑前守・同刑部少輔・本田又次郎・伊牟礼又九郎杯云究竟之者被打ケレハ、『下略、但國久、其時ハ、忠國公御味方ニテ大将也』

『〇』右之趣、系圖ニハ不相見得候得共、文明記ニ相記有之候上ハ、打死之儀別条なく候事、

宗實

實氏

備後守

源左衛門尉

實明

兵部大輔

備後守 越中守相附羽月ニ移リ申候、

右考ルニ

羽月山之門之山之神宗札写山之門吉兵衛格護

右意趣者『此間略之』大禮那藤原氏猿渡備後入道實

明・同兵部少輔實昌子孫繁昌、諸人快楽故也、

天十七己巳年十一月廿一日番匠為安鍛治家正

栗野宗廟正八幡棒札写

天正十八年二月吉日、大禮那 義弘公地頭川上三河入道奉行猿渡備後入道、

右備後事、越中為ニ者二從弟半ニ而候、親類故

越中江被召付候、但備後ハ足輕大将被仰付、羽

月ニ被召移候事、

信

『〇』刑部少輔信有

右考ルニ

右信有事茂隈之城ニ罷在候、文明十七年六月廿日、父信宗与同日同所ニ而戦死、文明記ニ相見得候、委細ハ信宗譜之内ニ記置候事、

『日新公之文書アリ』  
【〇】信資

與市左衛門尉 ミナシ子トナリ 忠良公江奉  
公申候、黒鳥口打死仕候、此時家臣七人打死、  
法名義興、五十七、

右考ルニ

信資事、文明十四壬子年誕生、父刑部打死之節  
者四歳ニ而家督仕、隈之城ニ罷在候、於諸所軍  
勞仕、御文書を茂被下置候事、

貴久公御軍記之内

【上略】

天文七年雪月廿八日、入道殿御父子三人、酉刻計  
加世田城ヲ攻ントテ『此間略』貴久様則時ニ掛出追  
拂ヒ給、敵軍跡ヲ遮ルヲ不知、既ニ危カリツルニ、  
御舍弟忠將鞭鎧ヲ合テ馳續キ、敵ヲ中ニ取籠從前  
後攻ケル間、敵ニ市来備後守・大寺彦五郎ヲ為始  
数多討取、貴久様御手之衆ニモ市来備前守・猿  
渡與市左衛門尉・税所助十郎『此間略』其場ニ討レ  
ヌ、

【〇】右之表

貴久公御難儀之時信資戦死、系圖之  
表致封合候、其時嫡子藤三郎ハ五歳ニ罷成候処ニ、  
本領之外ニ加世田之内ヲ五町被下候文書有と系圖  
ニ相見得候、藤三郎未幼少ニ而候処ニ、父信資折  
目之戦死を被遊 御感、御加増ヲ被下候段、餘例  
多ハ無御座候、 義久公御代ニ本田若狹守殿子息  
三之山ニ而戦死候、若狹守殿より依訴詔、若狹守  
殿江知行式反程被給候、此儀者上井伊勢殿日帳之  
内、天正三年三月廿四日之座ニ相見得候、与市左  
衛門事ハ折目之戦死故、右之通ニ候、与市左衛門  
戦死之跡者、加世田城之大手黒鳥口より一町程モ  
間有之、大木を植候而有之候、右戦死之場ハ彼地  
之衆今以申傳モ有之候事、

信兼

與市兵衛尉

右考ルニ

与市兵衛戦死之儀者、日新寺過去帳ニ相見得候、  
於何方戦死之儀、可追考事、

宗阿<sup>(A)</sup>阿<sup>(P)</sup>阿<sup>(T)</sup>阿<sup>(R)</sup>

父為菩提諸國修行ニ出ル、後頭<sup>(憲)</sup>俗肥<sup>(憲)</sup>功<sup>(憲)</sup>ニ住、與  
市兵衛ト申候、

宗阿弥事、父為菩提諸國修行ニ出、後頭俗肥州ニ  
住候由、右之子孫此節相知候様子者、元禄九子年  
信安在江戸之節、御直参村山自伯与申御醫師ヨリ、  
松平彦大夫殿を以信安江被仰聞候者、自伯事ハ信  
安家之親類ニ而候、家ニ付而之由緒を茂被為聞度  
由被仰掛候訳承届候処ニ、自伯祖父ハ猿渡与作与  
申、親父者傳左衛門与申候、肥前唐津ニ寺沢志摩  
守殿在城之節、彼家中ニ被居候、其後罕人して一  
且越前表ニも被居候由、與作親父茂不相知、信安  
家より何様之分レニ而親類ニ而候哉、其訳茂不相  
知候、親類与迄申傳候由、此段者能勢<sup>(瀨)</sup>曆庵<sup>(但其時陽徽)</sup>  
を以内意ニ承候得共、信安家ニ申傳無之、一向寛  
無之儀候故、彦大夫殿迄信安より直ニ申達候ハ、  
家之系圖國元江召置候得バ、家筋之分レ可見合様

無之候、右由緒之家傳、信安一向寛ハ無之由申達、  
一圓請込不申候、然處ニ元禄十三辰年信安在江戸  
之節、自伯より御直参衆小笠原三左衛門殿を以右  
之趣ニ被申掛候、三左衛門殿より茂信安請込候様  
ニ与毎度被仰聞候、同年七月廿五日、江戸田町御  
屋敷江酒井右京亮様被 仰入候、其節三左衛門殿  
も御出候処、又候右之趣被仰聞候、 御前御席末  
ニ而蜜ニ被仰聞候、翌日就 御用 御前江罷出候  
処ニ、昨日三左衛門殿御用之儀被遊 御尋候間、  
自伯前方より彦大夫殿・三左衛門殿を以段々ニ被  
仰聞候趣、一々達 貴聞申上候ハ、私家ニ自伯親  
類之覺無御座候、乍然私六代之祖越中与申者、天  
正年間九州表ニ長々在陣仕候、肥前國知々輪之城  
責ニ茂罷在、其後筑後國御攻被成候ニ付、伊集院  
肥前・山田越前・越中三人ニ被仰付、数月相掛攻  
崩申候、家来之内ニ茂猿渡名字之者茂罷在候、左  
様成ル者共子共を殘置為申ニ而も可有御座かと考  
申候、外ニ存寄申所無御座候由申上候得バ、 御

意候者、彼方より右之通被申掛候ハ、覺無之候共、たとへ家来之者一筋ニ而も不苦候間、彼方より被申掛趣ニまかせ、いかに茂親類筋ニ而候由致返答、親類之つりの合仕可然旨、段々御意之趣御座候而、剩松平讚岐守様御家来長尾善庵御引事迄被仰下、此御方様江者古キ御家ニ而候得ハ、御家中ニ而其方杯之様成ル古キ家筋之者、親類与申候得バ世間之交茂宜候而之願ニ而候半間、弥親類と申候而可然旨御意之趣共御座候ニ付、其通ニ自伯親類之致付届置候処ニ、其後右之系圖出シ見合候処ニ、宗阿弥肥州ニ致居住候儀相見得候、究而彼自伯祖父之与作親ニ而可有之候、與之字を名付候儀茂證據ニ而候、然共親類与申候儀迄者其通ニ候得共、乍悴家庶流之分レ口を糺付究而申達候儀者重キ事ニ候、輕ク可申通儀ニ而茂無之与存、自伯江者一向無音ニ而罷在、御前江者系圖之表ニ右之趣相見得申候間、自伯先祖者彼宗阿弥ニ而可有之与相考申候由、粗達貴聞置候、自伯家

24の14

ハ宗阿弥流ニ必定相究候事、  
順阿弥(マヤ)

右考ルニ

上井伊勢殿日帳之内天正二年十月十七日之座ニ、高江之地頭山田新助殿より被申出候ハ、川邊ニ被居候有田方、高江ニ可被召移ニ相定候、川辺ニ所領懸持ニ而候諸事難成候、高江ニ加世田之順阿弥(訂脱カ)掛持之門三反候、是を加世田よりハ河邊よりくニ候之間、召替候而可然之由、

【〇】右之通、伊勢殿取次ニ而御家老衆江被申出候由相見得候、高江之儀、限之城ニ境候、与市左衛門信資幼少迄限之城ニ罷在候、限之城・高江之儀者同支配ニ而候、刑部領地高江ニ茂有之候、此時与市兵衛ニ高江之知行所之内を致附属候、依之右之知行所、順阿弥迄持来り候、順阿弥者与一兵衛二男ニ而候得共、宗阿弥他國江出候故、与一兵衛



讓者順阿弥請續候、与一兵衛茂兄之信資ニ相付、日新公江罷出奉仕候故、順阿弥迄茂加世田江罷在、高江之知行ハ掛持ニ而候事、

【文書并坪付數通アリ 近衛殿龍山ヨリ藤氏由緒之御書アリ】  
 【〇】信光

藤三郎 掃部兵衛尉 越中守

貴久公御危時、信資打死申候故、本領之外加世田之内五町、藤三郎江被下候文書有、加世田地頭ヨリ羽月ニ移申候、根白打死、五十四、家臣十一人打死申候、

右考ルニ

【〇】越中事、天文三甲午年誕生、五歳之時、父与市左衛門致戦死候、依軍忠越中末藤三郎と申候時、本領之外加世田ニ而御知行被下、其後ニ茂加世田之内小湊村を被下、彼地ニ罷在候、左候而直ニ加世田之地頭被仰付候、越中加世田江罷居候儀者、旧記ニ茂相見得候事、

上井伊勢殿日帳之内天正二年十一月

一廿八日「此間略」拙者ハ此日御老中江御暇申、永吉（罷越候、越中略）江罷越申候用段ハ野間之座主猿渡掃部兵衛殿被仰掛事候間、罷越候也、其趣ハ、「下略」

一廿九日、安田雅楽助方・酒匂宮内左衛門方、加世田江猿渡殿江使ニ遣候、其趣者、永吉役人処迄兩度使ニ預候之由承付候、殊彼盗人、内談以事終候する由承候か、御懇之儀候、雖然盗人を御内談之儀者、拙者分別不申候、盗之成敗可申迄候、乍去楚忽ニ成敗申候ハ、以後以、永吉ハ尚々同類なとか候つらん、能々相尋候へてなと、か沙汰ニ而ハ無曲候間、彼盗加世田へ召寄候て、御尋被成候へかし、無其儀候ハ、早々成敗可申由届申候也、猿渡殿鹿兒嶋へ参候留守ニ而候間、使ハ空帰候、

右掃部兵衛、後ニ越中と申候、加世田地頭より羽月地頭ニ而被召移候、依之加世田之領所小湊村を

羽月山野村ニ御繰替被下候、羽月之儀者、肥後境目ニ而肝要被入御念候所故、一門之者猿渡備後・鹿嶋藤七、他家ニハ宇都宮次郎左衛門但故有テ後宮内次郎左衛門改ト、三人ハ足輕大將ニ而候ヲ被召付候、此外ニ茂為被召附人有之候得共、極而不相知候、白坂式部も越中代より為被召付置由ニ候、越中事ハ羽月城内ニ罷在、山野ニハ弟ニ而候鹿嶋藤七ヲ召置候、此儀ニ付而ハ、藤七子孫鹿嶋太郎兵衛家ニ申傳之趣茂有レ之候得共致略候、右宇都宮次郎左衛門子孫茂于今有之候事、

大友御退治御日帳之内

一二日、『此間略』此晚羽月猿渡掃部兵衛尉、以使僧同前之御祝儀被申上、從新納武藏守も同前ニ被申入、『下略』

一天正八年八月、肥後國吉北郡水俣御陣ノ時之御軍記勢揃之内ニ茂、羽月地頭猿渡掃部兵衛相見得候

事、  
 『○』右之時分迄者、越中事未掃部兵衛と申候事、  
 上井伊勢殿日帳之内、天正十年十二月  
 一七日、『此間略』野久美ノ口ハ猿渡越中守殿一番ニ被責上由也、山田新助殿各辛勞共被成候由也、頼(有徳)娃左馬助殿分捕被成、鏝疵一ヶ所被蒙、粉骨之由也、諸軍粉骨ニ而、敵数百人被打留也、  
 『○』右有馬表御合戦之節ハ、川上上野助殿・頼娃左馬助殿・山田新助殿・鎌田尾張入道寛栖齋・越中相見得候、此外之人数ハ日帳ニ記候而無之候、野久美口ハ越中一番ニ攻破り、家来茂多ク石打ニ逢候、一番乗之儀者右日帳ニ茂相見得候事、

九羽記卷十二 天正十二年三月

『上略』鍋島加賀守直茂ハ山之手之將トシテ、薩軍猿亘越中守ト戦シカ、隆信命ヲ殞ト聞キ、コハ口惜キ次

(第) 弟哉、倡去ハ家久ヲ討取カ、無<sub>レ</sub>左ハ討死スヘシ、生テ二度古卿(古卿)ハ飯ルマシキト猶進行ケルヲ、老臣等諫メケルハ、惣軍機氣ヲ失ヘハ、此度家久ヲ討事叶候マシ、怒ナル軍シテ討死シ給ハ、政家誰ヲ頼テ重而御馬ヲ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>出、兔ニモ角ニモ始終之勝ヲ社良將トハ申候得ト、引立テ社婦ケレ、直茂涙ニクレテ、此上ハ力不<sub>レ</sub>及、我佐賀ニ歸リ、政家ヲ進テ日アラス敵ヲ討亡シ、隆信之孝養ニ報セシモノヲト齒咬かヲナシ、從士ヲ纏まとテ引退ク、猿巨カ一列來テ付慕フ、直茂カ兵鍋島平五郎・鍋島大膳・綾部右京・中野隼人・小森源右衛門・南里助右衛門・木下四郎兵衛・犬塚惣兵衛・水町弥太右衛門・北島治部・増岡權右衛門等ハ股肱(股)羽翼之臣ナルカ、小返シスル事度々ニテ、必死ニ成テ相戦フ、其中ニ平五郎茂里ハ、越中守カ長男猿巨與次郎ヲ討取り、慕フ敵ヲ討散ラス、日モ早西ノ峯ニ入、誰彼ニ成ニケリ、折シモ春雨降出テ、見恵町ヲ過ケル比、行先暗ク道不<sub>レ</sub>見、敗走之軍兵混乱

24の19

シテ敵味方モ知リカタク、自他之死生モ難<sub>レ</sub>分、直茂纏二十騎計ニテ漸多比良浦ニ着キ、渡之船ヲ求シニ『下略』

『○』右越中一手を以鍋嶋加賀守と合戦之儀者、段々家傳之趣有之候、系圖二男與次郎肥州ニ而戦死之趣相見得候、何れ茂九筋記ニ致封合候、乍然右式之板行物ハ屹与證文ニ可罷成共難究候得共、越中父子合戦之儀者、家傳ニ無相違致封合候得者、難見捨候、與次郎を打取候鍋嶋平五郎子孫ハ、唯今鍋島主水と申候而、松平信濃守様御家老役ニ而罷在候事、

伊勢殿日帳之内天正十二年四月

一四日早朝、平田新四郎殿・猿渡越中守殿など船中ニ被來候而閑談也、(共脱カ)『下略』

『○』右之通候得者、四月迄茂越中事嶋原ニ在陣為

仕と相見得候、伊勢殿儀者、跡立而嶋原江為被差遣由候ニ付、彼地最前之様子ハ日帳ニ茂不相見得候、嶋原渡海之人数者、中書公・圖書頭殿・平田信劬・新納武州・鎌田雲州・上原長州・川上三劬・山田新助殿・額娃左馬助殿・比志嶋式部少輔殿・越中迄相見得候、此外多人數為有之筈候得共、伊勢殿日帳之内ニハ、右人数之外ニハ記付候而無之候事、

天正十二年八月

一廿六日、鹿兒嶋江参せ候飛脚帰来候、親貞・忠棟より書状到来候、先日被仰越候様ニ、無油断早々打立肝要之由也、秋月より使者返事ハ未落着候、彼是今少御相談可入子細共候間、来ル廿九日於馬越御談合可有之候、忠平公茂彼方へ御出合可有之候、其外談合衆彼方江可被揃候、拙者事茂必可罷出之由(合脱カ)上意之由也、

天正十二年九月

一日、看經等別而申候、忠棟江使進入候、今日御談合在所如何之由申候、武庫御宿たる(クカ)へき由也、亭主御酒振舞候也、聽而忠棟宿へ参事候(シカ)、新納武州・川上三州など閑談共候、忠平公より御使給候、夕より此方へ越着申候而御無沙汰候、やかて祇候可申由也、拙者社早々可参候処ニ、御使忝之由申候也、忠棟同心ニ忠平公御宿江参候、則御見参也、亭主伊東右衛門佐御會尺被申、其座躰、主居武庫公・忠棟・町田出羽守、小鞆打松尾方亭主、客居圖書頭殿・拙者、大鞆打奥山左近将監方新武州・川参州・猿渡越中守也、種々御會尺也、御點心参候、主居武庫公・川上三州・新武州・町羽劬、松尾与四郎亭主、客居麟臺・忠棟・拙者、奥山方本田刑部少輔・川上三州也、種々持参之御酒共候、此座果候(て御酒宴也脱カ)而御談合也、町羽州・税所新助御使被申候、各へ被仰出趣、此度御出勢各辛勞之通也、付而ハ秋月「此間段々仰出之趣略」左候而各假屋へ帰宿也、

【○】右之通、屹与為仕御談合之節茂越中事相勤候、其時分も御談合衆と申役目為有之と相見得候、越中事も其内ニ為被召加置と相見得候、伊勢殿日帳之内御軍談之節、毎々越中罷出候、諸所番賦など仕儀も相見得候、右之當日ニ茂 武庫公を始、御家老衆ニハ圖書頭殿・忠棟・勢州、御用人衆ニハ町田出羽守殿・本田刑部少輔殿・税所新助殿ニ而候、脇よりハ川上上州・同三羽・新納武州・越中此四人迄ニ而外ニ一人も無之候事、

天正十二年十月八日

一此日方角見償之為、三池へ新武・伊野・山田新助・猿渡越中守被差越候也、

【○】右見償之儀ハ、一方之主取をも被仰付候人之勤ニ而、外之人被相勤候儀一向不相見得候、様子ハ伊勢殿日帳之内天正十二年四月三日、神代・井福・森山邊ヲ忠長・忠棟・覚兼三人之見償ニ而

候、同年同月十日、海田表五ヶ所忠棟・兼寛兩人之見償ニ而候、天正十三年八月六日、中務殿・伊勢殿・吉利殿・鎌田雲州四人ニ而、縣・三城表見償被成候様ニと 武庫公より御意之由有之候、此類を以考候得者、天正年間見償之儀者、常式之地頭持などニ為被仰付儀ニ而者無之候、伊勢殿日帳之内右人数之外、見償為被仰付人別ニ無之候事、

天正十三年九月

一六日、此日三池境軍衆少々被差登候、伊十院肥前守・山田越前守・猿渡越中守、此衆を始諸所之衆被指遣候、宇土・隈本・大津山・和仁・邊春・小代、右之衆也、御行ハ宇津・久我なとへ、此方之衆取入、従夫山下里目邊放火させられ候而可然之談合也、左候ハ、とても江之浦・堀切之事ハ、難勤忍之由共也、然者秋月ニ取掛候豊後陳ハ、無程可引退かの由共也、

右之通、肥前殿・越前殿・越中事、筑後國御責被成候、惣主取被仰付、六ヶ所之軍衆被召附、肝要成一國を御責させ被成候儀、是又御取持之格式も為相替證據ニ而候、勢州日帳之内、他國へ屹与軍勢を被差遣候、主取被仰付候人数、天正十年十一月廿日、川上上野介殿を始、多人數有馬表知と輪城江被差向候、同十一年十月七日、堅志田邊へ典殿・圖書頭殿・忠棟・光宗・勢州を始、數十ヶ所之軍勢被召附被差越候、同十二年三月、中務殿・圖書頭殿・平田濃州を始、諸軍勢嶋原へ被差渡候、同十二年四月、北郷彈正忠殿・吉利下総守殿・伊集院下野守殿を始、諸軍勢肥後表へ被差越候、同十二年九月廿六日、典殿小代邊江出勢被成候、同十四年七月、忠長・忠棟・勢州、其外諸軍勢岩屋城へ被差向候、右七ヶ度之主取、其時分差立候衆ニ而候、右之外ニハ城責ニ付主取被仰付候儀、伊勢殿日帳之内ニハ一向不相見得候、然者越前殿・肥前殿・越中筑後國御責させ被成候儀、右之同列

24の23

を以見合候へハ、格式も為相替儀分明ニ候事、

天正十三年九月十三日

一此日、筑後表へ被差登候伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守前より注進候、昨日十二日堀切之城切崩、敵三百余被討捕之由也、各御宿へ祇候申、目出度之通申上候也、

【○】右之通、一城を攻落、大勢を打取候儀、勢州日帳之内類多クハ無之候、天正十年十一月廿日、川上上野介殿主取ニ而、知と輪城被攻落、敵二百人被打取候、同十二年八月十二日、武庫公御出馬ニ而、甲佐之困破却被成、敵數百人御打取被成候、同十四年、忠長・忠棟・勢州主取ニ而、岩屋之城を被攻落、大勢被打取候、越前殿・肥前殿・越中主取ニ而、堀切之城攻崩、敵三百余打取候、右五ヶ所之外ニハ落城仕候程之儀、伊勢殿日帳之内ニハ不相見得候事、

天正十三年九月

一十八日、筑後表へ被差登候衆より被申候、堀切切之事、各粉骨を以無吳儀被切崩候、當者江之浦之事、身上御助候ハ、城を可去渡由申候、其ことく耽落着候處ニ、一兩日前より領地沙汰(知)ニ申強、相違候、何方より御内通共有様ニ聞え候由也、將又鍋嶋飛驒守江、先日書狀以、三池境へ人数少々指登、到江之浦・堀切一行可被催由候、就夫伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守、其外餘多被差登候、相談被成、入魂肝要之由被仰候、其返書到来候、去十日之日付也、其趣、江之浦・堀切之儀ニ付、御成(連カ)連着候、然者前以可承事候處ニ、如斯候、如何候、殊ニ先城之事、俊長坊と申方、早々可打渡由候て被追拂候、就夫御届なと申理儀無之候、右之番衆へ此等之儀堅可被申候、今分ニ候ハ、案外之儀出来可仕之由也、已上各得心難仕返書ニ而候也、

同月十九日

24の25

一忠棟宿所へ深行迄我々罷居候、番盛等分別申候、又鍋嶋江書狀遣候趣、先札之返書到来候、披見候、然者堀切・江之浦行之事、心元なき由承候、曾以無納得候、其趣(故)ハ、江之浦・堀切両家之間ニ隔候而、通路不自由之通、連々承候、然者両家之為計ニ各粉骨仕、江之浦・堀切一行申候ヲ、無心元由、分別不申候、殊ニ案外出来候するなと候事、如何様之儀候哉、難承知候、兼又堀切番衆此方より指籠候事、納得候ハすハ、是ハ用捨可仕之通也、從肥前番衆被召置候事ハ、爰本ニハ曾不知由也、

【〇】右之両条、筑後責ニハ越前殿・肥前殿・越中惣主取ニ而罷立候故、鍋嶋飛驒守へ右之趣為被仰遣儀ニ而候事、

天正十三年九月

一廿六日、此日内空閑殿・城殿・伯耆殿へ、筑後表

御勝利之儀并軍衆猶々加勢之由、書状ニ而申候也、  
各御意次第人数可指登由也、  
(之脱カ)

同月

一廿七日、筑後表へ又々被差登候衆へ觸申渡候、

右之通、肥前殿・越前殿・越中殿(粉)分骨を尽、堀切  
之城切崩被得勝利候、然共大敵故急ニ不致落去候  
ニ付、右之三家ニ加勢之儀迄被仰越候、終ニハ右  
三人之軍功を以筑後一國責落候、其趣ハ此奥ニ記  
置候事、

天正十三年九月

一廿九日、堀切より新納右衛門佐書状到来候、去廿  
六日彼方へ越着候て、爰本御存分共申候、先々寶  
満・橘、筑紫殿被切取、就夫高良豊陳敗北候由也、  
(北野脱カ)  
(即脱カ)返書拙者認候而、巨細大寺大炊助各へ辛勞之御禮  
ニ指進之候間、用口上由也、大寺大炊助ニ而申候  
趣、各軍勞被成候事、山下へ御番衆被差置候而可  
(召カ)

然事、江之浦・堀切之事共也、

【〇】右之通、堀切江越前殿・肥前殿・越中相詰罷  
在候ニ付、堀切・江之浦御行之儀ニ付、新納右衛  
門佐御使ニ而御存分之趣被仰聞候、其後大寺大炊  
助を以各三人江勞辛之御礼被仰下候、筑後表之儀  
者大敵故、輒々難被責落被思召候ニ付、段々及御  
相談候処ニ入御手裏候ニ付、大炊助を以御礼迄被  
仰下候、此類之儀者、其節上井伊勢殿江御礼被仰  
下候儀有之候外ニ類無之候、但右之筑紫殿へ茂御  
礼之儀有之候、夫ハ同十月朔日、使僧を以被仰遣  
候由、是又勢州日帳ニ相見得候事、

天正十三年十月

一七日、早朝出仕申候、白濱次郎左衛門殿を肥筑表  
(重治)  
(以脱カ)御静謐御祝言申上候、并就御談合直ニ祇候之由候  
間、参上申たる由申上候也、即被成御見参、此間  
辛勞申たる由 上意也、肥筑表之様子など御尋被



成候、有佩一々申上候也、

同十月

一十六日、出仕如常、此日、從筑後表伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守被掃參、彼表之様子共被申上候也、此日茂終日御相談也、  
(談合分)

【○】右兩条を以、筑後一國肥前殿・越前殿・越中三人ニ而責隨へ靜謐ニ相納候儀、別条無之段相見得候事、

【○】天正十五年丁亥三月十五日、高野木食興山上人・一色宮内少輔兩人來リ被勸御和談を候、依之九州ニ被差向候人数御引取せ被成候、越中事も同前ニ引取、同年四月、羽柴美濃守殿日州口より被攻入、於目白坂御合戦之節、越中事茂罷立、於彼地致戦死候事、

右越中死躰ハ、家来瀬川隼人かつき候而羽月ニ来葬之候、於今ニ火葬ノ場之印羽月ニ有之候事、

信

藤七 鹿島氏養子

【文書三通有、時代引合】

【○】信豊

與一郎 掃部兵衛尉 於高麗打死、年四十四

右考ルニ

【○】掃部兵衛事、弘治元乙卯年誕生候、掃部兵衛事、羽月地頭被仰付置候、

天正十五年、肥後國合志之城主合志藏人、五十餘人之手勢ニ而、羽月ニ落來候、此儀 義久公被聞召上、訊有之候ニ付、早々可打捨旨掃部兵衛ニ被仰付候、依之被召付置候白坂式部・宇都宮次郎左衛門其外人数を催シ、同八月廿五日、藏人并相隨候湊河加賀守糺三義以上五十余人不殘打果候、藏人墓於于今羽月大聖寺ニ有之候、彼地之衆成程崇申之由候、近キ比迄肥後國より參詣之人人茂多々為有之由候、今以右之趣ハ、羽月衆中申傳茂有之候事、

征韓録卷之二之内文禄二年正月

加藤清正自<sup>三</sup>甲山<sup>二</sup>歸陣、並到<sup>三</sup>北青城<sup>一</sup>、救<sup>三</sup>相良

頼房<sup>二</sup>事、附島津義弘主之使者通<sup>三</sup>敵地<sup>一</sup>事、

【上略ス】

文禄二年正月九日、備前宰相秀家并石田三成・大

谷吉隆・増田長盛等連署<sup>(署)</sup>之書ヲ相認、此状ヲ島津

兵庫頭義弘之方ヨリ清正ハ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>相達、由被<sup>レ</sup>申ケ

ル之条、義弘主件之状ヲ請取誰ヲカ可<sup>レ</sup>遣ト思慮

之間、數根仲兵衛進テ申ケルハ、哀<sup>レ</sup>兀良哈表之

御使ヲ被<sup>レ</sup>仰付度由望申ケル故、義弘主感悦有、

雖<sup>レ</sup>然大事之使一人ニテハ覺束無トテ、今一人ハ

猿渡掃部兵衛ニ被仰付、依<sup>レ</sup>之兩人ハ鉄炮足輕二

百人ヲ召列、則金化之城ヲ發シ兀良哈表ニ急ケレ

トモ、餘寒烈數シテ、漸十日余リニ威鏡道之内甲

山ト云所清正之陣ニ參著シテ、尔々之由ヲ申ス、

清正両使ニ對面有テ被仰ケルハ、先ツ寒天之事ハ<sup>(暫)</sup>

言<sup>ク</sup>ニ足ス、十日余リ之行程敵地之真中之事、故無

ク小勢ニテ押通ラレ候之間、<sup>(余カ)</sup>最以テ武勇之至也、

誠ニ義弘ハ其人ヲ得タリトテ、深ク感歎セラレケ

24の29

ルカ、即歸陣致度事ニ候得共、兀良哈之境ニ金

山・橋中トテ、二之城ヲ築キ手勢ヲ籠置候之間、

此勢ヲ引取テ社トテ、臆而齊藤・立本・荏林隼人

佐ニ龍造寺又八郎カ勢之内五千ヲ引分【此間略】三

奉行ヨリ義弘主江使者有テ、數根仲兵衛・猿渡掃

部兵衛ヲ召テ、長途之敵地往還之間無為之条、武

勇ノ至リ智謀之賢キ故也ト深ク稱美セラレケレ

ハ、兩人時ニ於テ之面目ヲ施シ、且ハ主君之御名

ヲ辱カシメ奉ラサル事ヲ悦ヒ、且ハ身之與<sup>(體)</sup>レヲ子

孫ニ殘サン事ヲ思ヒ、喜悦之眉ヲソ開ケケル、

【○】右軍功ニ付而從 義弘公・久保公被成下 御

感状候、并石田治部少輔三成給状、左ニ記ス、

【正文存有之】

今度奥陳江從 公儀為御使、薩摩衆可申付由被

仰出候条申渡候処、無吳儀可罷越由申候、無比

類候、於致帰國、右之為軍忠知行可宛行者也、

仍状如件、

二月十九日

久保在御判

義弘在御判

猿渡掃部兵衛尉殿

(本文書ハ「旧記雜録後編二」一〇六九号文書ト同一文書ナルベシ)

【正文写有之】

態令申候、今度者遙々御辛勞、不及是非候、乍  
去仕合能早々帰陳、令祝着候、向後用事之儀候  
者承、不可有疎意候、猶三郎兵衛可申候、恐々  
謹言、

石治少

二月廿九日

三成判

敷根中兵衛殿

猿渡掃部兵衛殿

御宿所

【〇】右之通、義弘公御意を以、御家中者ながら

公義直之勤を茂仕候儀訳相替候、

掃部兵衛事、慶長三年十一月十八日、朝鮮より

御帰朝之節、於唐嶋番船ニ切乗戦死仕候、其後掃

部兵衛後家五代右京入江従道友慶女義久公折々御使被成下、

代々戦死仕候筋目ニ而候処ニ、嘆一篇ニ而罷在候

儀、家之為ニ茂罷成間敷候間、身本をあらし不申

罷在、家を茂取立申候様ニ可心掛旨被 仰下、御

一臺よりとしてべにおしろい等を茂被下候、此儀

者加治木江罷在候大村市兵衛家之記録ニ書載有之

候、右之記録者先年市兵衛より御記録所江差出置

候、代々戦死之儀者、筑前・刑部・与市左衛門・

越中・掃部兵衛・与次郎迄六代引續戦死、与市左

衛門弟与一兵衛茂戦死ニ而候、如斯引續候而之戦

死ニ候得バ、忠義他事無之為差立儀故、死跡之後

家ニ至ル迄茂右之 御意、誠ニ以難有仕合ニ奉存

候事、

與二郎

於肥州打死、二十二、

【〇】右考ルニ

与二郎事、永禄六癸亥誕生、天正十二甲申於肥前

國戦死候段々ハ、越中信光譜之内ニ記置候事、

【〇】與三

掃部兵衛尉事、無男子候故跡續被仰付候、

右考ルニ

【〇】與三事ハ、中納言様御供仕、高麗江罷渡候、此儀者先ノ洲邊良右衛門書付之内ニ茂相見得候、直ニ関ケ原江茂致御供候、兄之掃部兵衛尉男子無之故、与三ニ跡目被仰付候事、

【〇】與三事、栗野地頭職被仰付置候、惟新様帖佐江被成御座候節、彼地ニ罷在候、与三女子兩人有之候処ニ、兩人共ニ眼病を相煩、已兄弟共ニ盲目ニ罷在候、与三事も病氣差起リ、其後ハ然与御奉公茂不罷成、其外不幸共有之、与三代ニ至リ、先祖以来之知行所山野村之高を茂漸々致沾却、後ニ者常式之知行所ことクニ罷成リ、養子喜右衛門江高四百八十石致附屬候、元和之末寛永之始之高帳ニハ、三百七十石餘ト相記高所江有之候事、

女子

女子

【〇】信綱

喜右衛門

【〇】文禄三甲午年誕生、

【〇】信綱事者、日野内膳入道恕嚙嫡子ニ而候、義弘公御側御小性(性)ニ被召仕候、或夜於御前睡を醒候儀ニ付、若年ニ為勝仕業有之候を被遊御覽、器有者ニ而候間、忠恒公江可被召付旨、段々御意之趣御座候而、日野家乍嫡子猿渡家養子ニ被仰付候、此儀野間孫兵衛殿于今承傳之趣茂有之候事、

但孫兵衛覺之趣、別紙ニ記置之候也、

【〇】薩州山田之地頭被仰付置候事、

(本系図ノ野線ハ朱書ナリ)

25

通考大意

一私家者猿渡家嫡流ニ而、喜右衛門信安迄二十二代無断絶致連續候、元祖藤三郎信元者、比企判官能員之為ニ

者甥ニ而、乍恐 忠久公江御由緒御座候、嫡子太郎信景・二男藤四郎實信父子三人共 頼朝公江奉仕候事、

一 藤三郎信元事ハ、東鑑十五卷之内建久六年三月十日、

南都東大寺御供養ニ付、 頼朝公御上洛御供之列ニ相見得候、御國ニ罷下候而茂、代々猿渡藤三郎与名乘リ申候、此儀ハ系圖迄ニ而茂無之、觀應元年從 貞久公大藏之頼平ニ被下置候御文書ニ茂相見得候、然者東鑑与頼平江之御文書并系圖之表三方引合致封合候、東鑑之内ニ茂関東ニ而何某与有之候人、御國江罷下候而何某与名乘候なと申候而、不分明家茂有之由ニ候、私家之儀者東鑑ニ相見得候者、則御國ニ罷下候而致連續候儀、無其紛分明ニ候事、

一 藤四郎事、 忠久公御初入部之節、從 頼朝公被召付御劍之役仕、御家老職ニ而罷下、守護代を茂相動申候、御供之三家与今以世俗之唱ニ茂有之候儀ハ、棟梁ニ而差立為罷下者故、右之申傳有之、證據分明与存候、其後ニ茂代々御家老職相動候儀家傳ニ候得共、時代相知不申候、未旧記ニ茂見當リ不申候、考候ニ、實信より

信高迄相動候哉、又者信重・信忠此間ニ茂相動候哉与相考候、此儀者旧記等見合、追而可相究候、信高より 本田貞親ニ 御劍之役を相讓候儀、系圖ニ相見得候、是を以考候ニ、御劍之役之儀者、関東ニ而 將軍家屹立 出御之節者、必執權職之人被相動候、然者 忠久公三州 御初入部之砌、実信 御劍之役相動候儀者、御家老職之證據ニ而候、信高迄茂御家老職ニ而候処ニ、能員隱謀之後鎌倉之御供不相叶候故、御家老職 御劍之役難相動事ニ成立、御劍之役ハ貞親ニ相讓為申与相考候事、

一 忠久公より五百年來之御譜代ニ而、終ニ奉背 御家候儀無御座候、不義を企候者、大家ハ自ラ乱を起シ、小家ハ大家ニ與シ致御敵對候、大家小家共其例多々有之候、當家ハ一度も不相背證據ハ、只今迄何れ之旧記ニ茂猿渡家為奉背 御當家儀相見得不申段分明ニ候事、一 代々一所之地を被下置候儀者、通考之通末吉を領、庶流村山を領地致シ候、末吉ニ村山名有之候儀、古キ高辻帳ニ茂相見得候、且又應永年間之旧記ニ一所を領候

面之、一列之内ニモ猿渡家相見得候、其後隈之城を領候、同所西手之内被下置候、御文書頂戴、彼地ニ罷在候儀ハ他之旧記ニ茂相見得候、一所を領候證據分明ニ候、加世田を為領儀も有之候由申傳候得共、此段ハ時代分明ニ無之候事、

一代之、勅武功候段之趣、旧記ニ相見得候通曆然ニ候、戦死之家ハ其数を不知有之事ニ候得共、六代引續候而之戦死ハ、別而類多キ儀ニ而茂有之間敷様ニ存候事、

一越中事、天正年間段之武功、通考之通ニ而候、三人ニ而筑後國を攻落候儀差立為申事与存候、且又越中一手を以鍋嶋加賀守与合戦之次第、是茂多勢有者之證據ニ而候、三池之見賦ニ茂被遣候、上井伊勢殿日帳ニ相見得候、右之一列を以見合候ニ、或一城を攻落、或諸所之見賦ニ被遣候人数、天正年間伊勢殿日帳ニ相見得候類を以、兩条共差立為申事ニ而候事、

但小湊を被下領候儀、其後羽月之内山野村ニ御繰替之儀、一所之列ニハ相究間敷哉、乍然常式之知行所ニハ可相替候哉与存候事、

26

一掃部兵衛事、於高麗 義弘公御意を以、從 公義直之御使相勤候、御家中者ニ而直參之勤、殊又於吳國右之勤、是茂差立為申儀欵与存候事、

一与市左衛門事、幼少之砌迄者隈之城ニ罷在、其子越中より私祖父喜右衛門迄引續ニ而、諸所地頭職被仰付候事、

「元禄十四年」  
巳十月

右之通考家譜一冊・同大意一通、御記<sup>(録)</sup>所江差出、御用相濟被返遣候、已上、

一進藤刑部大輔より九月十八日之状を以被申越候者、

「正文有」  
依好便一書令啓候、弥御清勝御勤給候哉、承度存御事、然者當夏御願望有之候御家御由緒之御證書之被仰上候、右之写有無ニ随候而、御文言思召入有之間、可相尋之由、依御内意如此候、委細之儀者蓮光

院可有御演說候条、不能多端候也、恐々謹言、

進藤刑部大輔（奥之）

【元祿十四年】  
九月十八日

名乗判

猿渡喜右衛門様

一右ニ付、進藤形部大輔江之返状并覺書差越候、左記之、

九月十八日之御奉書 謹而拜見仕候、先以 御両公

并大納言様益御機嫌克被為成御座之旨、恐悦之至ニ  
奉存候、然者私先祖ニ從 基通公藤原之御姓被下置

候義ニ付而、從 龍山公私六代之祖猿渡越中信光ニ  
御證書被成下置候処、御本書私祖父代ニ燒失仕候、

依之右 御書之写、若他家ニ茂有之候者可差上由  
御内意之旨被仰下奉承知候、右之段蓮光院より茂委

細申聞せ忝次第奉存候、写之儀段々相尋申候得共、  
見出不申候、委曲蓮光院より可申上候間、可然様御

沙汰奉頼候、恐惶謹言、

猿渡喜右衛門

【元祿十四年】  
十一月廿一日

信安判

進藤刑部太輔様

覺

一私家之元祖猿渡藤三郎信元より二代猿渡藤四郎實信

ニ從 基通公藤原之御姓を被下置候儀ニ付而、乍恐  
先頃諸大夫衆迄奉願候処、 関白公被達 高聴、御

先代様より被下置候例を以、 御證書被遊 御染筆  
可被下通 御許容之旨拜承仕、甚冥加至極難有奉存

候、然ハ從 龍山公私六代之祖猿渡越中信光ニ被下  
置候御證書燒失仕候、右之写相殘有之候者可差上旨

奉承知、写之儀段々相尋申候得共見出不申、残念之  
至無是非仕合奉存候、

一龍山公被下置候御證書者、猿渡越中信光御宛書之  
御直書ニ而御座候、右之 御本書者、薩摩守記録方

申付置候吉岡宮内与申者拜見仕、其趣系圖ニ記置申  
候、其後燒失仕候御文章之儀者、系圖ニ茂相記不申

候、宮内事、近キ比迄者存命ニ而罷在候、

一御證書此節頂戴仕候者、子と孫とニ至難有仕合可奉  
 存候、先祖共ニ藤原之御姓御恩免被遊候次第者、薩  
 摩守太祖豊後守忠久、基通公御猶子ニ被遊候故、  
 忠久姓を藤原ニ被改候、此時始而猿渡藤四郎實信ニ  
 藤原之御姓を被遊御恩免候旨、從 龍山公右之越中  
 信光ニ 御直書被下置候処、私祖父代ニ火災有之、  
 燒失仕候故、此節御證書被遊御改被下置之趣を以、  
 被遊 御染筆被下頂戴仕候様、乍恐奉願度存候、右  
 之旨成合於申儀者、諸大夫衆迄申上度奉存候、以上、  
 元禄十四年十一月廿一日 猿渡喜右衛門信安

當家之古系圖并吉利治部(忠名)添證文可差出候、此外帖佐衆  
 中猿渡仲左衛門家相分候趣可申出由、元禄十四辛巳年  
 十一月、御記録所より被仰渡候、依之書付指出候留、  
 左記之、

覺

一私家之古系圖并吉利治部より之添證文、且又帖佐衆

中猿渡掃部家相立候訳、勝目助左衛門より遣候覺書  
 を茂可差出旨被仰渡候間、右之品と差出申候、就夫  
 者右之掃部家相分候訳書付可差出由承知仕候、依之  
 委細之趣、左ニ申出候、

一掃部一筋猿渡仲左衛門家之儀者、私五代之祖猿渡掃  
 部兵衛信豊娘一流ニ而候、信豊事者、慶長三年十一  
 月十八日、於高麗致戦死候処、男子無之候ニ付、弟  
 與三事信豊跡目ニ被仰付致連續候、右娘之儀者、信  
 豊先室伊地知越中娘之腹ニ致出生候、信豊戦死之節  
 者十三才ニ而候、信豊後之室ハ五代右京入道友慶娘  
 ニ而候、右之女子先腹ニ而、殊更信豊一子之事候故、  
 與三より可取立心入を以、川上兵部左衛門二男小市  
 郎を乞請、右之娘ニ取合せ、持高之内百斛指分ヶ遣、  
 猿渡を為名乗、二男家ニ取立為申一流ニ而御座候、  
 一勝目助左衛門より被遣置候書付者、猿渡少左衛門室  
 覺之筋ニ而候、少左衛門室者信豊娘之腹ニ出生之子  
 ニ而候故、能為被存ニ而可有之候、助左衛門室ハ少  
 左衛門室之腹ニ出生之子ニ而候、助左衛門書付ニ我



等と相記有之候者、少左衛門室之事ニ而候、巳ノ九月と有之候者、延宝五年ニ而御座候、

已上

【元禄十四年】  
巳十一月廿三日 猿渡喜右衛門(信安)

【元禄十四年】  
六月十二日  
一右ニ付、於京都蓮光院より口達ニ茂被申聞候者、藤原

氏御由緒之儀ニ付、喜右衛門より奉願候趣御座候而書付差上申候由、 関白様江先御内意ニ而申上候処ニ、

右之通従前代由緒有之候ハ、御文庫御見合之上 御

證書を茂可被下候間、表方江相付申出候様ニ与 御意

候ニ付、進藤刑部大輔を以表方より申上、右之書物を

茂差上候処ニ、前代より御由緒有之儀ニ候間、此節

御證書可被下旨、刑部太輔を以被仰出候、此段ハ先刻

書付差越候、来ル十四日十五日之間御礼参上仕可然由、

被申聞候事、

一右ニ付、同日於伏見御屋敷吉田右衛門次郎于時御納戸奉行役相

付達 貴聞候者、私家筋之儀ニ付、今度於江戸乍恐御

内意奉伺候趣共御座候処ニ、家筋之儀を茂被 聞召上

被下、且又 近衛様御方江申上候儀共被遊 御免許被

下、旁に難有仕合奉存候、最前粗申上置候通、 近衛

様御方ハ蓮光院を以諸大夫衆迄申上候処ニ、前代よ

り御由緒有之儀候間御許容被成、御證書可被下由、進

藤刑部太輔を以被仰出候由、蓮光院より申聞候、右之

為御礼 近衛様御方江参上仕度奉存候、蓮光院よりも

其通ニ申候、乍然何様ニ可有御座候哉、何分ニも 御

意次第ニ奉存候由申上候得ハ、右之趣被 聞召上置候、

爰元見合候而御礼ニ参上仕可然旨被仰出候事、

一六月十三日、 綱貴公京都江 渡御、依之御家老新納

市正殿・御用人猿渡喜右衛門諸事為見合、同十二日之

夜九時、伏見御屋敷罷立、京都四条之御屋敷江参着、

但 中将様御供、十二日ノ夜七時御供可相揃旨被仰

渡之候事、

一綱貴公、同日卯ノ下刻、京都御屋敷江 入御、則諸司(所)

代松平紀伊守様江被遊御見舞候、御供之行列如常、御供之

吉田右衛門次郎直ニ平松宰相様江被遊 御見舞、於彼御宅御

料理被召上、且又被遊 御支度替候御狩衣・御直垂事、

一 御家老新納市正殿、御用人野村太左衛門・猿渡喜右衛門此三人者、御跡より平松様御屋敷江参上可仕候、彼御方ニ而布衣着用仕、近衛様江御供可相勤旨、兼而

於伏見被仰付置候、其通十三日之朝、紀伊守様江被遊

御見舞候、御跡より右三人平松様江参上、御小納戸二

階堂出右衛門・美代五郎兵衛追々平松様江参上候、先

キニ被遊 御入被成御座候、市正殿・太左衛門・喜右

衛門・權兵衛・右衛門次郎・出右衛門・五郎兵衛江二

汁五菜之御料理被下之候事、

但喜右衛門供廻リ、先供五人、駕籠廻リ四人内二人ハ与力、

手籠本、挾箱肴荷、長柄笠本、同添馬疋間中

二、杏駕籠一、合羽加籠二荷、草履取老人、陸尺

六人、上下合式十五人、

一 平松様迄参上候、支度無地カチン帷子・同半上下、但

先供黒羽織、駕籠廻リ上下着候事、

一新納市正殿・野村太左衛門・猿渡喜右衛門事、布衣着

用、但鳥帽子・未廣、下御目附上村權兵衛、御納戸奉行吉

田右衛門次郎、御小納戸二階堂出右衛門・美代五郎兵

衛、此四人ハ兼而 近衛様江御目見ハ無之筈候処ニ、

蓮光院より内々御取持仕候由、其朝俄ニ御目見を茂被

仰付候様ニ与 綱貴公思召茂御座候ハ、其通ニ可被

仰付由御内意御座候、御則答ニ被仰上候者、此方よ

り願ニ者難申上候、御目見を茂被仰付候ハ、忝存候由

被仰上候、依之權兵衛・右衛門次郎・出右衛門・五郎

兵衛布衣着用仕、御供相勤之、但兼而者權兵衛・右衛門次郎兩人ハ無地カチン帷子、

同長上下着用ニ而御供之筈、出右衛門・五郎兵衛事、無地カチン帷子、同半上下着用候テ御供之筈ニ候事、

一九時、御所江被遊 御見舞候、御供如常、上村權兵

衛・吉田右衛門次郎・二階堂出右衛門・美代五郎兵衛、

各布衣着用候而御供、其外御先キ御供・御駕籠廻

リ御供之面々、何レ茂人数如常御先十人、御、駕籠廻リ八人、御先御供

十人上下着用、御駕籠廻リ六人素袍・鳥帽子着、外二

人ハ布衣但二階堂出右衛門、各着衣ハ二重染ヲ可禁旨、兼美代五郎兵衛、兼

而被仰渡置候、此外同勢之内白丁着候者如常ニ候事、

一新納市正殿・猿渡喜右衛門・野村太左衛門事、御備御

跡より引下リ御供仕候、市正殿・喜右衛門・太左衛

門・權兵衛・右衛門次郎・出右衛門・五郎兵衛、何レ  
茂御玄喚より内ニ入、御番所与御寢殿之間廊下ニ伺公  
仕罷在候事、

一 御太刀 一腰宛 御馬代銀杓枚宛

右 関白様・右府様・大納言様江

新納市正

一 御着代三百疋ツ、

猿渡喜右衛門

右 品宮様江

野村太左衛門

右之通、三人より銘々進上仕候、市正殿進上物首尾ハ、  
御步行本田五右衛門相勤候、太左衛門・喜右衛門進上  
物之首尾ハ、御步行春山孝左衛門相勤之、御玄喚ニ而  
御番之人被相受取之候事、

一 於御寢殿御規式御座候、御雜煮・御吸物右、終日於御寢  
先ツ出申候由

殿市正殿進上之御太刀備 御前御礼、奏者諸大夫長上  
下着

次野村太左衛門進上之御太刀備 御前御礼、猿渡喜右

衛門進上之御太刀備 御前御礼、奏者右同前事、

一 上村權兵衛・吉田右衛門次郎・二階堂出右衛門・美代

五郎兵衛事も右之同席ニ而御目見、何ぞ進上之品無之

候事、

一 関白様・右府様・大納言様、主居之方ニ被遊 御着座  
候、御客居右御三公より少引下リ程ニ 中將様被遊

御着座候、各御礼所者御末座之縁涯より内ニスヘリ入、

御上面ニ向候テ御礼申上候、 御三公者御横ニ被遊

御覽候、御座之圖別紙ニ有之候事、

一 進上之御太刀ハ三腰トモニ一度ニ備 御前、一度ツ、

罷出御礼申上候、但家筋ニ付而罷出ル儀ニ候ハ、野

村太左衛門・猿渡喜右衛門ト可罷出儀ニ而無之候得共、

役儀ニ付而ハ先役ニ而候、尤今日茂御役ニ付而罷出ル

儀ニ候故、家筋之訳無之、御役之前後を以罷出候、後

年為見合如此ニ候事、

一 右之御規式終而、綱實公御装束被召替、御長上下被

遊御着候、依之何れ茂支度可相替旨、蓮光院を以 御

意候、則市正殿・太左衛門・喜右衛門・右衛門次郎・

權兵衛、無地カチン帷子・無地カチン長上下着用、出

右衛門・五郎兵衛事ハ、無地カチン帷子・無地カチン

半上下着用仕候、各御寢殿次之間罷通候、諸大夫來其

外罷出挨拶有之候事、

一 綱貴公右之奥之御書院江被遊 御通候事、

一 於御寢殿之御礼終而、市正殿・太左衛門・喜右衛門事、

御寢殿より奥之座ニおひて 大納言様江御目見、上段

ニ御着座、一人宛罷出御礼、御口取 但熨斗錫、白木  
三方ニ請ル 被下

之候事、

一 右終而、御寢殿次之間ニ而新納市正殿、其次之間ニ而

野村太左衛門・猿渡喜右衛門・上村權兵衛・吉田右衛

門次郎・二階堂出右衛門・美代五郎兵衛同席ニ而、御

料理被下之候、市正殿座、太左衛門・喜右衛門杯之座、

何れ茂同前、二汁七菜之御料理被下之候、市正殿座、

相伴今大路治部少輔、太左衛門・喜右衛門杯之座、相

伴立野内記、御銚子三篇、御菓子・御茶出ル、後菓子

瓜、間之菓子饅頭、御後段素麵・御吸物被下之候事、

一 中将様御事、 大納言様御案内ニ而御庭被遊 御見物

候事、

一 新納市正殿・野村太左衛門・猿渡喜右衛門江立野内記

を以被仰聞候者、何れ茂罷出御庭見物可仕候、 春日

之宮江茂参詣可仕之旨被仰下候、喜右衛門御請ニ申上

候ハ、難有仕合ニ奉存候、御礼之儀者宜様ニ頼存候、

左候而内記迄噂ニ仕候者、御庭ニ罷出候儀 薩摩守不

承候得ハ、早速者拜見難仕候由申候、尤市正より茂相

應之御受被為申候、則内記より右之趣達 上聞候由ニ

而、又ニ承候ハ 中将様江茂被 聞召上候、何レ茂罷

出見物候様ニとの 御意候間、見物可仕由被申聞候、

市正殿・太左衛門・喜右衛門・權兵衛・右衛門次郎・

出右衛門・五郎兵衛御庭ニ罷出、方々見物仕候、右内

記其外案内之人茂被罷出候、今大路治部少輔茂被罷出

候、春日宮江茂参詣仕候、此時案内之衆噂被申候者、

此 神前之藤 但建仁寺  
藤ナリ、唯今不時花有之候、如此當家吉

事有之、祝事之節ハ必花咲申候、其例無別儀由被申候、

誠藤花盛之様ニ相見得候、各奉感候事、

一 右見物相濟候而、後ニ蓮光院より喜右衛門ニ被申聞候

者、春日宮参詣御庭見物之儀ニ付、立野内記より御

内意被申上候節、從 関白様、猿渡者藤原氏ニ而候、

春日江参詣可仕儀ニ候由 御意候、其後何レ茂御庭見

物ニ罷出、御目通罷通候節、 関白様被遊御覽、猿渡

之儀者、御先祖様より藤原之姓を被下置候、右由緒被聞召届、重而御證書可被下置候、中將様江御咄御座候、先以目出度存候、先早々為御知御祝儀申候由、被申聞候事、

一右之御座ニ而御案御興行被遊候、何レ茂罷出拜聴可仕旨、蓮光院を以被仰聞候、市正殿・太左衛門・喜右衛門・權兵衛・右衛門次郎・出右衛門・五郎兵衛罷出御殿後之縁ニ拜聞之仕候、御案三番、各伺公、

○御笛関白公 ○籥平松宰相様 ○和今山科修理權亮様

一右終而、又々御寢殿次之間ニ伺公、各同前、此時進藤(刑)形部太輔より喜右衛門江被申聞候者、御先祖江藤原氏被遣候御由緒之儀ニ付、從 関白殿證書を被遣ニ而可有御座候、近年者江戸江御断被申筆を被差置候得共、此儀者各別之事ニ候間、追付證書被相調、從是可被差越候、御先祖江從 龍山殿被遣置候證書本書者燒失為仕由候、右躰之書付ハ写等有之物ニ而候、若于今相殘儀茂有之候半、御見合被成有之候ハ、御書写被遣度候由被申候、則答ニ申候ハ、御證書御筆を被染可被下

旨、頂上難有仕合奉存候、弥以宜様ニ御取成頼存候、龍山様御書之儀者、仰之通御本書者燒失仕候、写之儀茂段々見合候得共、唯今迄ハ相見得不申候、乍然罷下候而此上見合申、萬一写相殘有之候ハ、則差上可申由相達之候事、

一日入前被遊 御立候、上村權兵衛・吉田右衛門次郎・二階堂出右衛門・美代五郎兵衛御供、新納市正殿・野村太左衛門・猿渡喜右衛門事、御跡より御暇仕、中途迄參候而、半上下無地着カチ用候而引返シ、又々御所江參上仕、今日之御礼申上置退出候事、

一今日於御所兩度御礼ニ罷出候、野村太左衛門・猿渡喜右衛門与罷出候儀、家筋ニ付而者右之次第ニ而ハ無之候、喜右衛門・太左衛門与罷出答ニ候得共、當御役ニ付而者太左衛門事ハ先役人ニ而候、且亦老人ニ而候、依之常式御用等ニ付而者、喜右衛門致遠慮、物毎太左衛門次ニ喜右衛門相勤候、今日ニ至リ家之沙汰を申立、喜右衛門先達而罷出候儀茂如何ニ候、今日者御役ニ付而之勤ニ而候得ハ、太左衛門罷出候次ニ喜右衛門罷出

候儀、可然与致了簡、右之通ニ候、至後年疑茂可有之儀ニ候間、此段記置候、家筋ニ付而者、太左衛門家与者各別之訳ニ而、太左衛門引次ニ罷出ル家筋ニ而者無之候事、

一 伏見江被遊 御帰館候而より、夜入野村太左衛門・猿渡喜右衛門・上村權兵衛・吉田右衛門次郎・二階堂出右衛門・美代五郎兵衛相中より申上候者、近衛様御縁中以後初而今日被遊御見舞候処ニ、御首尾好御座候、乍恐目出度奉存候、依之奉祝御酒看但御手樽一荷 鯉一折右之面ニ御前ニ被召出候而、御酒宴御賑成御事ニ而御座候、私江 御意候者、今日 関白殿より喜右衛門家筋ニ付而御證書可被下由御挨拶被成候、首尾能結構成ル事候旨 御意候間、偏ニ 御威光迄を以右之仕合難有奉存候由申上候迄ニ而退出仕候処ニ、又々被召出、御酒宴御座候、夜明前退出仕候事、

一 同月十四日、河野造酒允を以達 貴聞候者、一昨日奉伺候通、近衛様御方へ弥罷出申度奉存候、明十五日ニ者爰元被遊 御立候御事ニハ御座候得共、御暇被下

候ハ、京都へ参上仕相仕舞、御跡より大坂へ参上可仕候、併何様ニ可仕候哉之由申上候処ニ、則造酒允此時御小納戸役を以明日 近衛様御方江罷出、相仕廻次第大坂江可罷下旨 御意候事、

一 同月十四日、於伏見就 御用御前江罷出候処ニ、御意候ハ、昨日從 関白殿喜右衛門へ家筋ニ付而之證書可被下由、御挨拶ニ而候与 御意候、申上候ハ、難有仕合奉存候、右ニ付而只今河野造酒允ニ而奉伺候通、弥明日京都へ罷登申候而相仕廻、御跡より大坂へ参上可仕候、明日者 関白様江御太刀銀馬代・二種一荷、右府様へ御太刀銀馬代・御樽代五百疋、大納言様へ御太刀銀馬代・御樽代五百疋進上仕度奉存候、此外諸大夫五人江茂相應ニ看代少々ツ、遣申覚悟仕置申候、右之通ニも進上可仕候哉、品宮様へも昨日最早進上物仕候間、明日者御着代ニ而茂進上可仕候哉之由申上候得者、関白殿父子間ニ者右通之進上物ニ而可然候、品宮江者昨日進上物仕候、此節ハ表方ニ而 関白殿江之御礼ニ候得者、品宮殿へ何ぞ進上仕候ニハ及間敷

旨 御意候事、

一同月十五日、京都へ罷登候、未明伏見御屋敷候、蓮光

院案内ニ而御所江罷上候、長上下、着用進上物左記之、

○御太刀銀馬代 干鯛一折 昆布一折 御樽一荷

右 関白様江

○御太刀銀馬代 御樽代五百疋

右 右府様江

○御太刀銀馬代 御樽代五百疋

右 大納言様江

右御目録様真尤進上書名乗迄相記候也、

○看代二百疋 樽代三百疋

右進藤刑部太輔江

○看代二百疋ツ、

右進藤筑後守・今大路兵部太輔・同治部少輔・

齋藤左京大進江

一右品々相納候、喜右衛門事、御玄喚より罷通、御寢殿

次之末之間但一昨日罷出候座次之間伺公、諸大夫衆各被出合候、追

付奥之御書院ニ而 御目見、御太刀・二種一荷御前ニ

相備之御礼申上候、御口取被下之、奏者諸大夫衆終日、

関白公入御、則 右府公出御、御太刀・御目録御前相

備之御礼、御口取被下之候、奏者同前終日、 右府公

入御、則 大納言出御、御太刀・御目録御前相備之御

礼申上候、御口取被下之候、奏者右ニ同終日、入御、

喜右衛門事、右之座ニ罷通候、筑後守・兵部太輔・形

部太輔・治部少輔・左京大進江被罷出、祝儀物之一礼

被相伸、何角与挨拶ニ而候、御雑煮・御吸物・御引看

ニ而御酒數篇被下之候、相伴進藤形部太輔、右諸大夫

五人罷出取持半ニ、從 関白様進藤筑後守を以被仰下

候者、喜右衛門殿先祖江藤原氏を被遣置候由緒之儀、

兼而被聞召置候、於御所茂御系譜等及御沙汰候処ニ、

右之由緒無別儀候間、御證書を茂可被遣候、近年ハ江

戸江御断之上、不被染御筆ヲ事ニ候得共、此段者御先

祖以来之御由緒一筋ニ候得者、別段之儀ニ候間、追付

御證書被相調候而可被遣候、此儀申達候様ニとの御事

ニ候由、筑後守ニ而被仰聞候、御請ニ申上候ハ、私先

祖共江藤原之御姓を被下置由緒ニ付而、乍恐御内意を

以各迄奉願候趣御座候処ニ、屹与達 高聴、御證書殊更被染御筆可被下旨被仰下候之趣奉承知、難有仕合忝次第ニ奉存候、子ニ孫々ニ至リ冥加至極奉存候、御請御礼之儀者各迄申上候、何分ニ茂宜様ニ頼存候由申上候事、

一 及暮致退出候、直ニ進藤形部太輔所迄見舞、相應之礼儀相伸候事、

一同日之夜入伏見罷立、同十六日四時過大坂へ参着候、就 御用御前江被召出候、 近衛様ニ而 御目見被仰付候次第、一々申上候事、

一 右ニ付、從 中將様蓮光院を以 関白様江御礼被仰進候由奉承知之候事、

一 右ニ付、吉田右衛門次郎を以<sup>大坂御滞在之内なり</sup>奉伺候者、私家筋ニ付於江戸達 貴聞、忝家之系圖を茂奉備 御覽、

且又 前近衛様より私先祖江藤原氏被下置候由緒之趣、當近衛様江申上候儀を茂被遊御免許被下候ニ付、 関白様江申上候処ニ、御自筆之御證書を茂可被下旨被仰聞置候、此段者乍恐以 御威光願之筋相調申候、旁以

難有仕合奉存候、此等之御礼申上度奉存候由申上候而、御手樽一荷但白木鯉一折<sup>二本、受</sup>進上之仕候、則御前江被 召出、御酒被下之候事、

一 右ニ付、已八月、吉田右衛門次郎を以御内意奉伺候へ、先比於江戸私忝家之由緒書を茂被遊 御覽被下、難有仕合奉存候、 近衛様御方江茂藤原氏被下置候由緒蒙御免許申上候処ニ、御證書を茂可被下由被仰聞置候、是又偏 御威光迄を以右之仕合、旁以忝次第奉存候、依之乍恐奉祝御膳進上仕度奉存候、御序次第御奥ニ而成共、常盤谷ニ而成共、其段者何方ニ而成共 御意次第進上仕度奉存候由奉伺候処ニ、奉願候通可被遊御請候、併當分ハ段々 御隙入之御事候間、来月入候而右衛門次郎より可相伺旨 御意候由、右衛門次郎より被申聞奉承知之候事、

一同十月、吉田右衛門次郎より被申聞候者、右ニ奉願候儀段々之 御隙入御續キ被遊候、頓而田布施江可被遊御越候、其節彼方ニ而可被 召上旨 御意候由奉承知之、則御礼申上候事、



一 同年十二月十八日、田布施於 御假屋御膳進上仕候、  
前以相良市郎左衛門于時御納を以奉伺候、此節之儀  
者、乍悴家家筋由緒之儀を茂達 貴聞候処ニ、由緒書  
被遊 御覽被下、次ニ者 近衛様江之由緒書之儀茂、  
御威光迄を以首尾能御座候、旁以難有仕合ニ奉存候、  
就夫乍恐輕キ御膳進上仕候、右訳ニ付而之折目ニ御座  
候間、私夫婦・同名監物夫婦より御太刀・御着等進上  
仕度奉存候由申上、進上物品ニ書付差上之申候、則達  
貴聞、奉願候通面々心次第進上可仕旨、相良市郎左衛  
門を以被 仰出候、左記之、

御太刀銀馬代 御着代百疋 御樽代二百疋

猿渡喜右衛門

御太刀銀馬代

猿渡監物

御着代二百疋

猿渡喜右衛門

御着代百疋

猿渡監物

内

一 右之通、野村太左衛門于時御用  
人役也御取次ニ而進上之仕候、  
喜右衛門・監物兩人、同内より之進上目録調様如常、

御膳之儀者三汁七菜、御假屋御奥ニ而被 召上之候、  
御相伴嶋津又四郎殿・嶋津大藏殿、御銚子三篇、嶋臺  
上ル、此時於 御前、野村太左衛門御取次ニ而段々拜  
領之仕候、左記之、

青銅三百疋

猿渡喜右衛門

同 二百疋

猿渡喜右衛門

同 百疋

猿渡監物

同 百疋

猿渡監物

内へ

右、何れ茂御目録拜領之仕候、御奥之儀ニ御座候故、  
喜右衛門四度罷出、拜戴之仕候事、

一 喜右衛門事、被 召出 御盃頂戴仕候、御取着迄被下  
之候、喜右衛門盃 御前江被召上之候、喜右衛門謠を  
と 御意候、則謠申候、御取着進上之仕候、御座ニ相  
詰罷在候、段々御丁寧之 御意共ニ御座候、難有仕合  
奉存候、夜入九時過退出仕候、同名監物事茂始終相詰  
申候、為 御名代嶋津又四郎殿御表江御出被成、監物  
江御酒被下之候、

但今日茂阿多御茶屋江被遊、御入候ニ付、同名監物事、彼方江相詰申候、御齋斐切進上之仕候、御機嫌能被遊、御立候、御跡より監物事、田布施御假屋へ參上仕候事

一同月十六日、阿多御茶屋江被遊、御入候節、御意候ハ、監物事、明年江戸へ被召列候、監物ニ而ハ御縁者之御方へ御使者相勤候節相障候間、改名仕可然候、酒井右京殿小舅三浦監物殿ニ差合候、監之字を付候者者跡々を見合候得、何レ茂悪敷候、現に色々之怪事有之候、監物・監助・監之助杯と付候者ハ能無之候間、必相替リ候而可然旨、御意候、喜右衛門奉承知之、御直ニ申上候ハ、御意之旨難有仕合奉存候、監物事、則名を相替リ可申候、藤三郎与申名家名ニ而御座候得共、三郎与名付申候儀恐多奉存候、其子藤四郎与申候者、御國江御供仕罷下リ申候、監物事茂藤四郎与改名為仕申度候由申上候得バ、藤四郎ハ些若カ過候名ニ而候、名ハ毎々相替ル物ニ而茂無之候間、藤右衛門与成リ共、藤左衛門与成リ共、藤兵衛と成共、差合無之名を相考候而相替リ可然旨、御意候間、申上候ハ、左様ニ御座候ハ、御意之通藤右衛門与改名為仕可申由申上候

得バ、名之儀者家ニ嫌候名茂有之事候間、先ッ得与相考候而申出可然旨、御意候、此時鳴津又四郎殿御供ニ而御座ニ御參候而御座候事、

一右之通、猿渡監物信方事、於阿多藤右衛門与為被下置儀ニ候得共、是ハ御内證之儀ニ御座候故、同十二月廿五日、御家老嶋津助之允殿、御當番高橋七郎右衛門種周于時御用人取次ニ而、同名監物事、藤右衛門与改名被仰付被下度由口上書を以申出候処、則達、貴聞、藤右衛門与改名可仕旨被仰出候、為御礼御太刀進上仕候、改名之節者御連枝方一所列組頭列茂御太刀迄を進上候、古例ニ候故、藤右衛門事茂右之通ニ候、尤始而之、御目見、又ハ屹与立候折目ニ候ハ、御太刀・二種一荷進上之筈ニ候得共、此節ハ餘例之通ニ候事、

一今月十八日、於田布施御膳被召上候御礼并同名藤右衛門江名被下候御礼、并今月廿六日藤右衛門江御能被仰付候、此三ヶ条之為御礼、同月廿八日北郷右衛門八御取次ニ而御樽看進上仕候事、

一龍山公御書写、唯今迄ハ無所見候由、進藤形部太輔迄

申越候儀ニ付、形部太輔より蓮光院江之付状ニ而御奉書到来仕候、

30

〔正文有〕御状令拜見候、然者猿渡喜右衛門殿御願之儀ニ付、先

頃 龍山御書写之夏被尋候之處、無所見候由、因茲一通之趣令披露之處、被得其旨、尤御城中御日記明白之上ハ不及吳儀候間、近々被染御筆可下賜之由、依殿下御命召猿渡殿へ以奉書委細申入候間、猶亦右之趣御傳達頼入存候、猶期後信候条、不能詳候、恐惶謹言、

進藤刑部大輔(長之)

〔元禄十四巳〕十二月廿三日

名乘判

蓮光院様

31

〔正文有〕當夏就被懇望事、龍山御書之寫可有御覽之旨、御内

意之趣申入候処、自他之舊記等雖被相考、無其留之由、因茲一通之趣即令申沙汰之処、被得其旨候、御城中御日記之事所見之上者、不涉吳論之間、近々可賜御書之由、所殿下御氣色如此候也、

〔元禄十四年巳〕臘念三

猿渡喜右衛門殿

進藤刑部大輔(長之)

判

一村山自伯儀ニ付、從匠作様(吉貞)以鎌田六郎大夫被仰出候之旨、左記、

32

猶々系圖書写差遣候儀ニ付、御内意ニ而も中将様相達 貴聞及ニ候ハ、無用ニ仕候様ニ申候、

是又御意候、以上、

〔正文有〕一筆致啓達候、村山自伯老御事、頃日匠作様江別而安御心御出被成候、依之自伯老より之御咄も、御自分家より之わかされたる由候ニ付、系圖之儀直ニ御自書写、自伯老御方江差遣可然与被 思召上候、乍然御文所方引合等仕、中将様相達 貴聞事ニ候者無用ニ可仕候、此等之段、私より可申遣旨、任 御意如此ニ御座候、恐惶謹言、

『元祿十四年巳』

十二月廿五日

政由判

鎌田六郎太夫

猿渡喜右衛門殿

十二月廿五日之貴札致拜見候、然者村山自伯老頃日

匠作様江別而御心安御出被成候、依之自伯老より御申上候ハ、私家之分ニ而候ニ付、系圖之儀直ニ茂私へ被

仰聞置候由、節々御申上被成候、就中一家中申談書写、夫

自伯老へ差遣可然与被 思召上候、乍然御文書方引合等仕候而、 中将様達 貴聞事候ハ、無用ニ可仕候、

御内意ニ而茂申上儀ニ候ハ、無用ニ仕候様ニと 御意

候旨、謹而奉承知候、右ニ付而者、前方内ニ而 中将様達 貴聞置候訳御座候間、委細之趣御自分迄申上

候、様子ハ自伯老私家之分ニ而候由、先年於江戸松平彦大夫殿を以被仰聞候得共、其節私へ無御座候故、相

應之御返答申上置候処、去々年江戸へ相詰候節、又々小笠原三左衛門殿を以右之通被仰聞、殊更三左衛門殿

より 中将様江被仰上候、就夫 中将様江私より御直

ニ申上候ハ、自伯老より三左衛門殿を以右之通被仰聞

候得共、分之覚無御座候、乍然私六代之祖猿渡越中信

光と申者、天正年間、肥後・肥前・筑後表ニ伊集院肥

前・山田越前・右之越中三人同前被差遣置候、筑後一

國之城々、右之三人ニ而責崩入御手裏申候、是ニ付而

者越中事、数年彼地ニ相詰罷在候、此儀者上井伊勢日

帳ニ委數相見得申候、越中子三人之内二男与二郎ハ、

鍋嶋加賀守と越中遂合戦候節戦死仕候、外ニ同名之内

肥後・肥前間ニ残居候者無之候、若者数年彼地ニ罷在

候間、家来之内ニ同名之者茂罷居候条、左様成者之子

共相残居候而、連續為仕筋目ニ而茂御座候半哉与考申

候、外ニ分レ口之存寄無御座候、乍然罷下、系圖記録

等見合、同名中へ茂申談候ハ、相見得申儀茂可有御座

由申上候得ハ、 御意候ハ、多分家来筋ニ而茂可有之

候得共、彼方より喜右衛門家之分と被申候ハ、其通候

由申達、親類之付届仕候而可然候、右躰之衆ニ者親類

を被相求事も有之由ニ候、古キ家ニ而候得ば、御家中

ニ而茂古キ一筋之者を親類と被申度心入ニ而も候半

間、弥親類之筋ニ申達可然旨、段々御意之趣御座候  
ニ付、則三左衛門殿迄私家之分レニ而御座候由申達、  
其後自伯老芝御屋敷へ御見舞被成、私茂被召出近付ニ  
罷成候、其已後者互ニ每度通融仕候、左候而私系圖写  
宿元より取寄候而見合申候処ニ、元祖より十五代形部  
少輔信有二男猿渡与市兵衛信兼一筋之者、先祖代々戰  
死仕候、為養生遂出家、諸國を遍曆仕、直ニ肥前ニ相  
留、還俗仕候由相見得申候、此一筋ニ而茂可有御座欵  
与考付申候、村山名字之儀者、元祖三代藤三郎信高、  
末吉を領罷在、二男次郎末吉之内村山を領知仕名乗申  
候、此由緒之訳を以、自伯老村山を名乗来為被申ニ而  
茂可有御座候哉、何之筋ニ茂系圖ニ相見得申候一筋、  
別条茂有御座間敷欵与考申候ニ付、中將様江御直ニ  
申上候者、右之通考付申候間、罷下り候而系圖記録之  
表を相糺申、弥別条無御座候ハ、系圖之趣を茂書記、  
進申ニ而可有御座由達 貴聞置候、依之段々見合置申  
候趣茂御座候、右之一首尾ニ御座候得ハ、本より達  
貴聞、御意次第自伯老へ者申入筈御座候、然処此節從

匠作様御意之旨畏奉承知、弥相調へ系圖之趣書拔、自  
伯老へ遣申ニ而可有御座候、尤從 匠作様御意之旨者、  
中將様江者申上間敷候、此段御自分迄申上候、不入儀  
を長々敷申上候事、如何奉存候得共、中將様江申上  
候一筋之趣、難差扣申上候、御自分迄被聞召置、右之  
趣を以御請之儀者宜様ニ奉頼候、恐惶謹言、

(信安)  
猿渡喜右衛門

(元禄十五年)  
二月六日

名乗判

鎌田六郎大夫様